

阪大NOW

地域に生き世界に伸びる

No.96
2007

4 月号

トピックス

藪中外務審議官が卒業式で講話
2,694名の新入生が入学

クローズアップ

KOANで変わる大阪大学の学務情報システム

ナウスベシャル

学生達の声を教育改革に

— 学生と副学長・学生生活委員会との懇談会 —



大阪大学広報誌

2007 4月号

No. 96

目次

トピックス.....	2
クローズアップ.....	4
役員室だより.....	8
キャンパスニュース.....	29
記念講義.....	51
ナウスPECIAL.....	56
表彰等.....	58
人事.....	61
訃報.....	75
インフォメーション.....	77
名誉教授リレー随想.....	82
インタビュー.....	84
海外レポート.....	86
クラブ&サークル紹介.....	90
ガイドマップ.....	91
交流協定大学紹介.....	92



表紙写真：豊中キャンパス正門前外灯
撮影：安全衛生管理部教授 山本 仁
表紙デザイン：株式会社ココティエ

藪中外務審議官が卒業式で



藪中三十二外務審議官

2,694名の新入生が入学



講話

平成18年度卒業式が、3月23日(金)吹田地区体育館で挙行され、2,700名(男子1,945名、女子755名)が卒業しました。

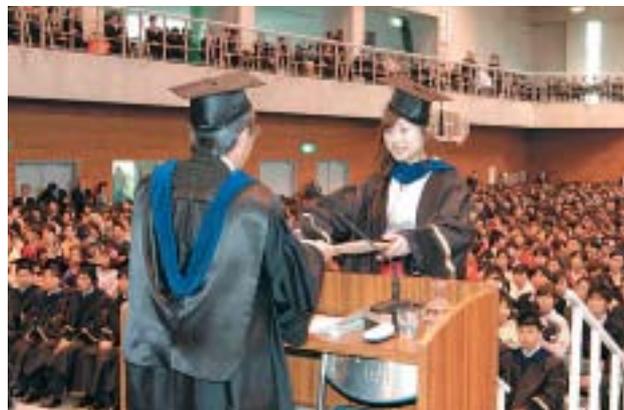
卒業式では、学位記授与に続き、楠本長三郎第2代総長の退官を記念して創設された「楠本賞」が20名の成績優秀者に贈られました。

午後からは、同体育館において大学院学位記授与式が挙行され、2,779名(修士:2,038名、法務博士(専門職):77名、博士:664名)に学位が授与されました。

また、卒業式と大学院学位記授与式では、大阪大学法学部OBの藪中三十二外務審議官による「記念講話」が行われ、外交官としての経験をもとに、「グローバルな視点を持ち、是非自らの手でグローバルスタンダードを作り出してもらいたい」とお祝いのメッセージが後輩達へ贈られました。

総長式辞 42～44ページに掲載

記念講話 44～47ページに掲載



平成19年度入学式が、4月2日(月)吹田地区体育館において挙行されました。

本学交響楽団によりワーグナー作曲「ニュールンベルグのマイスタージンガー前奏曲」が演奏された後、新入生2,694名を代表して、法学部の石川 仁さんが宣誓を行いました。

また、宮原秀夫総長から、「大学では、これまで知りたかったことを知るだけでなく、これまでそんなものがあることさえ知らなかった『ものの見方、問い方、考え方』にふれることが何よりも大事である」と告辞が述べられました。

続いて、オリエンテーションが行われ、学生生活全般についての説明の後、本学応援団による新入生歓迎エールがあり、盛大に新入生を迎えました。



総長告辞 48～50ページに掲載



で変わる大阪大学の学務情報システム

学務情報化特命プロジェクト

はじめに

2007年度履修登録が全学共通教育科目の抽選登録を皮切りに、3月9日から始まりました。履修登録をする学生は、学内のサイバーメディアセンターや研究室のPCから、また自宅や下宿のPCから、前年までの各自の成績を確認し、自身が所属している部局のシラバス以外にも他部局の履修希望科目のシラバスを参照して履修登録を行いました。昨年の10月に行われた履修登録は専門科目、大学院科目のみでしたが、今回は、抽選がある全学共通教育科目を含む本格的な運用の始まりになりました。

大阪大学の学生は、まずKOANで自分の受講する時間割を確認し、必要なシラバスを参照して、授業に出席するようになったのではないのでしょうか。2007年は学生の行動も大きく様変わりする年となるようです。

KOAN導入の計画からこれまで

2004年度に、事務職員が使用していた学務情報システムをハードウェアの負荷増大、業務変更への未対応、処理時間の増大などの理由からシステムをリプレイスして、新たに履修登録をWebシステムを用いて行うシステムに変更する案が学生部で計画されました。

この、計画を検討する過程で、宮原秀夫総長、鷺田清一理事・副学長、岸野文郎サイバーメディアセンター長（当時）が学務情報システムの更新計画について協議し、この機会に学務情報システム全般を見直し、学生、教職員に対してよりよいサービスを提供し、かつ現行業務を改善する目的を達成できるシステムの導入を計画することで一致しました。この総長の命を受け、教育・情報室の下に新たな



シンポジウムの様子

学務情報システム導入の実働部隊として学務情報化特命プロジェクトが発足しました。2005年1月に発足したこのプロジェクトは、プロジェクト責任者として鷺田副学長、プロジェクトリーダーとして下條真司サイバーメディアセンター長があたり、教員と職員がともに参加して議論、立案し、計画を実行していく組織として出発しました。

プロジェクトの掲げた学務情報システム導入による期待効果は、システムを利用する学生、教員、職員へ以下のものを各会議などで提示しました。

学生向け

履修登録、シラバス参照、成績参照等をWebベースで対応可能とする。

Web履修登録により、卒業要件を見据えた主体的な履修選択を実現する。

携帯電話から休講情報などの参照を可能とする。

教員向け

クラス情報、担当学生の情報など、学生指導に必要な情報の参照を可能とする。

授業アンケートの作成・データ収集・分析などの業務負荷を削減する。

成績記入、シラバス記入を電子的に行い、紙媒体の授受を削減する。

職員向け

データの一元管理による二重入力、重複管理を削減する。

紙の授受、各種訂正手続きなどの窓口業務を削減する。

学務データの加工・分析を容易にする。

このプロジェクトでは、学務情報システムを大学独自で開発するのではなく、他の総合大学や国立大学で導入実績のあるパッケージソフトを採用することによって導入期間を短縮し、短期間で効果を実現する方針をとることとしました。大学独自で開発する場合のデメリットは、教務関係事務を理解している職員が情報システムに関する理解が必ずしも高いとは言えない場合が多く、要件漏れをおこしやすいことがあげられます。パッケージの場合は、基本的には、そのパッケージで用意されている機能を採用するかどうかの決定になりますので、教務関係事務を理解している職員が要件の決定に参加しやすいことがあります。そこで、新日鉄ソリューションズ社製パッケージソフト（CampusSquare）に決定した後、各部局の協力により、CRP（Conference Room Pilot パッケージソフトの機能で業務が行えるか実機を用いて検証する方法）を実施し、各

部局の関係者と協議の上、KOANの機能を確定していきました。

2006年1月にシステムが納品され、並行稼働を行いながら、管理者の教育、マスターデータの整備など、スタートに向けて準備を進めました。

また、2006年5月23日には「学務情報システム(KOAN)とWebCTに関するシンポジウム」を開催しました。このシンポジウムには熊本大学から杉谷賢一先生、広島大学から安武公一先生をお招きして、各大学の現状などをお話しいただきました。

7月には大学教育実践センターによる授業アンケートが行われました。これが、学生が初めてKOANに触れた体験となりました。

10月にはサイバーメディアセンターの端末を用いて、シラバスの公開、専門科目、大学院科目の履修登録を行いました。このときの履修登録は、所属部局・学年によって、履修登録日と登録場所を分け、学生が混乱しないよう配慮しました。学生からは便利になったとの声が寄せられましたが、一部では、KOANの反応時間が遅くなったことがあり、その改善を求める意見も寄せられました。

12月以降には教員によるWebシステムでの成績登録を行いました。現在は、新入生を含む学生、教職員に履修確認、成績確認、シラバス参照など様々に利用されています。

2007年4月4日から5日にかけて約2,700名の新入生の履修登録を行いました。同6日の午前9時30分から抽選結果発表を行い、同日午後4時から追加登録を行いました。2006年度までは、外注パンチで電子データを作成し、結果発表まで1週間を要していました。

学務情報システム担当者会議

学務情報化特命プロジェクトでは、学生が所属する各部局の教員と教務担当教員と事務職員に集まっていただき運用等を議論していただく場として、2006年4月から学務情報システム担当者会議(KOAN担当者会議)を発足させて、ほぼ月1回の割合でKOANの運用に係る議論を行っていただいております。また、ここでの議論は、教育課程委員会、教務的事項の解決をお願いしている情報基盤委員会等へ報告しています。

KOANのロゴマークと愛称の由来

KOANのロゴマークはコミュニケーションデザイン・センターの久保田 徹特任講師が作成されました。



KOANのロゴマーク

また、「KOAN」という愛称は、プロジェクトが命名しましたが、“Knowledge of Osaka University Academic Nucleus”の頭文字を取って付けられています。これは、大阪大学の源流となった適塾の緒方洪庵にちなんだ命名でもあります。

KOANの利用

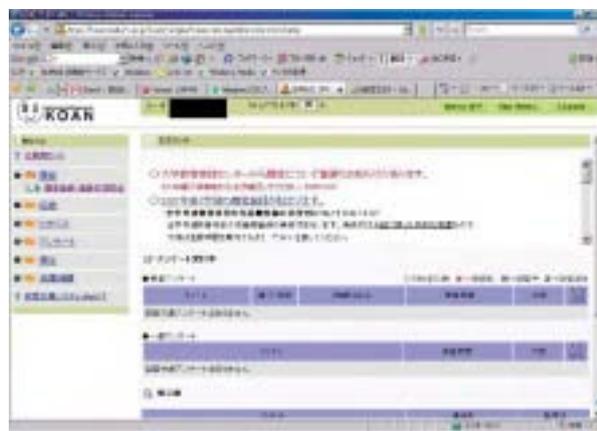
KOANの利用者は、学生、教員(非常勤講師を含む)、教務担当職員、学生部職員、授業料債権担当職員等です。利用者数は学生約20,000人、教職員約2,000名になります。

すべての利用者は、大阪大学IT認証基盤を利用しますので、大阪大学個人IDを使ってログインしています。



KOANポータルサイト

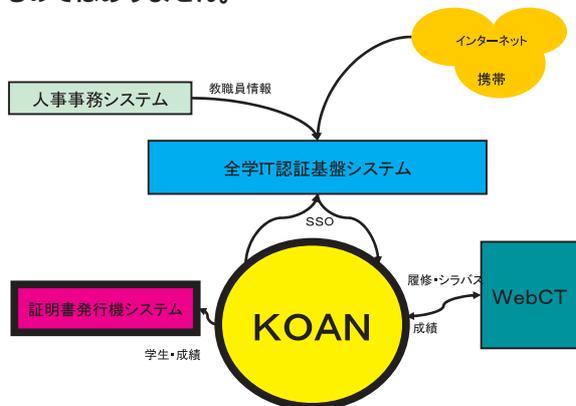
KOANのインターフェイスとしては、学生、教員が主に利用するWeb画面と職員が利用するクライアント/サーバシステムで構成されています。Webは学外のPCからも利用が可能です。クライアント/サーバは大阪大学の事務情報ネットワークからのみアクセスができるようになっています。



学生が利用するKOANのWeb画面

KOANを構成するシステム

KOAN はいわゆる教務系のシステムのみで構成されているものではありません。



KOAN と他のシステムとの関係

KOAN を構成しているシステムは、学籍管理、カリキュラム管理、履修管理、成績管理、判定管理、証明書管理、アンケート、シラバス、掲示（携帯電話からの参照を含む）、休講・補講（携帯電話からの参照を含む）、学費、入学料免除、授業料免除、奨学金、就職の各システムです。これらのシステムの中には、システム移行中で平行運用を行っているなどの本格運用に至っていないシステムもありますが、2007年度中に本格運用を始める計画になっています。

また、証明書自動発行機と連携しており、これまでは年4回ほど成績データを証明書自動発行機に移行させていましたが、連携により修得した成績が原則的には翌日には証明書に記載されることとなっています。

さらに、KOAN とは独立したシステムではありますが、e-learning システムである WebCT とも連携しており、履修者データ、シラバスの WebCT への提供、成績データの KOAN への反映など、WebCT の利便性の向上に寄与しています。

KOAN は、学部生、大学院生、研究生、科目等履修生、特別研究学生、特別聴講学生、歯科技工士学校生など約 87,000 名分の学籍情報を管理しており、Web の利用は、在学者である約 20,000 名が対象になります。さらに、教職員は約 5,000 名が登録されています。

おもなシステムの概要は以下のようになります。

<学籍システム>

先にも書きましたが、OB を含んだ約 87,000 名の学籍、及び履歴を管理しています。

学籍発生から、卒業・修了、学籍異動を記録していますが、入試システムではありませんので、入試情報は保持していません。

長期履修生制度にも対応しています。

学籍番号の付番ルールを変更し、学科変更、転学部、研究科の変更などの時には、学籍番号が変更されます。学籍番号を紐づけることによって、先の学籍情報も参照することができます。古い学務情報システムでは、転学部などの時でも学籍番号が変更になりませんでしたので、学籍番号だけで所属を判断できませんでしたが、平成 18 年 10 月以降は、所属に合わせて学籍番号を付番することとしています。

<掲示および休講・補講>

参照は携帯電話からも可能です。学生は吹田で豊中の、また、豊中で吹田の情報を得ることができます。

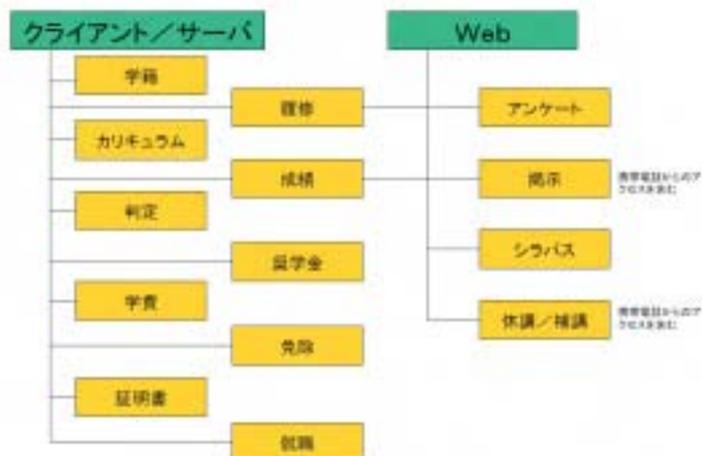
<学費>

学籍管理と連携して、学生の授業料を管理します。いままでは、教務担当係と学費担当係が別々に学籍を管理していました。学費システムを導入することにより、教務担当係で確認した学籍（入学や退学、休学、卒業などの学籍異動）を学費担当係が利用できるようになり、授業料の確定が行いやすくなることを見込まれています。また、各部局の授業料債権担当の業務が削減できることが期待されています。今年度、年度の前半を旧学費システムとの並行稼働とし、年度後半から本格運用に入る予定です。

<入学料免除・授業料免除・奨学金>

このシステムでは、入学料免除・授業料免除・奨学金の申請から決定、奨学生のデータ管理を行えます。

今までは、異なったシステムで学籍及び学費と入学料免除・授業料免除・奨学金を管理していましたので管理が煩雑でしたが、連携が容易になり他の職員の手を経ることなく管理ができるようになります。



KOAN 機能一覧

KOANによる学務業務改善

古い学務情報システムは、クライアント/サーバシステムでありましたが、データの修正等は管理者に依頼しなければ修正できないものがあるなどの不便な部分が多くありました。KOANは、基本的には、データを入力した部署でデータを修正できるようになっています。これにより、管理者に依頼しなくても様々な修正がユーザで出来るようになっていきます。

KOANの大きな特色は、Webシステムを利用して事務を行うところにあります。例えば、履修登録では、今まで外注で学生が提出した履修登録願を電子データ化していました。そのために、履修者名簿ができあがるのは、1学期であれば、5月のゴールデンウィーク明け以降などということは当たり前のことでした。KOANでは、履修登録がリアルタイムで履修者名簿に反映していますので、すぐに履修者を把握することが出来るようになりました。当然、外注費用の削減にもなっています。成績登録についても成績提出から、確定までの期間を短縮できるようになると考えられます。これも、外注費用の削減があります。

今は、業務改善を行う過程でありますので、導入の目的である、サービスの向上、業務の改善を進めていくためにKOANのシステムに関する要望だけでなく、運用に関する要望も検討していかなければなりません。学務情報システム担当者会議（KOAN担当者会議）で議論していただいておりますが、2007年1月には各部局からいただいた要望を纏め予算要求に反映しました。ただし、システム導入の目的や予算の制約から必ずしも使っていただく教職員、学生の希望に添えない場合があります。

KOANの今後

本年は、大阪大学と大阪外国語大学が統合されます。大阪外国語大学のシステムから移行し、KOANに統一されることとなりますので、運用に支障がでないよう検討を続けています。

本年度は、主に学籍の移行を行います。当面は、大阪外国語大学のシステムとの平行稼働となりますが、履修や成績管理の基礎であり、学費も関係しますので、現在の大阪外国語大学学生の学籍をまず移行させることとなっています。

来年度は、本年10月に統合した外国語学部が大阪大学の学生を受け入れる初年度です。この学生が大阪大学の学生として履修登録ができるようにシステムを整備するのが第2段階の主な任務です。

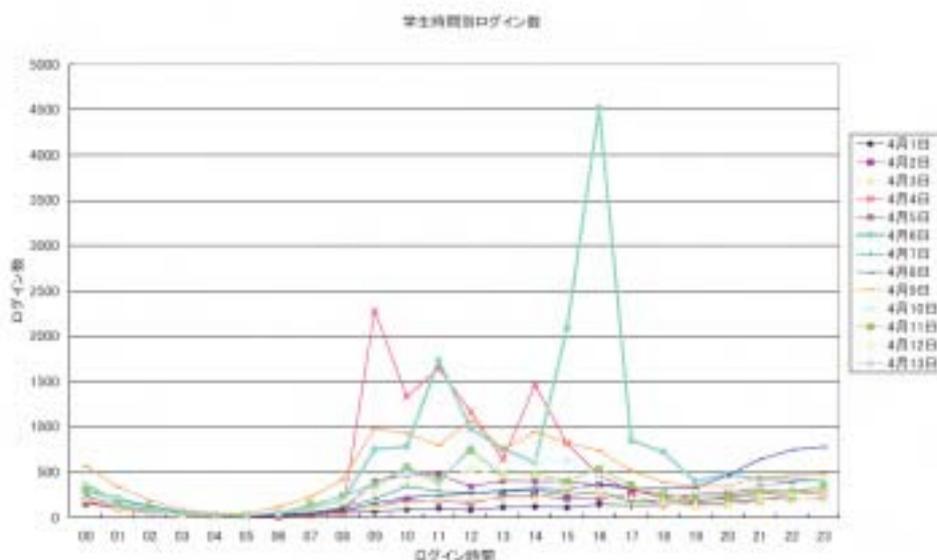
続いて、現に在籍する学生の履修登録が2008年10月に行えるように整備するのが第3段階の任務になります。

2008年10月からは、現在の大阪外国語大学学生を含めたすべての学生にKOANを利用してもらうことを目指しています。システムはKOANに一元化されますが、運用は調整を経て統合を行う予定です。

KOANのアクセス数が、4月に入って大きくのびています。毎日3,000件以上のアクセスがあり、8,000件を超える日もあります。このように、学生が大学生活の中でKOANを利用しています。Webによって学内外から就学に必要な情報の確認を行うという行為は、いままでの学部ごとに教務担当係の窓口や学生掲示板などで情報確認を行っていたことと比べると、学生の生活を大きく変えたと言えるのではないのでしょうか。

KOANを短期間に導入し、たくさんの方に使っていただいております。KOANが学生、教職員の日常をサポートしているという重大な責任が発生しています。KOANの担当者が常に気にかけていることは、当初から目指しているサービスの向上と業務改善は成果を上げているかということです。まだ、KOANは実運用開始から1年を経っていません。このKOANがシステムによるサービスの向上につながっているか、業務改善は見かけではなく本当のものなのか、今後、ご意見をいただいて、KOANをみなさんとともに育てていきたいと思っております。

みなさんがKOANを育てるこれからの主役になっていただきますようお願いいたします。



4月1日から13日までのKOANのアクセス数

役員室だより

2007.4 Vol.17

本学は、中期目標・計画の達成に向けて平成16年度からの各年度計画をこれまで着実に実施してきているところであります。10月からは大阪外国語大学との統合により大阪大学の教育・研究・社会貢献それぞれにおいて新たな要素を加味した計画の下、更なる充実を目指していくこととなります。

大阪大学の今後の発展は、言うまでもなく構成員皆様の能力の発揮と努力の結集に依るところでありますので、どうぞよろしくお願いいたします。

平成19年4月現在の各室（本部）員は18頁に掲載しているとおりです。

総合計画室

平成19年度の年度計画

平成19年度の本学年度計画については、各部局の年度計画を踏まえて、総合計画室等の6室と国際交流推進本部が協力して大学版をとりまとめ、3月末に文科省へ提出しました（既に大阪大学ホームページに掲載済）。また、3月14日に開催された経営協議会において年度計画の主要事項について説明を行いました。（主要事項は18頁を参照。）

組織の整備

平成19年4月から新設、改組など新たに整備された教育研究組織は、次のとおりです。

【研究科関係】

《連携分野（連携講座）の設置》

研究科名	専攻名	連携分野（講座）名	連携機関名	
理学研究科	物理学専攻	先端物理学 連携分野	(独) 理化学研究所	
医学系研究科	病態制御医学専攻	病態制御基礎医学 連携分野	(独) 医薬基盤研究所	
		循環微小画像医学 連携分野	国立循環器病センター	
	(注) 微小循環動態学連携分野からの名称変更			
	外科系臨床医学専攻	循環制御医学 連携分野	国立循環器病センター	
		(注) 人工臓器医学連携分野からの名称変更		
		腫瘍医学 連携分野	大阪府立成人病センター	
(注) 予防環境医学専攻健康予知医学連携分野からの所属専攻及び名称の変更				
保健学専攻	分子イメージング学 連携分野		国立循環器病センター	
		血栓症診断学 連携分野		
	粒子線治療学 連携分野		兵庫県立粒子線医療センター	

基礎工学研究科	物質創成専攻	量子機能融合 連携分野	<ul style="list-style-type: none"> 放射光利用研究促進機構 (財) 高輝度光科学研究センター (独) 理化学研究所播磨研究所放射光科学総合研究センター (独) 産業技術総合研究所 (独) 情報通信研究機構新世代ネットワーク研究センター
		人間社会発達環境学 連携分野	<ul style="list-style-type: none"> 神戸大学大学院人間発達環境科学研究科 (独) 産業技術総合研究所関西センター
	機能創成専攻	デザインバイオニクス 連携分野	<ul style="list-style-type: none"> (独) 産業技術総合研究所 国立循環器病センター 兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所
	システム創成専攻	先端センシングエレクトロニクス 連携分野	<ul style="list-style-type: none"> 大阪府立産業総合研究所 (独) 情報通信研究機構 三菱重工 (株) (独) 物質・材料研究機構
情報科学研究科	マルチメディア工学専攻	ナレッジクラスター 連携講座	<ul style="list-style-type: none"> 京都大学大学院情報学研究科 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科 (独) 情報通信研究機構
		ユニバーサル対話エージェント 連携講座	<ul style="list-style-type: none"> 京都大学大学院情報学研究科 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科 (独) 情報通信研究機構 日本電信電話 (株) コミュニケーション科学基礎研究所
	コンピュータサイエンス専攻	ユニバーサルソサイエティ 連携講座	<ul style="list-style-type: none"> 京都大学学術情報メディアセンター 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科 (独) 情報通信研究機構 日本電信電話 (株) コミュニケーション科学基礎研究所
	情報システム工学専攻	高臨場感コミュニケーション 連携講座	<ul style="list-style-type: none"> 京都大学学術情報メディアセンター 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科 (独) 情報通信研究機構
生命機能研究科	生命機能専攻	免疫システム学 連携分野	(独) 理化学研究所
		脳統制機構学 連携分野	(財) 大阪バイオサイエンス研究所
		蛋白質機能情報科学 連携分野	(独) 医薬基盤研究所

【学内共同教育研究施設等】

《新設》

科学教育機器リノベーションセンター (工作センターを廃止転換)
グローバルコラボレーションセンター

《連携分野の設置》

部局名	連携分野名	連携機関名
太陽エネルギー化学研究センター	エネルギー・環境触媒研究 連携分野	<ul style="list-style-type: none"> 東京大学大学院工学研究科 名古屋大学大学院工学研究科

役員室だより

【附属病院関係】

医学部附属病院 中央診療施設の再編

(変更前)

中央診療施設 臨床検査部 手術部 放射線部 周産期母子医療センター 材料部 集中治療部 病理部 リハビリテーション部 輸血部 総合診療部 医療情報部 救命救急センター 未来医療センター 感染制御部 中央クオリティマネジメント部
中央施設等 サプライセンター MEサービス部 臨床治験事務センター 血液浄化部 保健医療福祉ネットワーク部 卒後臨床研修センター 移植医療部 栄養マネジメント部 遺伝子診療部 看護部キャリア開発センター 脳卒中センター 前立腺センター 化学療法部 睡眠医療センター 内視鏡センター 疼痛医療センター 生殖医療センター 超音波検査センター



(変更後)

中央診療施設 臨床検査部 手術部 放射線部 周産期母子医療センター 材料部 集中治療部 病理部 リハビリテーション部 輸血部 総合診療部 医療情報部 高度救命救急センター 未来医療センター 感染制御部 中央クオリティマネジメント部 サプライセンター MEサービス部 臨床治験事務センター 血液浄化部 保健医療福祉ネットワーク部 卒後臨床研修センター 移植医療部 栄養マネジメント部 遺伝子診療部 看護部キャリア開発センター 脳卒中センター 前立腺センター 化学療法部 睡眠医療センター 内視鏡センター 疼痛医療センター 生殖医療センター 超音波検査センター ハートセンター
--

歯学部附属病院 一般歯科総合診療センターの設置

旧留学生センターの有効活用

施設マネジメント委員会では、昨年来、吹田キャンパスの旧留学生センター建物の有効活用について検討を行ってきました。その結果、同建物を下の外観イメージ図のように千里門入り口付近に相応しい景観となるように改修することとし、改修後は、現在の「(工学部内)郵便局」が同建物に移転するほか、「大阪大学出版会」と今年4月に新設された「グローバルコラボレーションセンター」が入り、それぞれ利活用することになりました。なお、建物改修の完了時期は9月の予定です。この建物の名称は同委員会で検討中です。



Before

After



外観イメージ

教育・情報室

教育・情報室は、大阪大学の教育の質を上げるために、本年度は次のような課題に取り組みます。

統合に向けた教育体制の整備

- ・本年10月の大阪外国語大学との統合とともに設置される新しい大学院の専攻、学部の学科の教育プログラムが着実に推進されるよう、各研究科・学部・センターと協同しつつ本格的な準備を行います。
- ・統合を契機に、大阪大学の三つの教育目標のうち、第三の「国際性の涵養」教育をより充実させるため、グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）を設置し、国際協力を中心とする全学的な教育実践とそのサポートを開始します。また、そうした教育事業を広範に展開するために国際協力機構（JICA）、国立民族学博物館を連携協定を結び、連携協力を強化します。

全学共通教育の充実

- ・学生が、何を学ぶのか分かりやすいよう科目編成を一新した全学共通教育を本年度より実施します。

大学院教育の推進

- ・大学院教育において研究の視野を拡げ、領域横断的な研究課題に取り組む能力を育成するために、「主専攻」のほかに「副プログラム」を構築し、その設計を行います。
- ・「魅力ある大学院教育」イニシアティブ等、すでに開始されている外部資金による大学院教育を充実させるとともに、新しいプログラムにも積極的に取り組みます。
- ・「研究者の社会的・倫理的責任」を主題とした大学院全学共通教育を開始します。

学生支援及びFD

- ・昨年度設置した大学教育実践センター・キャリア教育支援部門の教育事業を推進するとともに、キャリア支援室の活動をいっそう充実させます。
- ・昨年度改善したTA制度を活用することで、さらにきめ細かな教育を目指します。
- ・全学FD研修を、全学の助教を対象に行うとともに、順次、全学構成員に研修を広げていきます。
- ・副学長・学生生活委員と学生の懇談会を開き、教員と学生のコミュニケーションを活性化させます。

情報基盤の整備

- ・情報基盤デザイン機構を中心に、IT化を基盤とした教育・学務の質の向上を図り、また、外大との統合に向けて学務情報システム（KOAN）の統合・整備を行うとともに、WebCTその他のシステムを活用したE-learning環境整備を推進します。

大阪大学後援会との連携

- ・（大阪大学後援会の支援による）課外活動物品購入支援を継続して行います。
- ・（大阪大学後援会と連携しつつ）大阪大学出版会の教科書・教養書の出版活動を活性化します。

研究推進室

独立行政法人情報通信研究機構との情報通信分野における連携推進協定締結

大阪大学は、情報通信分野における共同研究、技術情報の交換、研究者の相互交流、シンポジウムの共同開催、研究設備の相互利用等を推進するため、2月22日(木)独立行政法人情報通信研究機構と連携推進協定を締結しました。本学と独立行政法人間との連携協定の締結は今回が初めてです。(写真は調印式での様子)



研究推進室は、馬越佑吉理事・副学長を室長とし、二神孝一教授、伊藤 正教授、仲野 徹教授、中嶋英雄教授、宮本欽生教授、小泉潤二教授、土井健史教授、原島 俊教授、今田幸二郎研究推進・国際部長を室員とし、平成19年度は、下記の項目を中心に研究の活性化を図ります。構成員各位のご協力をお願いします。

研究グランドデザインの策定と部局横断型プロジェクトの実施

5つの研究戦略WGを中心に部局横断型研究プロジェクトを立案・実施して新規研究分野の開拓を図ると共に、各種競争的資金獲得に向けての戦略的な企画・立案体制を構築します。また、各研究領域の研究グランドデザインを策定し、大阪大学の研究の将来像を示します。

科学教育機器リノベーションセンター設置と先端機器開発、大型装置の組織的整備

4月に設置された科学教育機器リノベーションセンターを中心に、学内の現有装置の修復・再整備と共有化による装置の有効利用を図ると共に、産業界とも連携して先端機器開発を行い研究の高度化を図ります。また、大型装置、共有機器の整備計画、いわゆる設備整備のマスタープランを作成し研究環境を整備します。

各種大型研究プロジェクトによる研究の高度化

21世紀COE、グローバルCOE、先端融合領域イノベーション創出拠点事業、世界トップレベル国際拠点形成促進プログラムを中心に各研究領域における研究の高度化と人材育成を行い、世界トップレベルの研究拠点を形成します。

産学連携と知的財産・技術移転体制の強化

技術交流会、企業・大学間研究連携協定の拡大による共同研究の大型化を図ります。また、共同研究講座制度を利用して、企業と大学が協働して先端技術及び基盤技術両面における開発研究を実施します。また、スーパー産学官連携本部事業を海外に展開し知財・共同研究の国際化を図ります。発明承継判定新基準を導入、TLOの再編を行い、戦略的な知財・技術移転並びに共同研究体制を構築します。

北摂をバイオ研究の拠点に

北摂地区には、大阪大学、国立循環器病センター、医薬基盤研究所、大阪バイオサイエンス研究所などの世界的なバイオ関連研究機関が集結しています。彩都バイオグランドデザイン、アクションプラン策定が大阪彩都バイオ戦略推進機構を中心に進められます。研究推進室、生命科学・生命工学研究推進機構を中心に彩都地区を大阪大学のサテライトキャンパスと位置づけ、彩都バイオ都市構想を提案すると共に、バイオ関連研究の活性化を図ります。

評価・広報室

18年度が一番大きな成果は、概算要求の部局ヒアリングにおいて、組織評価に基づく評価の結果を有効に活用できたことです。

19年度は、次の3つを大きな目標としています。

- (1) 平成20年度に行われる評価（暫定評価）への対応
平成16年度～19年度までの業務実績の成果の状況と、19年度からの教育水準の自己評価をとりまとめる。
- (2) 組織評価の実施
基礎評価と達成状況評価の実施、組織評価に基づく報告書の作成
- (3) 大阪外国語大学との統合（19年10月1日）に伴う広報活動
ホームページ、広報誌による学内外への広報と統合に伴うホームページのリニューアル

新年度からの体制

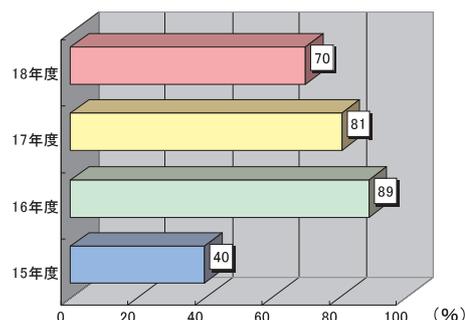
4月から新しいメンバーに交替し、新体制で評価・広報室が運営されます。

- 【新室員】 川端 亮 教授（人間科学研究科）
吉峰俊樹 教授（医学系研究科）
山中伸介 教授（工学研究科）

教員基礎データの登録・更新

データ管理分析室では、教員基礎データの更新状況（図）を調査し、3月の部局長会議で説明しました。

とくに研究論文については、研究業績の主要データの一つとなりますので、最新の情報を入力いただきますよう、ご協力をお願いします。



DMA NEWS-LETTER Vol.10 を発行

DMA NEWS-LETTER Vol.10 を発行しました。

Vol.10 では、研究業績データの代行入力開始、研究業績データの代行入力の流れ、Read（研究開発支援総合ディレクター）へデータを提供される方へ、教員基礎データ更新人数等を掲載しています。

詳しくは、学内専用ホームページ「教員基礎データ関係」をご覧ください。



Handai NEWS Letter No.35 を発行

阪大ニューズレター No.35 を発行しました。No.35 では、「科学の発展と研究」をテーマとして座談会を行いました。

金森順次郎国際高等研究所長のインタビューも掲載しています。



財務・会計室

平成18年度重点経費及び間接経費の執行計画

財務・会計室で策定した平成18年度重点経費（第2次）執行計画案及び間接経費（第3次）執行計画案が役員会で承認されました。

採択事業の詳細は以下のとおりです。

・重点経費（第2次）2事業

（単位：千円）

部局名等	事項名	金額
事務局(情報推進部)	学務情報システム追加カスタマイズ	7,613
事務局(学生部)	新稲国際寮フェンス設置工事	1,200
計		8,813

・間接経費（第3次）13事業

（単位：千円）

部局名等	事項名	金額
事務局(財務部)	消費税納付額予算不足額	59,845
知的財産本部	機関帰属知的財産の出願等経費(追加)	26,656
附属図書館	附属図書館本館閲覧席の増設経費	9,965
蛋白質研究所	バイオ関連多目的研究施設改修工事(貸借)	7,800
事務局(施設部)	吹田市給水加入金(歯学部・歯学部附属病院)	6,300
事務局(総合計画室)	「新たけのこ」保育所設計業務委託	4,420
知的財産本部	知的財産の和解交渉に伴う経費	4,287
安全衛生管理部	AED(自動体外式除細動器)の設置	3,985
事務局(情報推進部)	財務会計システム追加カスタマイズ	3,738
事務局(国際交流推進本部)	海外拠点運営経費(サンフランシスコセンター、タイ・バンコクセンター、グローニンゲンセンター)(追加)	3,000
事務局(総務部)	グローバルコラボレーションセンター設置経費	3,000
ラジオアイソトープ総合センター	セキュリティ対策用監視・記録システムの更新	2,876
事務局(総合計画室)	GSEフロント改修計画設計業務委託	2,205
計		138,077

平成18年度予算補正（第2次）

法人化後の予算は、学生納付金収入（授業料、入学料、検定料）附属病院収入などの自己収入額の実績に応じて適宜収入予算を見直し、その増減に対応した支出予算の見直しを行う作業、つまり予算補正案の編成作業を行う必要があります。

このため、上半期の収入実績を基礎とした収入見込額との増減額を支出予算に反映させた予算補正（第1次）を行なったところですが、あらためて財務・会計室で策定した1月末までの収入実績に基づく予算補正（第2次）案が役員会で承認されました。

平成19年度の予算配分等

平成19年度の予算配分については、財務・会計室で策定した国立大学法人大阪大学予算編成方針案、平成19年度予算配分基本方針案等が役員会で承認されました。主な変更点は、重点経費及び間接経費の廃止と教育研究等重点推進経費の新設、大学基盤推進経費における施設老朽化対策経費の計画的な確保、医学部附属病院の自立的な経営判断による予算執行範囲の拡大などです。

財務・会計室ではこの予算配分方針をはじめとして、平成19年度においては長期にわたる安定的な財政基盤の確立を目指して、自己収入の増加、経費の抑制、資産の効率的・効果的な運用等についてさらに検討を進めていく予定です。

人事労務室

教職員評価制度に係る苦情処理の手続きに関する規程の制定

本学では、教職員に係る評価制度に基づく昇給又は昇格等について、その苦情処理の手続きを定めました。(学内専用ホームページに掲載)

【平成19年3月20日制定】

サバティカル制度に関する指針の制定

本学では、教員の教育研究能力の向上を目的として、その職務の全部又は一部を一定期間免除することにより、教員に自己研鑽等の機会を提供する制度(以下「サバティカル制度」という。)の指針を制定し、各部署等が同制度を設ける場合の考え方をまとめました。

【平成19年2月26日制定】

国際交流推進本部

今、世界で大学の国際交流が非常な勢いで進んでいます。高等教育は、もはや一国のなかに限定されたものではなく、学生が国境を越えて移動し、また大学の海外進出も目新しいものではなくなっています。ヨーロッパの大学では、ポローニャ・プロセスやエラスムス・プログラムのもとに、域内大学間の単位互換が進み、学生の移動が高まり、多くの大学で留学生が急増しています。ハーバード大学では学部学生の半数以上は、大学教育の一環として、在学中に意味のある国際経験を持つことを選択するといわれています。中国や韓国の大学における国際性の進展にも著しいものがあります。

こうした流れのなかにあって、大阪大学は「世界に開かれた魅力ある大学」の実現を目指しています。私たちは、大学における研究・教育の成果は人類全体によって享受すべきものと考えます。大学は、その意味で、いわば国際公共財といえます。そして大学が人類全体に奉仕するためには、何よりも「世界に開かれた魅力ある大学」であることが必要です。また「世界に開かれた魅力ある大学」であってこそ、世界各地から優秀な学生や研究者が集まり、研究・教育の一層の発展と国際貢献が可能となります。こうしたことを実現するために、大阪大学は、

- (1) 海外研究者・研究機関との連携促進と、研究成果の世界への発信
- (2) 国際社会でコミュニケーションし、創造的・建設的に行動できる人材の育成
- (3) アジアにおける共同研究コミュニティ構築による国際貢献

に、努めています。

海外教育研究センター

大阪大学の国際交流において特筆すべきものに、海外教育研究センターがあります。2004年にアメリカのサンフランシスコ、2005年にオランダのグローニンゲン、2006年にタイのバンコクにセンターが開かれました。これらのセンターは、各地域における大阪大学のプレゼンスを高め、そうすることにより、学生・研究者・研究成果の交流を促進することを目指しています。これまでサンフランシスコセンターからは、主として共通教育の学生を対象に「世界は今 - サンフランシスコから」や「学問のすすめ - 米国の大学キャンパスから」という遠隔講義を行ってきました。また、「現代教育ニーズ支援プログラム」や「海外インターンシッププログラム」などの外部資金獲得に参画して来ました。大阪大学が海外教育研究センターを持っていることが、これらのプロジェクトが採択される上で、有利であったと考えられます。また、最近の活動では、大阪大学サンフランシスコセンターが中心となって、サンフランシスコ・ベイエリアに拠点を持つ日本の大学・学術機関のネットワーク JUNBA (Japanese University Network in the Bay Area) を立ち上げました。これは、大阪大学のプレゼン

だけでなく、日本の大学全体のプレゼンスを高めることも重要であると考えます。(阪大NOW2月号参照)

グローバルコラボレーションセンター

この4月から、グローバルコラボレーションセンターを開設しました。これは、大阪外国語大学との統合による両大学の教育資源の融合と相乗効果に基づき、国際協力と共生社会に関する研究を推進し、真の国際性を目指した人材の養成を行うとともに、その成果に基づく国際協力を実践することを目的としています。本学は、これまで、いろいろな部局で、さまざまな形で国際協力やグローバルな問題に取り組んできましたが、今後はこのような取り組みを文系・理系にかかわらず広く有効に連携させ、同時に国内外の大学および研究機関、国際機関その他の機関との連携も深めつつ、上記の事業を行っていかようとするものです。

国際企画室

大阪大学は「大学国際戦略本部強化事業」に採択されたことにより、国際企画室を作りました。これは大阪大学の国際交流の戦略性を高めようとするものです。平成18年度には、次のような活動を行ってきました。

- ・高等教育のグローバル化と世界の大学の国際化動向、および大阪大学における国際交流の現状を調査・分析した「世界のなかの大阪大学：現状分析報告」の刊行
- ・世界の大学ランキングなど大学の国際的評価に対応し、今後の方針を策定するための情報収集及び分析および各機関への働きかけ
- ・大阪大学における留学生数の動向と将来見通しについて、他大学の動向を含む情報収集と現状分析、今後の留学生戦略策定のための提言
- ・学内各部局における国際交流の現状や具体的ニーズを把握し、国際交流諸施策を戦略的に進めるため、学内12部局の国際交流担当者との部局情報交換会を主宰し、データ集・報告書を作成
- ・大学国際化をになう人材育成のため、国際交流に関する教職員研修会の実施
- ・国際交流推進本部HPの開設
- ・国際会議などにおける大阪大学紹介資料の作成
- ・国際交流推進本部の重点推進事項を協議するワーキング・グループへの支援

学内の国際化

これまで、大阪大学では本学在籍の留学生・外国人研究者を主な対象とするオンライン・コミュニティサイトであるGCN Osaka (<http://www.gcn-osaka.jp/>)を運営してきました。さらに、それを拡張して、海外にいる同窓生向けの情報を集めたページ(GCN Worldwide)も開設しました(<http://www.gcn-osaka.jp/gcn-ww/>)。また、留学生・外国人研究者の来日時における入国関係の手続きや宿舍紹介を、一元的に行うワンストップ・サービスの実施を計画しています。こうしたサービスを一体化して効率的に行うことにより、受け入れ部局や教員の負担を軽減しようとするものです。

また、大阪大学は本学学生の海外留学を強く推進しています。そのため、大阪大学独自の海外留学支援制度を作りました。今年度も「阪大生のための海外留学オリエンテーション」を行うことにしています。

4月からの新体制

総合計画室 11名

○鈴木 直(理事・副学長) 堀井 俊宏(微・教授)
 青江 秀史(司法・教授) 沖田 知子(言・教授)
 滝澤 温彦(理・教授) 長瀬 護(総務部次長)
 堀 正二(医・教授) 高橋 清夫(財務部長)
 前田 正知(薬・教授) 西川 和慶(施設部長)
 井上 克郎(情・教授)

教育・情報室 10名

○鷺田 清一(理事・副学長) 西尾 章治郎(情・教授)
 金水 敏(文・教授) 玉井 暉(文・教授)
 久保 司郎(工・教授) 関 昭裕(学生部長)
 大和谷 厚(医・教授) 木下 伸二(情報推進部長)
 下條 真司(サ・教授)
 高杉 英一(実践・教授)

研究推進室 10名

○馬 越 佑吉(理事・副学長) 小泉 潤二(人・教授)
 二神 孝一(経・教授) 土井 健史(薬・教授)
 伊藤 正(基・教授) 原島 俊(工・教授)
 仲野 徹(生・教授) 今田 幸二郎(研究推進・
 国際部長)
 中嶋 英雄(産・教授)
 宮本 欽生(接・教授)

評価・広報室 12名

○馬場 明道(理事・副学長) 今瀬 真(情・教授)
 川端 亮(人・教授) 村上 伸也(歯・教授)
 中尾 敏充(法・教授) 谷澤 克行(産・教授)
 常深 博(理・教授) 竹村 治雄(サ・教授)
 山中 伸介(工・教授) 長瀬 護(総務部次長)
 吉峰 俊樹(医・教授) 松本 紀文(評価・広報課長)

財務・会計室 9名

○仁科 一彦(理事・副学長) 伊達 悦朗(情・教授)
 阿部 顕三(経・教授) 長谷 俊治(蛋・教授)
 片岡 勲(工・教授) 高橋 清夫(財務部長)
 長井 英生(基・教授)
 古郷 幹彦(歯・教授)
 武田 裕(医・教授)

人事労務室 11名

○佐々木 順司(理事・事務局長) 小林 資正(薬・教授)
 小嶋 典明(司法・教授) 盛岡 通(工・教授)
 門田 守人(医・教授) 木下 夕口(微・教授)
 岡村 康行(基・教授) 岩切 平治(総務部長)
 大竹 文雄(社・教授) 三浦 新(人事課長)
 松繁 寿和(国・教授)

国際交流推進本部 8名

○橋本 日出男(理事) 江藤 靖弘(国際交流課長)
 古城 紀雄(留・教授) 角田 賢次(学生交流
 推進課長)
 山内 直人(国・教授)
 真島 和志(基・教授)
 高田 健治(歯・教授)
 土岐 博(核・教授)

総長補佐 6名

小泉 潤二(人・教授) 川合 知二(産・教授)
 小谷 真一(理・教授) 林 紀夫(医・教授)
 西田 正吾(基・教授) 大和谷 厚(医・教授)

○印は室(本部)長

【1. 業務運営】学び甲斐のある、研究し甲斐のある、働き甲斐のある大阪大学 に向けて

- 平成16～18年度に整備した制度・組織が旨く機能するかどうかの検証
- 計画の実質化
- 施設、設備のそれぞれについて、大学独自の自助努力により整備できるものについては計画的に整備

(1)平成19年10月 大阪外国語大学との統合

(2)事務改革推進本部の設置による事務改革の推進

- ① 本部事務局組織の改革
- ② 部局事務組織の機能強化
- ③ 業務の標準化、集約化とITシステムの整備
- ④ グループ制の導入
- ⑤ 業務改善
- ⑥ 人員配置、人材育成
- ⑦ 競争的資金を用いた事務機能強化
- ⑧ 意識改革、コミュニケーション強化

【1. 業務運営】

(3) 全学的な効率的な研究教育支援体制の確立

- ・ 工作センターを改組拡充し、研究機器・教育機器のリユースや共同利用を促進し、全学的に効率的な設備整備を推進する「科学教育機器リノベーションセンター」を設置

(4)全学の情報基盤の整備

- ・ 外大との統合を見据えた高速・高セキュリティ基幹ネットワークの整備
- ・ 安全・安心なIT認証基盤環境の推進
- ・ ICカードによる統一的な認証機構の検討

(5)多様な人材活用の推進

- ・ 学内託児施設の整備(たけのこ保育園:収容定員20人 → 75人に拡充
 (まきば保育所 :収容定員24人)

【1. 業務運営】

- (6) 施設マネジメントの一層の推進
- 施設マネジメント委員会とキャンパスデザイン室が連携した計画的整備
 - Space Management, Cost Management, Quality Managementの実質化
 - 新しい施設整備手法の検討、設備の整備に関するマスタープランの作成
- (7)安全衛生管理体制、安全衛生教育の充実
- 安全衛生管理部と安全衛生に関係する各センター等との連携を強化し、安全衛生管理体制を更に充実
 - 核燃料物質の管理体制の整備を促進
 - 事故情報等の分析に基づき再発防止のための安全講習等の実施

3

【2. 財務】

- (1) 長期的な財政計画の策定
- (2) 教育研究等全般にわたる柔軟な重点的予算配分
重点経費、間接経費を廃止し、教育研究等重点推進経費を新設
- (3) 余裕資金を活用し、国債等による長期・短期運用の効果的な組み合わせによる資金運用

4

【3. 人事労務】

- (1) 大阪外国語大学との統合にあたり、大阪大学の人事制度との調整を図る。
- (2) 平成18年11月1日から導入した事務系職員の新たな個人評価制度を活用し、よりインセンティブを付与するため、業績手当及び昇給に反映させる。

5

【4. 評価・広報】

【4-1. 評価・自己点検】

- (1) 暫定評価への対応
平成20年度に実施される暫定評価に関し、平成16年度から平成19年度までの業務実績の成果の状況と、教育研究の達成状況評価をとりまとめる。
- (2) 基礎評価の全学実施
平成16年度(4部局実施)、平成17年度(全部局実施)の試行を踏まえ、全学を対象とした本格的な基礎評価を実施する(3年に1回の予定)。
- (3) 達成状況評価
平成18年度計画の達成状況の点検を平成19年度計画の進捗状況と平成20・21年度計画の修正なども含めた観点から行う。
- (4) 組織評価に基づき報告書の作成
平成16年度から平成18年度までの組織評価の結果に基づき、大学全体及び部局の活動実績の経年変化を統計データとして取りまとめた「大学年鑑」を作成し、公表する。

6

【4. 評価・広報】

- (5) 大阪大学基礎データシステムの整備・充実
平成13年度から稼働している現システムの老朽化の改善・新規更新と外大との統合に伴うシステムの強化を図る。
- (6) 大学情報データベースへの対応
現在、大学評価・学位授与機構がシステム構築中の大学情報データベースに関し、大学基礎データの提供や各部局からの追加データの収集などを進める。
- (7) 教員評価のあり方の検討
教育研究における教員の個人評価の要請が年々高まりつつある中で、国立大学法人評価委員会の考え方や社会の趨勢等と見据えつつ教員評価のあり方の検討を進めていく。

7

【4. 評価・広報】

【4-2. 広報・情報提供】

- (1) 大阪外国語大学との統合(平成19年10月1日)に伴う広報活動
各室レベルでのホームページ、広報誌による学内外への広報と統合に伴うホームページのリニューアルを図る。
- (2) 英文ホームページの充実
海外の研究者、留学希望者に向け、英文ホームページの提供情報や更新頻度等をリニューアルする。

8

【5. 教育】 三つの教育目標「教養・デザイン力・国際性の涵養」のさらなる推進、ならびに大阪外国大学との統合により平成20年度から発足する新しい教育実践にむけての取り組み

- (1) 「国際性の涵養」のためにグローバルコラボレーションセンターを設置し、国際協力・交流を中心とした全学的な教育実践とそのサポートを開始する。
- (2) 国際協力の教育実践のためにJICA、国立民族学博物館と連携協定を結ぶ。
- (3) 大阪外国語大学との統合により発足する新しい大学院新専攻・学部新学科の教育事業へ向けての取り組み
(文学研究科文化動態論専攻、人間科学研究科グローバル人間学専攻、言語文化研究科言語社会専攻、法学部国際公共政策学科)

OSAKA UNIVERSITY

9

【5. 教育】

- (4) 科目編成を一新した全学共通教育科目の開始
(大学教育実践センター)
- (5) 全学FD活動の推進
- (6) IT化を基盤とした教育・学務の質の向上・効率化
(情報基盤デザイン機構)
 - ・ 外大との統合に向けての学務情報システム(KOAN)の統合・整備
 - ・ WebCTその他のシステムを活用したE-learning環境の推進
- (7) TA制度の改善と「教育の質の向上」のためのTA制度の活用

OSAKA UNIVERSITY

10

【5. 教育】

- (8) キャリア教育の推進
 - ・ 大学教育実践センターキャリア教育支援部門の教育事業の推進
 - ・ キャリア支援室の充実
- (9) 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ等、外部資金による教育事業への積極的な取り組み
- (10) 「研究者の社会的・倫理的責任」を主題とした全学共通教育の開始(CSCD)

OSAKA UNIVERSITY

11

【5. 教育】

- (11) 学生支援の充実
 - ・ 大阪大学教養教育奨学金(大阪大学後援会による支援)
 - ・ 課外活動物品購入支援 (")
 - ・ 副学長・学生生活委員と学生との懇談会の開催
- (12) 社学連携活動の活性化
 - ・ 大阪市、北摂5市との連携協定の締結
 - ・ 大阪大学社学連携センターの設置の検討
- (13) 出版活動の推進
 - ・ 大阪大学出版会の出版活動の拡充(大阪大学後援会との連携)

OSAKA UNIVERSITY

12

【6. 研究】

- (1) 21世紀COEプログラムの継続・発展とグローバルCOEプログラムへの展開
- (2) 先端融合領域イノベーション創出拠点、世界トップレベル国際拠点形成促進プログラムによる研究拠点の形成
- (3) 科学教育機器リノベーションセンター設置と先端機器開発、装置の共用化、大型装置整備マスタープランの策定
- (4) 戦略的な受託研究・共同研究への対応による外部資金の拡大
 - ・ 共同研究講座制度の活用
 - ・ 技術交流会、企業・大学間連携協定による産学連携研究の推進

OSAKA UNIVERSITY

13

【6. 研究】

- (5) 部局横断型研究ワーキングによる研究グランドデザインの策定と推進
- (6) 知的財産・技術移転体制の強化
 - ・ 発明継承判定基準と技術移転促進策の実施
 - ・ スーパー産官学連携本部事業の国際的展開
 - ・ TLOの再編
- (7) 特別教育研究経費による研究拠点形成ならびに大学間連携研究の推進
- (8) ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構、生命科学・生命工学研究推進機構、サステナビリティ・サイエンス研究機構による部局横断型研究の立案と推進

OSAKA UNIVERSITY

14

【7. 国際交流】

(1) 海外教育研究拠点活動の活性化

- ・サンフランシスコ教育研究センター
北米の学術協定締結校との連携推進、インターンシップ・短期語学研修等実施支援、北米地区同窓会の活動支援、JUNBA(バイエリア大学間連携ネットワーク)の推進
遠隔講義「世界は今、サンフランシスコから」(前期:日本語)
「学問のすすめ、米国大学キャンパスから」(後期:英語)
- ・グローニンゲン教育研究センター
グローニンゲン大学との共催による大阪大学フォーラム2007開催、ヨーロッパの大学との連携強化、欧州協定校等との共同シンポジウムの企画等、短期語学研修実施
- ・バンコク教育研究センター
大阪大学微生物病研究所、生物工学国際交流センターのタイ研究拠点活動の支援、GLOCAL(グローバルコラボレーションセンター)への連携協力、学生交流を含む教育ネットワーク形成への協力、公開講演会・セミナーの開催、日タイ修好120周年記念事業への協力、東南アジア大学等関係ネットワークの形成

15

【7. 国際交流】

(2) 海外から来学した学生・研究者に対する生活・研究環境の整備

- ・ワンストップ・サービス
- ・GCN-Osaka, GCN-Worldwide
(ネット上での参加型情報提供サービス)
- (3) 国際学生交流支援事業の実施
 - ・「学生交流助成(派遣)」、「同(受入)」
 - ・「学生海外研修プログラム等助成」
 - ・「学生海外短期研究留学助成」
 - ・「留学生支援基金」
- (4) 国際交流に関する企画・立案能力の強化
 - ・国際企画による企画・立案能力の強化
 - ・主要大学との研究交流の推進一特にアジア諸国との交流促進に向けて一
 - ・国際貢献の組織的取組

16

【8. 医学部附属病院】

医学部附属病院は、中期目標・中期計画の進捗状況を鑑み、大学病院のミッションである教育、研究、診療を一層推進するため、平成19年度、以下のような重点課題を実施することとしている。

1. 診療機能の充実(センター化構想)
患者さんのニーズに対応した診療機能を充実するため、特徴ある診療専門別センター化を推進する。
 - ・ NICU(新生児集中治療室)の増床(6床→9床)
 - ・ MFICU(母胎・胎児集中治療室)の整備(6床)
 - ・ 小児医療センターの設置
 - ・ ハートセンターの設置(CCU(冠疾患集中治療室)4床を設置)
 - ・ 消化器センターの設置
 - ・ 呼吸器センターの設置
2. 地域がん診療連携拠点病院の指定
平成19年度、大阪府知事の推薦を受け、地域がん診療連携拠点病院の指定を目指す。
3. 未来医療センターの機能の充実
平成14年4月に設置された未来医療センターにおいて、高度先進医療、トランスレーショナルリサーチを推進することにより、先進的な治療の開発・研究を一層推進する。

17

【8. 医学部附属病院】

4. 臨床試験の活性化の推進

平成19年度より、厚生労働省を中心に行われる薬に関する臨床試験(治験)の活性化プロジェクトに参画し、国立大学病院としてのミッションの一つである臨床研究を推進する。
さらに、現在の臨床試験事務センターを改組し、新たに臨床試験部を設置する。

5. 7:1看護体制の取得

平成18年度の保険改定により新設された7:1看護体制を取得することにより、高度な医療を提供するだけでなく、患者さんに対して、安心で、安全な医療の提供を行うことにより、大学病院として地域社会へ一層貢献する。

6. 人件費の一括配分

平成19年度より、常勤人件費の一括配分を受け、より戦略的な経営が行えるようになったことから、事務外注化の推進や超過勤務手当の抑制等に積極的に取り組むこととする。

18

【8. 歯学部附属病院】

歯学部附属病院は、中期目標の達成、大学附属病院のミッションである教育、研究、診療を一層推進し、社会の要請に応え、かつ、より有能な歯科医師を養成するため、平成19年度は以下のような重点課題を実施することとしている。

1. 新棟への移転と本館改修
 - 5月7日新棟本格稼働に向け、医療事故等不測の事態が生じないよう安全な移転作業を実施する。
 - 秋頃から予定されている本館改修にあたりより効率的な医療現場を構築すると共に、改修工事に伴う減収を極力抑えられるよう、診療体制の充実を図る。
2. 診療機能の充実(センター構想)
患者ニーズに対応した診療機能を充実するため、総合・専門医療センターの設置を推進する。
 - 一般歯科総合診療センター
病院新棟に歯科用治療椅子40台を配置した診療センターを設置し、卒前、卒業臨床研修を集中して行い、安全な治療と優秀な歯科医師養成を図る。
 - インプラントセンター
現在、複数の診療科でそれぞれ実施しているインプラントを一元的に取り扱うこととし、手術室(4室)のうち1室を優先的に使用し、施術の安全を確保する。

19

【8. 歯学部附属病院】

3. 地域連携の推進

大阪府北摂、能勢等の北部地域における中核的歯科医療機関としてより地域との連携を図るため、受入先機関が皆無となる夜間救急対応を積極的に行い、阪大歯学部附属病院の存在を知らしめると共に、外来患者の増加を図る。

4. 病院経営体制の充実

19年度には本格稼働する物流システムによるデータを活用し、各診療科における経費率等の数値を随時示し、財政を考慮した診療の実施を推進する。

5. 臨床プロジェクト型研究の推進

臨床研究活性化委員会(院内措置)で、19年度は、咀嚼、摂食・嚥下に関する臨床研究を複数診療科で横断的に推進することとしている。

20

大阪大学は新しく生まれ変わります

vol.2

今号は、大阪外国語大学との統合により、新たに設置等される学部・大学院の教育研究の取り組みや特色を紹介します。

外国語学部・外国語学科

60年の歴史と伝統に培われた大阪外国語大学の教育と研究を、統合を契機としてさらに充実・発展させ、これからも国際的に通用する人材養成と地域の国際化の進展を担っていきます。

世界の言語のCOE

今日、世界的規模でグローバル化が進む中、言語、宗教、歴史を異にする世界各地の民族、国家、集団間での交流、軋轢もまた同時に深化しつつあります。日本が国際社会で果たすべき重要な文化的役割の一翼を担い、世界における相互理解と融和の進展に貢献するためには、世界諸地域の文化について高度な言語運用能力に基づいた実際的かつ専門的な知識を身につけ、各地域間及び異文化間を結ぶインターフェイスの人材を社会に送り出すことが必要です。

外国語学部・外国語学科は、25に及ぶ世界の諸言語の専攻語教育課程を設け、世界の言語と言語を基底とする地域文化の教育研究の集積拠点として、幅広く、そして深く世界・文化・地域を学ぶことができます。

社会的役割

外国語学部・外国語学科は、次の2つの役割と機能を果たします。

- (1) 複数の言語に関する高度な言語運用能力を基に、世界各地の多様な文化に関する総合的かつ専門的な知識を身につけ、異文化が複雑に交錯しあう国内外のさまざまな分野と場面において、相互理解と諸課題の解決に貢献する「幅広い職業人」を養成します。
- (2) 働く分野に関わらず、今日の国際社会に生きる社会人にとって不可欠な「世界に関する総合的教養教育」を提供します。

教育の特色

専門教育課程は、専攻語実習科目をはじめとする言語教育科目を教育課程編成の中核として位置づけていますが、言語運用能力のレベルに合わせて、前期専門課程(1・2年)及び後期専門課程(3・4年)においてそれぞれ学生が選択する地域の言語文化関連の専門科目を体系的に履修できるように設定しており、これにより、高度な言語運用能力の習得とそれを基礎とした地域の言語と文化についての多様な専門教育が可能となります。

入学定員

外国語学部(新設) 580名
編入学定員(3年次) 10名

授与学位 学士(言語・文化)

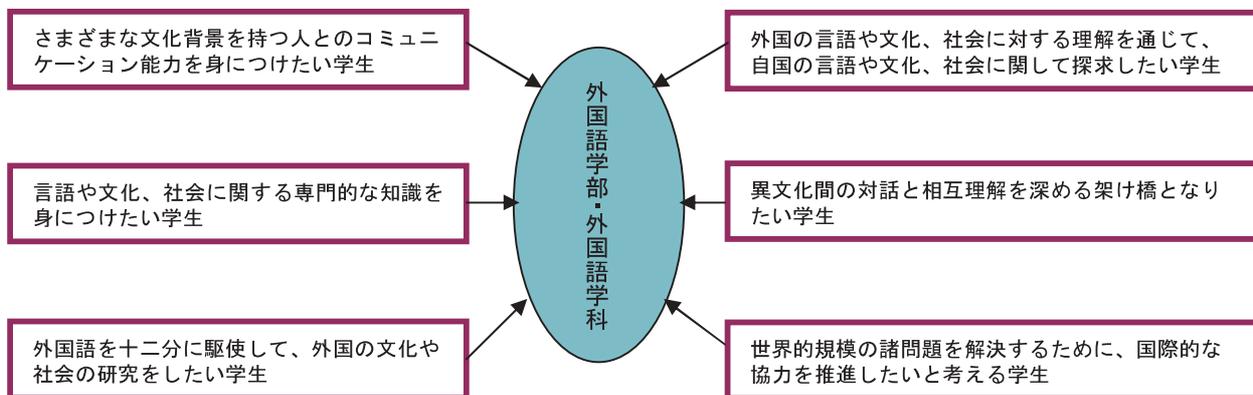
学部	学科	専攻	学科目
外国語学部	外国語学科	中国語専攻	中国語
		朝鮮語専攻	朝鮮語
		モンゴル語専攻	モンゴル語
		インドネシア語専攻	インドネシア語
		フィリピン語専攻	フィリピン語
		タイ語専攻	タイ語
		ベトナム語専攻	ベトナム語
		ビルマ語専攻	ビルマ語
		ヒンディー語専攻	ヒンディー語
		ウルドゥー語専攻	ウルドゥー語
		アラビア語専攻	アラビア語
		ペルシア語専攻	ペルシア語
		トルコ語専攻	トルコ語
		スワヒリ語専攻	スワヒリ語
		ロシア語専攻	ロシア語
		ハンガリー語専攻	ハンガリー語
		デンマーク語専攻	デンマーク語
		スウェーデン語専攻	スウェーデン語
		ドイツ語専攻	ドイツ語
		英語専攻	英語
フランス語専攻	フランス語		
イタリア語専攻	イタリア語		
スペイン語専攻	スペイン語		
ポルトガル語専攻	ポルトガル語		
日本語専攻	日本語		



役員室だより(大阪外国語大学との統合)

アドミッション・ポリシー

外国語学部・外国語学科は、自国及び外国の言語や文化、社会に対する強い関心を持つ、次のような学生を募集します。



平成20年度入学者選抜の実施教科・科目等について

入学志願者に解答させる教科・科目等名等

学部	学科等	学力検査等の区分・日程	大学入試センター試験の利用教科・科目名		個別学力検査等	
			教科	科目名等	教科等	科目名等
外国語学部(予定)	外国語学科(予定)	前期	国	国語	国	国語総合・英語表現Ⅰ
		後期	地歴	世B、日B、地理B 理社、倫、政経	地歴または数	地歴(世B、日B、地理BからⅠ)または数(数Ⅰ-数Ⅱ-数A-数B) 英(英Ⅰ、英Ⅱ、オーラル・コミュニケーション)、オーラル・コミュニケーションⅡ、リーディング、ライティング)、独、仏、中、韓、西、露からⅠ (英語の受験者にはリスニングを課します。)
理	理総A、理総B、物Ⅰ、化Ⅰ、生Ⅰ、地学Ⅰ					
			数	数Ⅰ-数A	外	
			数	数Ⅱ-数B、工、簿、情報からⅠ	外	英(英Ⅰ、英Ⅱ、オーラル・コミュニケーション)、オーラル・コミュニケーションⅡ、リーディング、ライティング) (リスニングを課します。)
			外	英(リスニングテストを含む)、独、仏、中、韓からⅠ (5教科7科目又は6教科7科目)		

【注】大学入試センター試験の利用教科・科目名】欄

- 科目名は次のとおり略記。
世B(世界史B)、日B(日本史B)、現社(現代社会)、倫(倫理)、政経(政治・経済)、数Ⅰ(数学Ⅰ)、数Ⅱ(数学Ⅱ)、数A(数学A)、数B(数学B)、工(工業数理基礎)、簿(簿記・会計)、情報(情報関係基礎)、理総A(理科総合A)、理総B(理科総合B)、物Ⅰ(物理Ⅰ)、化Ⅰ(化学Ⅰ)、生Ⅰ(生物Ⅰ)、英(英語)、独(ドイツ語)、仏(フランス語)、中(中国語)、韓(韓国語)
- 「地理歴史」、「公民」及び「理科」において、指定した教科・科目数より多く受験しているときは、高得点の科目を用います。
- 「工(工業数理基礎)」「簿(簿記・会計)」「情報(情報関係基礎)」を選択解答できる者は、高等学校において、これらの科目を履修した者及び文部科学大臣の指定を受けた専修学校の高等課程を修了(見込み)した者に限ります。
- 「英語」については、「リスニングテスト」の成績も利用します。

【個別学力検査等】欄

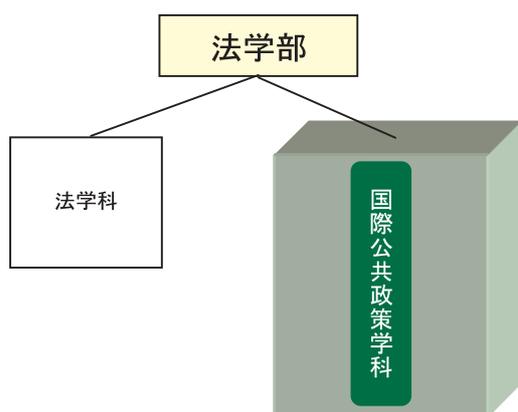
- 科目名は次のとおり略記。
世B(世界史B)、日B(日本史B)、数Ⅰ(数学Ⅰ)、数Ⅱ(数学Ⅱ)、数A(数学A)、数B(数学B)、英Ⅰ(英語Ⅰ)、英Ⅱ(英語Ⅱ)、独(ドイツ語)、仏(フランス語)、中(中国語)、韓(韓国語)、西(スペイン語)、露(ロシア語)
- 数学Bは「数列、ベクトル」を出題範囲とします。

役員室だより(大阪外国語大学との統合)

法学部・国際公共政策学科

法学部では、統合に伴い、新たに国際公共政策学科を設立します。新学科では、これまでの両大学における社会科学の教育研究の実績を生かし、また既存の法学科との密接な連携をはかりつつ、法律・政治・経済の学際的な視点から教育を行います。そして、民間・政府の両分野において国際公共的な政策に取り組み、また人権・平和・豊かさなどの国際公益を国際又は国内社会で実現するための活動に従事できる人材や、さらに研究者あるいは高度専門職業人として国際公益に資するために大学院進学を目指し研究を深めていくことができる人材の育成を目指します。

統合後の組織編成



入学定員	
国際公共政策学科(新設)	80名
授与学位	学士(法学)

学科概要

学力を磨く

本学科では、まず、法学・政治学・経済学の複数年分野の基礎を体得します。現在の社会、特に国際社会の法・政治・経済問題へそれを応用するための科目を学び、現実の問題への理解と対応の能力を磨きます。

授業科目	配当年次
法学の基礎	1
民法入門	1
憲法入門	1
政治学の基礎	1
国際関係論入門	1
ミクロ経済入門	1
マクロ経済入門	1
政策データ分析入門	2



語学力を磨く

外国語、特に英語の学習を奨励し、一定の外国語能力を卒業要件とするほか、国際経験の豊富な教員配置し、いくつかの授業を英語で行います。さらに、討論、交渉などの授業で表現力を養い、国際社会で不可欠な総合的コミュニケーション能力を養います。

授業科目	配当年次
English Certificates I	2・3・4
English Certificates II	2・3・4
Project Seminar in English	2・3・4



行動力を磨く

また、留学により世界を知るだけでなく、インターンシップなどを活用し、平和、災害救助、環境などの問題解決に取り組む行動力を育てます。

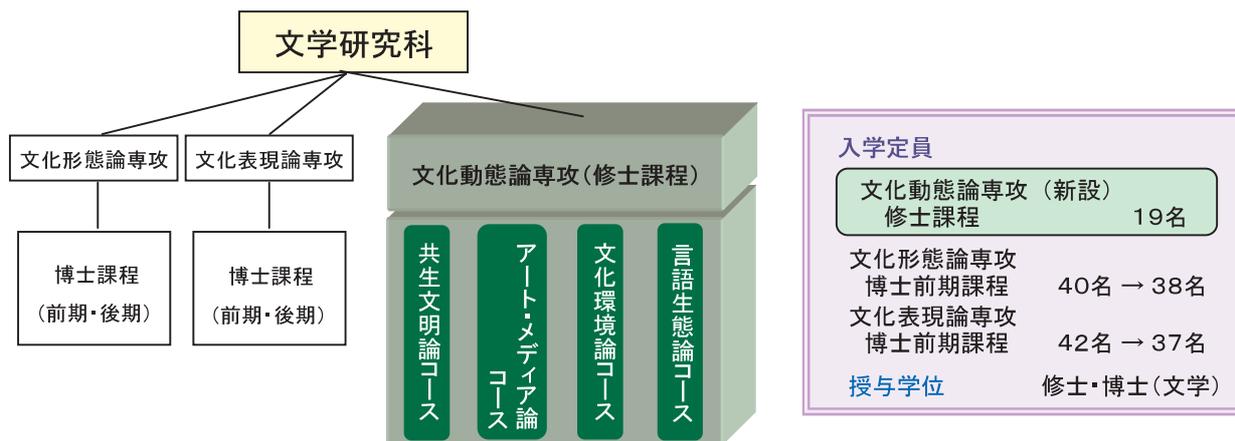
授業科目	配当年次
インターンシップ	3・4
ネゴシエーション	3・4
人間の安全保障	3・4
政策評価(NPO)	3・4
政策評価(環境と開発)	3・4



大学院文学研究科

文学研究科では、学際的視点の重視、修士研究に対する多面的評価、海外と教育交流の重視を教育研究上の特色とした「文化動態論専攻(修士課程)」を新たに設置します。本専攻には、「共生文明論」「アート・メディア論」「文化環境論」「言語生態論」の4コースがあり、人文諸学への知見を有して分野横断的な発想に長け、高度の言語運用能力と他者理解力を備えた高度専門職業人を養成することを目的としています。

統合後の組織編成



コース概要

共生文明論コース

人々の多彩な関係を、接触、交渉から衝突や妥協、すみ分けなど複合的な関係の発展まで多角的に追跡し、そのメカニズムの形成を歴史的に解明します。またこれを通じて、人々の歴史意識や言語意識、文化観や民族観の形成と変動にもアプローチして、現代世界の理解と共生に貢献します。

アート・メディア論コース

芸術学の既存分野で十分に扱われてこなかった領域、新しく形成され社会的重要度を高めつつある領域の研究拠点を形成するとともに、諸芸術ならびにメディアに関わる社会的活動において、学外諸機関とも連携しつつ社会的実践を推進します。

文化環境論コース

日本・東洋文学から欧米文学にわたる文学世界を研究対象として、文学と環境との双方向的関わりのありようを自然環境、人間環境、文化環境といった多次元側面から検証することを通して、文学の成立する根源的条件を考察・研究します。

言語生態論コース

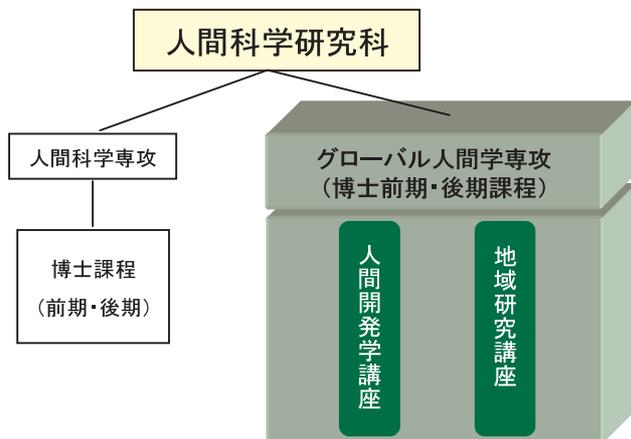
現代社会において、ますます重要性を増す言語と言語が伝える情報の様態・実態を、言語の生成や変化、言語の比較対照・分析、言語データの収集・数量的分析などのさまざまな観点から総合的に考察・研究します。

役員室だより(大阪外国語大学との統合)

大学院人間科学研究科

人間科学研究科では、グローバル化する現代世界を背景に、人間に関わる諸問題の解決を目指して、地域の人々とコミュニケーションし、現実に即して行動できる、真の国際性をもった人材を養成するために、既存の「人間科学専攻」に加えて「グローバル人間学専攻」を新設します。

統合後の組織編成



入学定員

グローバル人間学専攻 (新設)	
博士前期課程	19名
博士後期課程	8名

人間科学専攻	
博士前期課程	79名→70名
博士後期課程	38名→34名

授与学位 修士・博士(人間科学)

講座概要

人間開発学講座

国際協力学、紛争復興開発論、国際社会開発論、多文化共生社会論、人間環境論の研究分野から成り立ち、貧困や飢餓の問題、教育や保健医療、紛争や災害からのコミュニティ復興、平和と安全の構築、ジェンダーや人種・民族間の社会的公正の実現、といった地球規模の問題に取り組むことで、人々の暮らしに直結する生き生きとした教育の創造を目指します。

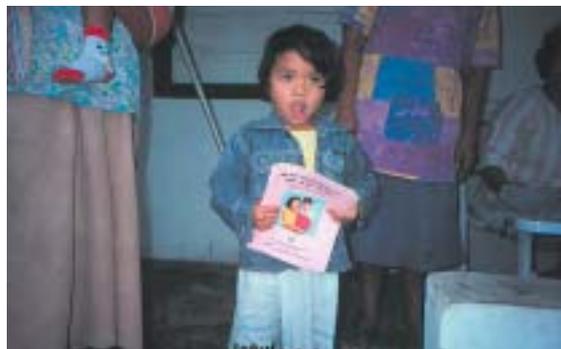
地域研究講座

動態地域論、超域地域論、地域秩序論、地域知識論の研究分野から成り立ち、地域の歴史や文化の固有性を探求する従来型の地域研究を基礎としながら、地域間の文化的交流や摩擦、人口移動などの人と空間の関係にも焦点を当て、複雑化する世界の諸地域について、複眼的思考によるダイナミックな教育の創造を目指します。

人間科学研究科のフィールドワーク現場から



アフリカでのフィールドワークでマサイの人々と



インドネシア版の母子手帳を手に持つ少女

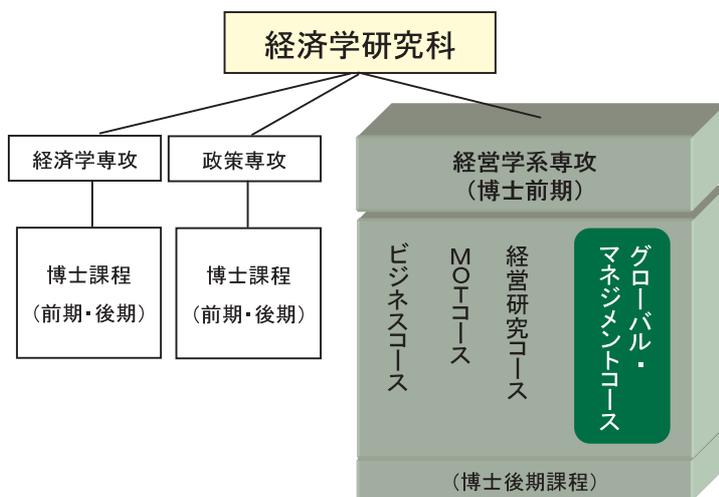
国際世界に通用する実践的スキルの習得を目標として、各専門分野で行われているさまざまなフィールドワークと地域言語・地域文化の学習を有機的に結びつけているところに、教育の特色があります。

大学院経済学研究科

経済学研究科では、これまで理論的・実証的・歴史的なアプローチに基づいて、経済・経営に関する学問的な貢献、ならびに、その知識の実践的な応用を行うことのできる人材の育成を行ってきました。そして、教育を通じて、経済・経営に関する専門的理解を踏まえ、人間に対する深い愛情を持って、世界や日本で生起する社会現象をとらえ、人類の共生に情熱を燃やす人材を育てることを目的にしています。

さらに、企業活動の国際化に対応して、マネジメント教育においても国際的な視点が必要不可欠となりつつあり、特に、IT技術の発展によるボーダレス社会の到来は、新たなビジネスモデルのひな形を次々と生み出しています。これらに対応し、社会からの要請に応え、グローバルな視点を持つマネジメント教育をより一層推進するために、経営学系専攻に「グローバル・マネジメントコース」を新設します。

統合後の組織編成



入学定員

経営学系専攻
博士前期課程 23名 → 33名

授与学位

修士(経済学、応用経済学、経営学)

グローバルな視点を持つマネジメント教育
+
アジアへの視点に基づいたマネジメント教育



講座概要

グローバル・マネジメントコース

グローバル・マネジメントコースは、言語・地域・経済・文化の視点を基礎に、IT技術の活用や技術開発に精通した教員を加えたマネジメント教育を行い、真に国際的な視野を持つビジネス・パーソンを育成することを目指します。

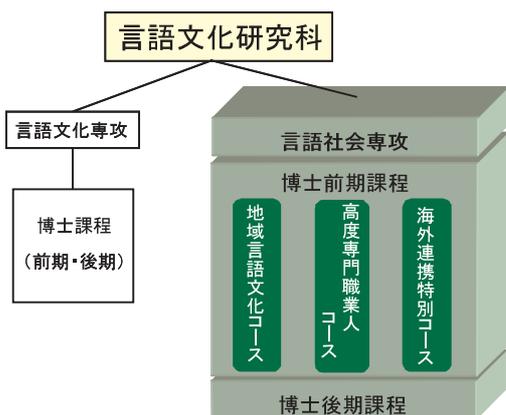
グローバルな視点を持った文化・地域戦略と技術戦略のあり方の重要性は、世界的に認識され始めており、欧米のビジネススクールにおいても、グローバル・マネジメントは主要なコースとして定着しつつあります。中でも、成長の著しいアジアにおける企業の展開が、日本だけでなく欧米企業にとっても重要な課題になっています。特に、IT技術だけでなくMOTに関連する様々な研究開発の分野については、アジア各国が積極的に取り組んでいることもあり、現地企業がアジアに進出する日本や欧米企業のパートナーとしての役割を果たす傾向が広がっています。その意味で、アジアの言語・地域・文化に根ざしたビジネス環境に精通した教員と、MOT分野での研究開発を実践する教員とが連携することで、新たな実践的なマネジメント教育をすれば、マネジメント教育の新境地を生成することが可能であると考えています。

役員室だより(大阪外国語大学との統合)

大学院言語文化研究科

言語文化研究科では、現在の「言語文化学専攻」を「言語文化専攻」と名称変更し講座再編を行うとともに、「言語社会専攻」を新設して、2専攻となります。言語社会専攻は、現大阪外国語大学言語社会研究科が、より広い学際的視野のもとで地域研究の伝統を発展拡充するために現大阪大学言語文化研究科と統合して生まれ変わるものです。言語社会専攻では、同じく新設される世界言語研究センターとの密接な連携のもとに、高度にして実践的な言語運用能力を基盤とし、世界の諸地域の言語、文化表象、言語文化資源、言語社会などを先端的に研究する研究者・専門家の養成を目指しています。

統合後の組織編成



入学定員

言語社会専攻専攻(新設)
博士前期課程 35名
博士後期課程 13名

言語文化専攻
博士前期課程 30名→32名

授与学位 修士・博士(言語文化学、日本語・日本文化)

コース概要

言語社会専攻の博士前期課程は次の3つのコースから構成されます。社会と時代のニーズに応じるために、特定の言語文化圏を越えた横断的研究を行う科目も開設し、定員は地域言語文化コースと高度専門職業人コース合わせて20名程度、海外連携特別コースが15名程度です。博士後期課程は、より多角的視座のもとに研究を進める課程でありコースの別はありませんが、13名の定員を予定しています。

地域言語文化コース

- ・アジア・アフリカ言語文化コース
 - ・ヨーロッパ・アメリカ言語文化コース
- 25の言語をもとに、日本および諸外国の言語と社会についての高度な専門知識を有し、異文化間のインターフェイスの役割を果たす研究者養成を目指しています。

高度専門職業人コース

- ・英語教員リカレント・コース
 - ・中国語教員リカレント・コース
- 中学校や高等学校の現役教員を対象とし、次世代の人材育成に貢献できる能力を養う教育を行います。

海外連携特別コース

- ・日本語・日本文化実践コース
 - ・日本語・日本文化専修コース
- 日本語・日本文化に関する教育・研究のみならず、企画・立案・交渉・運営など高度の実践能力を備えた発信型研究者・専門家の養成を行います。

人材養成

大学院修了後は、大学を初めとする教育機関の教育者・研究者のみならず、海外協力機関や国際機関においてコーディネートの役割を果たす専門家、日本と諸外国の言語と社会について深い知識を有する高度専門職業人として活躍することが期待されます。また、言語社会専攻で学んだことを本国に持ち帰り、日本語・日本文化の受容および発信を行う役割を果たす留学生の受け入れも積極的に取り組んでいます。



第19回産研技術室報告会開催

12月12日(火)、産研講義室において第19回産研技術室報告会を開催しました。

報告会は山口明人副所長、山田 等技術室長の挨拶で始



まり、技術室運営委員長の菅沼克昭教授の特別講演「Printed Electronicsの世界」、鳥取大学の丹松美由紀技術職員を招聘しての「技術職員として関われること～地域貢献事業への取り組み～」と題した招待講演、ユーザーズレポートとして村上 聡助教授が「タンパク質の構造を見て、機能を理解し、それを役立てる技術」と題した講演を行いました。技術報告としては「出張ガラス細工教室のノウハウ」(小川紀之)、「USB - A / DCを用いた簡易測定システム開発の試み」(田中高紀)、「シリコンウェハーホルダーについて」(松川博昭)、「何が出来るのナノ加工室」(榎原昇一)がそれぞれ報告されました。今回の特徴としては技術職員と地域貢献に関わる内容が新たに加わったことがあげられます。

この報告会開催で得られた技術・知識は、技術職員同士の相互理解と技術の継承、教職員・研究生等に対してはそれぞれの専門的技術指導等の面で貢献しています。

(産業科学研究所)

第3回国際セミナー開催

1月10日(水)に、大学教育実践センター主催の第3回国際セミナー「ヨーロッパの高等教育政策 - 大学世界ネットワーク」が、吹田キャンパスのコンベンションセンターで開催されました。

このセミナーは、イギリスのブリストル大学学長で世界大学ネットワーク(WUN: World University Network)の会長であるエリック・トマス教授が来日された機会に企画されたものであり、京都大学、関西学院大学、大阪大学及び大阪大学留学生センターの後援で行われ、当日は、70名近い参加者がありました。

鷲田清一大阪大学理事・副学長の開会挨拶に続いて、エリック・トマス教授の基調講演では、世界のトップ100大学の状況を示された後、グローバル大学に必要な特質、またグローバル大学にするために必要な条件等について、また後半では、WUNの歴史と活動内容について講演されました。続いて、関西学院大学のライ教授のコメントがあり、質疑応答が行われました。質疑応答では、グローバル大学の特質である英語や国際的な教員・学生の構成等を中心に議論が行われました。

日本からは首都大学東京の西澤潤一学長(前東北大学学長)が講演されました。西澤学長は、欧米に対峙した北アジア地区独自の「和の文化」の重要性と、それが宮沢賢治



エリック・トマス教授

に内包されていること、岩手県立大学ではソフトウェア情報学部を立ち上げ、多くの「宮沢賢治」を育てる教育実践について熱く語られました。また、現在の首都大学東京ではCO₂削減の環境問題に取り組んでおられ、「知とロマン」を持ち、社会に貢献する研究の重要性を強調されました。

最後に、京都大学横山俊夫副学長の閉会の挨拶で本国際セミナーを終了しました。

(大学教育実践センター)

大学知的財産戦略研修会開催

知的財産本部は、文部科学省との共催で1月15日(月)に「大学知的財産戦略研修会」を開催しました。

この研修会は、大学知財の管理・活用体制の状況報告や体制整備を図る上での課題について検討、検証、討議等を行い、技術的ノウハウの向上を図ることを目的に開催されました。

午前に行われた基調講演「産学官連携・知財戦略の最近の動向」では、文部科学省技術移転推進室の井上卓己室長から、平成19年度実施予定である国際的産学官連携推進体制整備やライフサイエンス分野の知財の現状と課題等について、また、武田薬品工業株式会社の秋元 浩常務取締役の特別講演「国際的産学連携における我が国の大学への期待～ライフサイエンス分野を中心として～」では、産学連携の成功例には「学主導」と「産主導」があり、産主導の例として企業が大学の研究成果を正しく目利きし企業主導で共同研究を提案した例が紹介されました。

午後には2つのセッションが行われ、セッション1「大学特許の具体的なマーケティング方法」では、大学、TLO、技術移転企業の実務者から、売り込み用資料や、ライセンス活動における発明者の協力の重要性等について興味深い講演が行われました。

続くセッション2「持続的な産学官連携・知的財産管理体制の構築～大学職員の役割と育成の観点から～」では、「高



秋元常務取締役

い意識と高度な付加価値を持つ専門家集団」を目指す先進的大学の取り組みが紹介される一方、研究協力部等の事務組織では産学官連携・知的財産に関し多岐にわたる業務をこなしているものの、専門性を持つ職員を配置している大学は2割に満たないという調査結果（平成17年度）が報告されました。

この研修会の報告書については、下記をご覧ください。

(<http://www.ipo.osaka-u.ac.jp/>)

(知的財産本部)

JICA(国際協力機構)との共同研修事業:タンザニア地方政府改革支援プログラム実施

大学院法学研究科は、2002年度から、JICA(国際協力機構)および茨木市と連携して、タンザニアの地方自治を担うリーダー層を日本に招聘し、1ヵ月程度の研修を開催しています。その第5回研修事業が、1月15日(月)から2月7日(水)まで実施されました。今回はタンザニアの各州と県ならびに市町村の行政長官および大統領府地方自治庁の行政官など18名が参加しました。



現在、タンザニアでは地方分権化プログラムに基づく改革が進められています。そこで、明治以来、近代化を進める中で試行錯誤しながら分権化を進めてきた日本の経験、現状を伝えることで、タンザニアの取り組みに示唆を与えることが研修の目的となっています。法学部の教員をはじめ、他学部や他大学の教員も講師に迎え、地方制度、組織、財政、農水産や商工行政などの講義を行う他、さまざまなフィールドワークの場を提供してきました。この事業は参加者の好評を得てきており、現地では新聞報道などで高い関心と評価を得ています。

当初、この研修は3回の実施を予定していましたが、タンザニア側の要望もあり、2回の追加実施を行いました。このプログラムをはじめた当初は、さまざまな困難があり戸惑いを覚えることも多かったのですが、しかし、タンザニアの人々から少なからぬ評価をいただき、本学としてもさらなる国際協力事業の発展の一里塚を築いた本プログラムの意義は大きいといえます。

(大学院法学研究科・法学部)

平成18年度大阪大学「学生海外研修助成」事業報告会開催

平成18年度大阪大学「学生海外研修助成」事業に採択された学生グループによる報告会が1月17日(水)ICホールで行われました。この事業は本学学生の積極性と企画力・実行力の向上を目的として、自らの企画により海外で交流・研修活動を行うグループを支援するため、平成14年度か



総長室での報告会

ら実施されているもので、本年度は大学院工学研究科山根正明君他3名による「日米でみる研究とビジネスの関わり」、大学院基礎工学研究科山本豪志朗君他2名による「Zero Waste ~持続可能社会への取り組み~」の2件の研修計画が採択され、両グループから、研修成果並びに海外での交流体験等について報告が行われました。報告会には、学生及び教職員約20名が出席し、報告内容に関して活発な質疑応答が行われました。

また、2月20日(火)には、両グループによる宮原秀夫総長への報告会が、橋本日出男国際交流推進本部長、古城紀雄留学生センター長同席のもと行われました。席上、両グループから総長への謝辞が述べられ、1グループ10分という限られた時間の中、緊張した面持ちで研修成果の報告が行われました。報告内容に関する質疑応答の後、総長から、両グループに対して、今回の研修成果を無駄にせず、後に続く者のために広報に努めてほしいなどと激励の言葉がかけられました。

(研究推進・国際部学生交流推進課)

産学官連携・知的財産担当者等講習会実施

知的財産本部は、1月19日(金)から2月2日(金)までの延べ5日間、産学官連携・知的財産担当者等講習会(実務編)を実施しました。この講習会は、文部科学省「大学知的財産本部整備事業」内部人材養成事業の選定を受け、産学官連携・知的財産関連業務を担当する教職員等に必要とされる知識の修得、実務能力の向上を目的として実施したものです。

受講者22名(うち他機関2名)が、「特許の実務」、「共同開発契約」、「日英契約書比較講座」のほか、「公的資金



プレゼンテーション講座での発声練習



講師の株式会社アビリティ・インタービジネス・ソリューションズ 有廣 香里 氏

を活用し、研究環境の整備と高度化を実現する」、「産学官連携と国立大学法人会計」、「よくわかる現代科学技術のしくみ」といった特色ある講義を受講しました。最終日の「プレゼンテーション講座」では、渉外業務で特に必要とされるプレゼンテーションスキルを、発声・滑舌練習や即興スピーチ等、実技中心のワークショップ形式で身につけました。

(知的財産本部)

大阪大学“ゆらぎ”プロジェクトシンポジウム開催

12月1日(金)に秋葉原コンベンションホールにおいて、大阪大学“ゆらぎ”プロジェクト東京シンポジウムが、2月6日(火)には千里阪急ホテルにおいて、同大阪シンポジウムがそれぞれ開催されました。

本プロジェクトは、文部科学省の科学技術振興調整費「先端融合領域イノベーション創出拠点の形成」プログラムの一つとして今年度から開始されている「阪大からイノベーション“生体ゆらぎに学ぶ知的人工物と情報システム”」という全学レベルのプロジェクトです。協働企業6社および3つの公的研究機関の参画を得て、10～15年後に新たな産業の核となる先端科学技術の創出を目指した研究を進めています。本シンポジウムは、プロジェクトの趣旨を多方面に紹介し、これからの展開に関する意見を聞くことを目的として企画され、東京は150名の会場において立ち見



宮原総長

がでるほどの参加者、大阪は220名もの参加者があり期待と興味の高さが伺われました。両シンポジウムとも、プロジ

エクト総括責任者の宮原秀夫総長の挨拶、研究推進副部門長の西尾章治郎大学院情報科学研究科長よりプロジェクトの概要解説が行われ、引き続き、プロジェクトを支える4領域、「生命領域」、「ナノ材料領域」、「ロボット領域」、「情報システム領域」から研究計画が示されました。

なお、東京シンポジウムでは、文部科学省科学技術・学術政策局調査調整課調整企画室長の堀内義規氏より祝辞を兼ねて、「新しいイノベーションと、真の意味での共同研究の実現を期待する」旨の講演がありました。最後に、研究推進副部門長の柳田敏雄大学院生命機能研究科教授が、プロジェクト全体を総括しました。

一方、大阪シンポジウムでは、研究推進部門長の馬越佑吉理事・副学長からプロジェクトの趣旨説明があり、また、プロジェクトに参画している協働機関である日本電子(株)、オムロン(株)、三菱重工業(株)、ニプロ(株)、松下電器産業(株)、日本電信電話(株)から協働研究内容に関するプレゼンテーションが行われました。さらに、金森順次郎国際高等研究所所長(本学元総長・名誉教授)から、「“ゆらぎ”プロジェクトに期待すること」と題して、プロジェクト推進に対する激励を頂き、成功裡にシンポジウムを終えました。

大阪大学“ゆらぎ”プロジェクトの詳細については、下記WEBサイトをご参照願います。<http://www.yuragi.osaka-u.ac.jp/>

(大学院情報科学研究科)

サステナビリティ教育国際ワークショップ開催

サステナビリティ・サイエンス研究機構(RISS)は、2月13日(火)に本学中之島センター10Fの佐治敬三メモリアルホールで、サステナビリティ教育国際ワークショップ「Mobilizing Science and Technology towards Sustainability」を開催しました。

国内外での大学院レベルのサステナビリティ教育プログラムに携わる識者を招いて、サステナビリティ教育の現状と将来について討論することを目的に開かれたもので、大学関係者ら多くが参加しました。

中国・北京師範大学副学長のバイジュン・シー教授、アメリカ・テネシー大学のロザリン・マククン教授、東京大学の味埜俊教授が講演を行い、世界における環境問題や教育の現状、さらにサステナビリティ教育の必要性などを発表しました。また、参加者からは、熱心に質問が出され、サステナビリティ教育に関する理解を相互に深めることができました。

このあと、イギリス・オックスフォード大学の鈴木智英

教授の司会のもと、これらの講演者をパネリストとしてディスカッションを行いました。サステナビリティ教育の方向性やその理想像にいたるまで、様々なテーマで議論が交わされ、参加者からも鋭い指摘や新しい論点が出されるなど、活発なディスカッションとなりました。



今回のワークショップを通して、世界における取組みの現状と今後の展望に向けての情報共有に加えて、教育関係者間の交流も行われ、非常に有意義な会議となりました。

(サステナビリティ・サイエンス研究機構)

独立行政法人情報通信研究機構と情報通信分野における連携推進に関する協定締結

大阪大学と独立行政法人情報通信研究機構（NICT、長尾 真理理事長）は、情報通信分野における連携推進に関する協定を2月22日（木）に締結しました。



大森理事(左)と馬越理事・副学長(右)

調印式は、馬越佑吉大阪大学理事・副学長と大森慎吾情報通信研究機構理事の出席のもと、東京都内のNICT 麹町会議室において行われました。

これまで大阪大学とNICTは、フォトニックネットワーク技術、バイオICT、ナノICT等に関する共同研究、連携大学院協定、研究員の受入れなど多様な連携を実施してきました。今回、これらの個別連携を組織的な連携へと発展させつつ、大学と国の研究機関の連携により技術革新の強力なうねりを作りだしていくことをねらいとして、より幅広い研究分野において協力することで基本的に合意にいたしました。

本協定書のもとで、これまでの共同研究や研究者交流を一層推進することに加え、技術情報の交換、シンポジウムの共同開催等を積極的に進めることで、両機関の研究開発の一層の推進を図り、我が国の情報通信分野における技術のさらなる発展への寄与を目指します。

（研究推進・国際部産学連携課）

大学院基礎工学研究科が情報通信研究機構と共同主催でシンポジウム開催

大学院基礎工学研究科は、2月23日（金）、協定を締結している情報通信研究機構未来ICT研究センターと共同で、「ナノICTシンポジウム2007～情報通信の未来を拓くナノフォトニクス」を、東京ビッグサイトでnano tech2007 国際ナノテクノロジー総合展・技術会議に併設して開催しました。

今回のシンポジウムは、情報通信への応用をめざすナノフォトニクスをテーマとして取り上げ、その中でも特にプラズモニクスと分子フォトニクスの融合という観点から国内の第一線で活躍する研究者を招き、産官学の研究者が研究の現状と今後の課題について活発な討論を繰り広げました。

シンポジウムは、徳島大学の福井萬壽夫教授の基調講演「プラズモニクスと情報通信」をはじめとして招待講演5件を含む9件の講演が行われました。事前登録者数は120



名を超え、質疑応答も活発に行われ、この分野への関心の高さをうかがわせるものとなりました。

（大学院基礎工学研究科・基礎工学部）

バンドン工科大学(インドネシア)との大学間学術交流協定締結

2月28日(水)、大阪大学は、インドネシア共和国のバンドン工科大学 (Institut Teknologi Bandung <http://www.itb.ac.id>) との大学間学術交流協定を締結しました。これを受け、3月26日(月)、バンドン工科大学 Djoko Santoso 総長と Edwan Kardena 教授が来日し、宮原秀夫総長ならびに馬越佑吉理事・副学長、豊田政男大学院工学研究科長を表敬訪問されました。

バンドン工科大学は今日、インドネシアにおける最も優れた理工系大学と評価されています。大学院工学研究科・工学部は、2003年に同大学産業工学部との部局間交流協定を締結するなど、着実に交流の基礎を築いてきました。このたびの大学間学術交流協定の締結を契機に、更なる交流が期待されます。

表敬訪問後、医学部銀杏会館において、“ITB-OU SCIENTIFIC WORKSHOP” が開催され、Djoko Santoso 総長、Edwan Kardena 教授ならびに本学に在籍する留学生等が、最近の研究についての講演をおこないました。本協定の窓口となった笠井秀明教授及び Rifki Muhida 博士をはじめ



め、大学院生を含む本学研究者が参加し、活発な討論、意見交換が行われました。

バンドン工科大学については、本号の「交流協定大学紹介」(92ページ)をご覧ください。

(研究推進・国際部国際交流課)

いちよう 庭球部・公孫樹クラブ100周年記念式典開催

庭球部は、3月3日(土)、卒業生の集まりである公孫樹クラブ(庭球部後援会)とともに100周年を祝う記念式典・祝賀会を医学部銀杏会館で開催しました。式典には、宮原秀夫総長をはじめ阪大関係者、国立七大学や学生リーグ戦、対抗戦を戦ってきた国公立のテニス名門校(神大、市大、



100周年を振り返るパネル・ディスカッション

甲南大、関学、関大、同大) 統合を控えている大阪外大のテニス関係者、テニス協会関係者ら60名の出席を得て、卒業生(158名)・現役(29名)あわせて187名が盛大に100周年を祝いました。式典では、旧大阪医学校以来脈々と続く庭球部の歴史を20分にまとめたビデオが上映され、また、各年代の卒業生がパネル・ディスカッション方式で思い出を語り合いました。「阪大が大阪市内に分散していた時代は部員間の連絡もままならず、コートを借りるのにも苦労した」「その後、石橋門のところにあったテニスコート(現待兼山庭園)に落ち着き、関西のトップ4(一部リーグ)の一角を占めた時期もあり、七帝戦の6連覇、4連覇も成し遂げている」「現在は男女とも3部であるが、2部、1部を目指して刀根山寮隣のテニスコートで練習を重ねている」などの思い出が語られ、その長き伝統を思い起こしました。祝賀会では、大学を越え時代を超えてテニス談義に話の輪が広がり、いかにも阪大らしい和気藹々とした式典・祝賀会となりました。

(庭球部)

医学部保健学科公開講座 / 現代GP 公開講演会「現場に役立つ発達障害支援の実際」開催

3月4日(日)、本学中之島センターにおいて、医学部保健学科主催の公開講座 / 現代GP 公開講演会「現場に役立つ発達障害支援の実際」が、医療・保健・福祉・教育関係者や学生ら計約290名の参加者を得て開催されました。この公開講座は、今年度採択された「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」の地域連携活動のひとつでもあります。



当日は、川野 淳医学部保健学科長の開会挨拶の後、荒木田美香子大学院医学系研究科教授による大阪大学医学部保健学科における現代GPへの取り組みの紹介、永井利三郎大学院医学系研究科教授による基調講演「軽度発達障害について」があり、次いで、岩坂英巳奈良教育大学教授による「ADHDの子どもを持つ親へのペアレントトレーニングの実際」と、杉江秀夫浜松市発達医療総合福祉センター所長による「軽度発達障害と教育との連携」の2つの講演が行われました。発達障害は、広汎性発達障害や、注意欠陥/多動性障害、学習障害などが含まれ、そのうち軽度発達障害は知的な遅れがほとんど見られないものをさします。知的に遅れが無いためにその障害に気づかれにくく、いじめや不登校、引きこもりにつながる事が指摘され、その早期発見と支援のためのスキルの獲得の必要性が社会的に大きく注目されてきています。この公開講座には、看護学専攻の学部3年生が現代GPの講義の一環として、別会場を用いた中継で講演を視聴しながら参加しました。講演終了後、参加者による活発な質疑があり、軽度発達障害に対する各分野の関心の高さが示されました。

(大学院医学系研究科・医学部)

メンタルヘルス講習会実施

保健センターと安全衛生管理部では、3月5日(月)15時からコンベンションセンターにおいて、メンタルヘルス講習会を実施しました。

近年、仕事や職業生活に関する強い不安、悩み、ストレスがあると感じる労働者の割合が高くなっており、職場における労働者の心の健康づくりの重要性が増しています。本講習会は、このような状況に鑑み、管理監督者による「ラインによるケア」を中心に、メンタルヘルスに関する基礎知識を習得し、メンタルヘルスケアの実施方法等について理解を深めることを目的に実施したものです。

講師の保健センター・杉田義郎教授からは具体的な事例を踏まえた説明があり、受講者からも日頃の疑問点等について質問が出され、活発な質疑応答が行われました。

(保健センター、安全衛生管理部)



タイ王国大阪総領事一行来訪

3月7日(水)、タイ王国大阪総領事スポット・イサラングーン・アユッタヤ他一行4名が宮原秀夫総長を表敬訪問しました。宮原総長との懇談後、一行は、木下タロウ微生物病研究所長を表敬訪問し、微生物病研究所、大学院工学研究科(浅田 稔研究室、石黒 浩研究室)、医学部附属病院未来医療センターなどで、本学の先端科学技術などを見学しました。

(研究推進・国際部国際交流課)



宮原総長とスポット・イサラングーン・アユッタヤタイ王国総領事(右から5人目)

在阪企業等と研究懇話会開催

3月13日(火)、第12回大阪大学研究懇話会が医学部銀杏会館で開催されました。

この研究懇話会は、企業等に本学における研究活動の情報を提供するとともに、企業が求める人材あるいは共同研究など大学に対する要望など幅広く意見交換することを目的に、年に一度開催しているものです。

当日は、関西の企業等の研究開発担当役員及び大阪大学の部長等、総勢70名以上が集まり、『大阪大学の基礎研究と産業応用』

というテーマのもと、大学発ベンチャービジネスを推進する教員から、大阪大学における基礎研究と企業化の成功例を中心とした内容の話題提供があり、今後の大学運営等、



開会の挨拶をする宮原総長



研究懇話会の様子

産学連携及び協力の推進について、参加した企業等の方と活発な意見交換が行われました。

(研究推進・国際部研究推進課)

医学部附属病院にPET(ポジトロンCT)検査棟完成

医学部附属病院のPET(ポジトロンCT)検査棟が完成し、3月14日(水)に荻原俊男医学部附属病院長、遠山正彌大学



竣工記念式典でのテープカット

院医学系研究科長はじめ関係者列席のもと竣工記念式典が行なわれました。4月2日(月)からは最新

のPET-CT装置2台が稼働し、悪性腫瘍診断、循環器疾患、中枢神経系疾患の保険診療を開始しています。検査はすべてオープン予約で行ない、画像は院内画像サーバーを通じて電子カルテで読影できるようになっており、今まで年間1000例ほどだった検査件数も、看護部や放射線部の支援を受け大幅に増加します。新しく完成した施設は、患者様や医療従事者の放射線被曝を十分に軽減できるよう最大限の配慮がなされており、最先端の画像診断を通じて、医療の発展に貢献していきます。

(医学部附属病院)

平成18年度大阪大学外国人留学生修了パーティー開催

平成18年度本学外国人留学生修了パーティーが3月15日(木)に千里阪急ホテルで開催されました。

この修了パーティーは、3月に本学を修了する予定の外国人留学生とその家族を総長が招待し、祝賀・懇親の場とするもので、毎年開催されています。

当日は、本学教職員の他、来賓として留学生奨学団体、留学生支援団体、修了者のホストファミリー、ボランティア家主の方々を含め、約450名が出席する盛大なものとなりました。

宮原秀夫総長による祝辞の後、橋本日出男理事の発声により乾杯が行われ、各テーブルには賑やかな懇談の輪が広がりました。

乾杯後、留学生の代表として、法学部4年生ピヤバイチャヨン・ピヤワさん、大学院言語文化研究科博士前期課程2年生キン・メイジョさん、大学院工学研究科博士後期課

程3年生カク・ショウリュウさんがこれまでの留学生生活を振り返るとともに、関係者への感謝の気持ちを流暢な日本語で述べました。



懇談中、留学生それぞれが共に学んだ友人達やお世話になった先生方と名残りを惜しむなか、古城紀雄留学生センター長からお祝いの言葉があり、始終和やかな雰囲気の中に散会となりました。

(研究推進・国際部学生交流推進課)

事務系職員退職者送別会開催

平成18年度事務系職員退職者送別会が3月27日(火)、医学部銀杏会館で行われました。

この送別会は、本学を退職又は異動される事務系職員の方々の在職中のご尽力をねぎらうとともに、惜別の意を表するため毎年開催されているもので、退職される16名を含む75名の出席がありました。

はじめに、佐々木順司理事・事務局長から挨拶があり、続いて退職者及び異動者全員から挨拶がありました。

引き続き、関昭裕学生部長の発声で乾杯し、終始和やかな雰囲気の中で歓談が行われ、名残を惜しみつつ閉会となりました。

(総務部総務課)



退職教授との懇談会開催

総長主催による平成18年度退職教授との懇談会が3月29日(木)、医学部銀杏会館で開催されました。

これは、本学を退職または転出される教授の方々の永年の大学への貢献をねぎらうとともに、惜別の意を表すために開催され、退職される42名のうち、17名の方々が出席されました。



謝辞を述べる菅野教授



挨拶を述べる宮原総長

はじめに、宮原秀夫総長の挨拶のあと、退職教授を代表して大学院人間科学研究科の菅野盾樹教授から謝辞が述べられました。

引き続き、鈴木 直理事・副学長の発声で乾杯し、終始和やかな雰囲気の中で歓談が行われ、名残を惜しみつつ閉会となりました。

(総務部総務課)

平成18年度退職時永年勤続者表彰式挙行

平成18年度退職時永年勤続者表彰式が、3月29日(木)、医学部銀杏会館3階大会議室において、被表彰者57名のうち47名の出席のもとに挙行されました。

式は、宮原秀夫総長から被表彰者一人ひとりに表彰状と記念品が授与された後、お祝いの言葉が述べられ、続いて、被表彰者を代表して医学部附属病院看護部長の福岡富子氏が謝辞を述べ閉会しました。

今年度表彰された方は、次のとおりです。

浦野 民子(事)	高山 繁(事)
渡瀬 勉(事)	新谷 吉成(事)
大江 眞夫(事)	大谷 晃一(事)
馬久地教昭(事)	木村 道夫(事)
吉田 芳枝(図)	田中 稔美(図)
吉川 次子(図)	中山英津子(図)
中村 勝(法・高等司法)	林 かずよ(理)
豊島 忠孝(理)	田辺 桂子(理)
井辻 孝夫(理)	小椋 義明(医)
大いと利文(医)	郡 孝子(医病)
福岡 富子(医病)	菊池 素子(医病)
三村美智子(医病)	浦田 節子(医病)
東村 昌代(医病)	小島 正江(医病)
宮野 郁子(医病)	本地川美枝子(医病)
平田アサ子(医病)	貞清 祥子(医病)



今井 宣子(医病)	山口 賀久(医病)
寺田 敏(医病)	大橋 正寛(医病)
近藤 誠宏(医病)	乾 侑弘(医病)
小倉 恭子(医病)	辰巳須榮子(医病)
栃谷 常二(薬)	木下 満(薬)
有村 正名(工)	森本 幸男(工)
森本 泰弘(工)	黒須りき子(工)
福崎 重美(工)	山縣 恒明(基)
芝 定孝(基)	佐田千年長(基)
神代万亀夫(基)	菅原美佐子(基)
鶴川 種代(基)	平岡 勝己(微)
中村浩治郎(微)	田部 信重(産)
小野田紀文(産)	江口 正治(環境センター)
前田 均(レーザー)	

(総務部人事課)

豊中市および箕面市と連携協力に関する包括協定締結

「地域に生き世界に伸びる」の基本理念のもと地域・社会との緊密な連携を進める本学は、すでに平成16年に吹田市との間で連携協力に関する協定を締結していますが、本年10月に予定される大阪外国語大学との統合を契機に、北摂地域とのさらなる連携強化を図ることとして、2月27日(火)、大学等との一層の連携をめざす豊中市との間で、文化、教育・研究、環境、産業、まちづくり、国際交流等のさまざまな分野において人的交流及び知的・物的資源の相互活用などの連携協力の推進を目指す「連携協力に関する包括協定」を締結しました。

同協定の調印式は、本学から宮原秀夫総長ほか関係理事が、豊中市からは浅利敬一市長ほか関係役職員が出席して、本学事務局において行われました。

また、協定締結に引き続いて、大学院工学研究科と豊中市との間で進められてきた地域政策にかかる共同研究に関する覚書が締結され、双方の連携強化に向けた動きが早速具体化するなど、今後本学と豊中市との関係がより深まっていくことが期待されています。



浅利市長(右)と宮原総長



浅利市長(右)と豊田政男工学研究科長

本学は、3月22日(木)、大学等との一層の連携をめざす箕面市との間で、「連携協力に関する協定」を締結しました。調印式は、本学から宮原秀夫総長ほか関係理事が、箕面市からは藤沢純一市長ほか関係役職員が出席して、本学事務局において行われました。

同市には、大阪外国語大学が位置しており、両者の間にはすでに連携協力に関する協定が締結されていますが、このたびの協定締結によりこれまでの箕面市と大阪外国語大学との協力関係をゆるぎなく承継するのみならず、教育・研究、国際交流及びまちづくり等のさまざまな分野において人的・知的資源の相互交流などの連携協力がより一層深まっていくことが期待されています。

なお、本学は、今後、茨木市及び池田市など他の北摂地域の自治体とも協議が整い次第、同様の協定を締結していくこととしています。



協定書に署名する藤沢市長(右)と宮原総長

(総務部総務課)

平成19年度個別学力検査等実施

平成19年度個別学力検査等の志願者数及び志願倍率は、前期日程5,127名(2.5倍)、後期日程4,246名(8.8倍)で前年度と比して前期日程458名減、後期日程372名の増で、両日程を合わせると86名の減となりました。

前期日程試験は、2月25日(日)及び26日(月)に行われ、4,996名が受験し欠席率は全体で2.6%(昨年2.1%)でした。合格者発表は、3月7日(水)に行われ、合格者数は2,192名

(昨年2,194名)でした。

続いて、後期日程試験が3月12日(月)に行われ、1,945名が受験し欠席率は全体で54.2%(昨年48.3%)でした。合格者発表は、3月21日(水)に行われ、合格者数は512名(昨年519名)でした。

両日程合わせた合格者数は2,704名で昨年と比べて9名減でした。

平成19年度大阪大学入学者選抜試験(前期日程)合格者数等

学部	学科・専攻	募集人員	志願者数	志願倍率	受験者数	合格者数	
文学部	人文学科	125	465	3.7倍	457	137	
人間科学部	人間科学科	105	272	2.6倍	268	111	
法学部	法学科	145	362	2.5倍	359	152	
経済学部	経済・経営学科	185	592	3.2倍	573	205	
理学部	数学科	38	78	2.1倍	73	41	
	物理学科	58	105	1.8倍	99	62	
	化学科	60	130	2.2倍	123	64	
	生物科学科	20	86	4.3倍	84	24	
	理学部 計	176	399	2.3倍	379	191	
医学部	医学科	75	202	2.7倍	194	75	
	保健 学 科	看護学専攻	68	96	1.4倍	94	75
		放射線技術科学専攻	35	65	1.9倍	63	40
		検査技術科学専攻	30	77	2.6倍	75	35
医学部 計	208	440	2.1倍	426	225		
歯学部	歯学科	54	149	2.8倍	142	56	
薬学部	薬学科	20	86	4.3倍	82	20	
	薬科学科	50	128	2.6倍	125	52	
	薬学部 計	70	214	3.1倍	207	72	
工学部	応用自然科学科	173	313	1.8倍	308	186	
	応用理工学科	198	423	2.1倍	416	212	
	電子情報工学科	129	236	1.8倍	235	136	
	環境・エネルギー工学科	60	163	2.7倍	159	70	
	地球総合工学科	94	223	2.4倍	218	102	
	工学部 計	654	1,358	2.1倍	1,336	706	
基礎工学部	電子物理科学科	74	156	2.1倍	153	76	
	化学応用科学科	63	174	2.8倍	170	65	
	システム科学科	127	377	3.0倍	364	131	
	情報科学科	50	169	3.4倍	162	65	
	基礎工学部 計	314	876	2.8倍	849	337	
合 計		2,036	5,127	2.5倍	4,996	2,192	

平成 19 年度大阪大学入学者選抜試験（後期日程）合格者数等

学部	学科・専攻	募集人員	志願者数	志願倍率	受験者数	実受験倍率	合格者数	
文学部	人文学科	40	341	8.5倍	203	5.1倍	46	
人間科学部	人間科学科	25	219	8.8倍	113	4.5倍	30	
法学部	法学科	25	304	12.2倍	149	6.0倍	26	
経済学部	経済・経営学科	35	271	7.7倍	117	3.3倍	35	
理学部	数学科	9	91	10.1倍	48	5.3倍	10	
	物理学科	18	179	9.9倍	81	4.5倍	19	
	化学科	17	159	9.4倍	72	4.2倍	18	
	生物科学科	5	74	14.8倍	35	7.0倍	6	
	理学部 計	49	503	10.3倍	236	4.8倍	53	
医学部	医学科	15	135	9.0倍	40	2.7倍	16	
	保健学科	看護学専攻	10	77	7.7倍	27	2.7倍	14
		“(専門高校卒業生選抜)”	2	1	0.5倍	1	0.5倍	0
		放射線技術科学専攻	5	35	7.0倍	16	3.2倍	6
		検査技術科学専攻	10	75	7.5倍	37	3.7倍	11
医学部 計	42	323	7.7倍	121	2.9倍	47		
歯学部	歯学科	6	69	11.5倍	28	4.7倍	6	
薬学部	薬学科	5	32	6.4倍	15	3.0倍	5	
	薬科学科	5	34	6.8倍	6	1.2倍	5	
	薬学部 計	10	66	6.6倍	21	2.1倍	10	
工学部	応用自然科学科	44	472	10.7倍	202	4.6倍	44	
	応用理工学科	50	545	10.9倍	275	5.5倍	53	
	電子情報工学科	33	266	8.1倍	123	3.7倍	33	
	環境・エネルギー工学科	15	151	10.1倍	70	4.7倍	15	
	地球総合工学科	24	233	9.7倍	110	4.6倍	25	
	工学部 計	166	1,667	10.0倍	780	4.7倍	170	
基礎工学部	電子物理科学科	20	101	5.1倍	29	1.5倍	21	
	化学応用科学科	17	104	6.1倍	41	2.4倍	18	
	システム科学科	34	177	5.2倍	68	2.0倍	35	
	情報科学科	14	101	7.2倍	39	2.8倍	15	
	基礎工学部 計	85	483	5.7倍	177	2.1倍	89	
合計		483	4,246	8.8倍	1,945	4.0倍	512	

注： 理学部、工学部、基礎工学部は、第1志望学科の志願者数である。
複数の募集単位（学科・専攻）のある学部には、計を設けている。

（学生部入試課）

平成18年度卒業式式辞

本日、大阪大学を卒業する2,700名の皆さん、おめでとうございます。大阪大学を代表して心よりお祝い申し上げます。また、御家族や関係者の皆様方にもお祝い申し上げます。

大学生活では、皆さんの生涯の財産となる出会いがいくつあったでしょうか。人と深く交わり、豊かな心を育むことができる場、それが大学であると私は考えています。皆さんも4年間の大学生活を通じて、勉学で知識を得ただけでなく、人間としても大きく成長されたことと確信しています。これからも、大学生活で得た知識や経験を活かして、社会の指導的な人材として幅広く活躍されることを願っています。

さて、今日、私たちを取り巻く世界では、最先端の科学技術が社会や個人生活の中に浸透するまでの時間が短くなり、あらゆる面で激しい変化が生じています。しかし、私たちの生活を豊かにするはずの新しい技術が、これまでになかったまったく新しい問題を提起しています。本日は、私の専門分野の情報科学技術（IT）を例にしてこの問題を考えてみたいと思います。

電子メールを用いた情報交換やWebによる情報の発信や収集はもとより、インターネットを用いた新しいビジネスが展開されるようになって、ITはすでに社会基盤となっていると言えるでしょう。その結果、人々のライフスタイルまでも変えつつあることは、皆さんも日々実感されていることと思います。



少しデータが古くなりますが、全世界で電子化された情報、つまり、コンピュータに蓄積された情報量は、2003年には320億ギガバイトに達したというデータがあります。現時点ではおそらく1兆ギガバイトに達していることでしょう。これを世界人口で単純に割ると、一人当たり100ギガバイトを超える情報がすでに地球上に蓄積されているということになります。その結果、私たちは、勉学や研究、さらには日々の生活などあらゆる場面で、インターネット

を通じて知識を獲得できるようになっています。

しかし、その結果、どのような問題が起こっているでしょうか。ある調査の結果では、何かを知りたいと思った時に、家族や友人に尋ねるのではなく、インターネットに頼っている人が75%を超えるというデータが報告されています。このことは、家族や友人とのコミュニケーション、人間同士のコミュニケーションが希薄になっている過程を象徴しているのではないかと危惧されます。今、大きな社会問題になっている「いじめ」や「家庭崩壊」などの問題とも根本のところにつながっているのではないかとさえ考えています。

また、同じ調査では、全労働時間の30%を情報を検索するのに使っている、つまり、仕事の大きな部分を「情報を探す」ことに明け暮れているという結果も出ています。これは、提示される情報が多すぎて必要とするデータになかなか辿り着けないという、皆さんもきっと感じている現状をデータとして示したのですが、これをもって専門家は「インターネットの普及によって人々は膨大な情報の洪水に飲み込まれている」という言い方をしています。その結果、IT分野では、大量に存在する情報の中から、人がその時点で欲している情報をどのように提供するかが大きな技術課題になっています。このような問題に対する解決策を情報フィルタリングや情報のパーソナル化などと呼んでいますが、個人の嗜好に応じたコンテンツをコンピュータの力によって自動的に提供しようというものです。利用者はその結果、無意識のうちに必要な情報を即座に手に入れることができるようになると期待されているのですが、一方で、そのようなものに縛られたくないという欲求も当然あると思います。私も新しいアイデアを、系統的な情報からではなく、まったく思わぬところで見つかり、友人との会話中にふとしたきっかけで得られたりすることも多く経験しています。

また、フランスの哲学者ベルナル・スティグラーの言葉に「象徴的貧困」というのがあります。情報や画像、映像があふれる社会になるほど、人々の関心や話題がひとつの極に向かっていく、つまり、過剰な情報を消化できない多くの人々は、判断力や想像力が貧困になり、表面的に見えている情報のみに興味を集中させてしまう危険がある、ということの意味しているようです。

人の知的活動を支援するITとはどうあるべきかという問題を、これらの批判や指摘は提起しているのですが、解決は当然極めて難しく、簡単に答えを出せるものではありません。インターネット上に蓄積された膨大な知識は、社会や生活を質的に改善し、人類を豊かで幸福にするために利用されなければなりません。これは知識を超えた問題です。必要なのは知識を使いこなす「知恵」です。単なる知識は、知恵を与えてくれるものではありません。知恵は、社会的、文化的に相手を理解する能力であり、人間と人間の直接の深い関わりの中で磨かれる感性や倫理観です。コ

ンピュータやインターネットが発達すればするほど、人間同士の関わりがますます重要になります。どうか皆さんもそのような人間同士の関わりの中から生まれる、自分自身の視点や感性を大事にしてください。

昨年から、卒業式では、社会の第一線で活躍しておられる皆さんの先輩から直接お話を聞いていただいています。今年は、藪中三十二さんをお願いしました。藪中さんは、昭和44年に大阪大学法学部3年生で外務省に入省し、その後、シカゴ総領事、アジア大洋州局長等を歴任され、現在は政治担当の外務審議官としてご活躍されています。特に、アジア大洋州局長の時には、外交交渉で難しい仕事をこなされていたご様子はTVニュース等を通じて皆さんもご存知だと思います。本日は、お忙しい中、わざわざ皆さんのためにお出でいただきました。ぜひ藪中さんのお話から、皆さんのこれからの生き方に参考になる何かをつかんでいただきたいと思います。

最後に、皆さんが21世紀の社会で、人類の平和と幸福に貢献されることを願って、私の式辞といたします。



平成18年度大学院学位記授与式式辞

本日、修士、博士、専門職の学位を授与された皆さん、おめでとうございます。大阪大学を代表して心よりお祝い申し上げます。皆さんは、長年研鑽を積み、高い学識を修得し、優れた研究成果を挙げられました。その努力に敬意を表するとともに、皆さんを陰で支えてこられましたご家族やご関係の方々にも心より祝福の言葉をお送りしたいと思います。

今日、私たちを取り巻く世界では、最先端の科学技術がすぐさま社会や個人生活の中にも急速に浸透し、あらゆる面で激しい変化が生じています。しかし、私たちの生活を豊かにするはずの新しい技術がこれまでになかったまったく新しい問題を引き起こしています。本日は、私の専門分野の情報科学技術（IT）を例にしてこの問題を考えてみたいと思います。

電子メールを用いた情報交換やWebによる情報の発信や収集はもとより、インターネットを用いた新しいビジネスが展開されるようになって、ITはすでに社会基盤となっていると言えるでしょう。その結果、人々のライフスタイルまでも変えつつあることは、皆さんも日々実感されていることと思います。

少しデータが古くなりますが、全世界で電子化された情報、つまり、コンピュータに蓄積された情報量は、2003年には320億ギガバイトに達したというデータがあります。現時点ではおそらく1兆ギガバイトに達していると推測できます。これを世界人口で単純に割ると、一人当たり100ギガバイトを超える情報がすでに地球上に蓄積されているということになります。その結果、私たちは、勉学や研究、さらには日々の生活などあらゆる場面で、インターネットを通じて知識を獲得できるようになっています。

しかし、その結果、どのような問題が起こっているのでしょうか。ある調査では、何かを知りたいと思った時に、家族や友人に尋ねるのではなく、インターネットに頼っている人が75%を超えるというデータが報告されています。このことは、家族や友人とのコミュニケーション、人間同士のコミュニケーションが希薄になっている過程を象徴しているのではないかと危惧されます。今、大きな社会問題になっている「いじめ」や「家庭崩壊」などの問題とも根本のところにつながっているのではないかとさえ考えています。

また、同じ調査では、全労働時間の30%が情報を検索するのに使われている、つまり、仕事の大きな部分を「情報を探す」ことに明け暮れているという結果も出ています。これは、提示される情報が多すぎて必要とするデータになかなか辿り着けないという、皆さんもきっと感じている現状をデータとして示したのですが、これをもって専門家は「インターネットの普及によって人々は膨大な情報の洪

水に飲み込まれている」という言い方をしています。その結果、IT分野では、大量に存在する情報の中から、人がその時点で欲している情報をどのように提供するかが大きな技術課題になっています。このような問題に対する解決策を情報フィルタリングや情報のパーソナル化などと呼んでいます。個人の嗜好に応じたコンテンツをコンピュータの力によって自動的に提供しようとするものです。その結果、利用者は無意識のうちに必要な情報を即座に手に入れることができるようになりますと期待されているのですが、一方で、そのようなものに縛られたくないという人の根源的な欲求も当然あると思います。私も新しいアイデアを、系統的な情報からではなく、まったく思わぬところで見つたり、友人との会話中にふとしたきっかけで得られたりすることも多く経験しています。

では、知的活動を支援するITとはどういうものか、ということになりますが、これは極めて難しい問題だと思います。例えば、今必要な情報をもっと的確に提供する検索エンジンを作ることは、便利さの点では確かに重要です。しかし、それが、人の創造性を高めるといふ点では負の働きをする可能性も考えなくてはなりません。知的活動を支援するために必要なツールの条件は、人によってさまざまです。また、一人の人間でも、今何をしているか、活動の対象によっても違ってきます。これまでの科学技術は、性能や効率などの特定の目的のためには非常に大きな力を発揮してきました。検索エンジンの例でいうと、大量のデータから関係のある情報を即座に提供することは可能になっていますが、目的に合わせてうまく使い分ける能力は利用者の方に求められています。



人類の生活、特に知的生活を豊かにするためには、もっと多くの要素を考えなければなりません。特に、「人」の要素をよく考えなければなりません。情報技術は空間と時間を縮め、相互連結と相互依存が極めて進んだ世界を作り出しました。しかし、「つながり」を作る一方で、文化的な複雑さを背景とした衝突を増幅し、逆に「分裂」を促進しました。現在、人類が直面している地球環境の持続性、生命や生活の安全、国際平和などの問題は、もちろん技術の発展を抜きにしては考えられません。しかし、技術の本

質を見極めながら、技術をどのように使っていくか、その知恵が問われているのです。皆さんは、これから社会に出てそれぞれ専門の領域を持って、仕事をしていくことになります。それぞれの分野で、技術が人間に及ぼしている影響を広い視点で捉えることが必要です。そして、人類の幸福のために、技術とどう向き合っていくべきかについて見識を持つ専門家になっていただきたいと願っています。

昨年から、卒業式では、社会の第一線で活躍しておられる皆さんの先輩から直接お話を聞いていただいています。今年は、藪中三十二さんにお話ししました。藪中さんは、昭和44年に大阪大学法学部3年生で外務省に入省し、その後、シカゴ総領事、アジア大洋州局長等を歴任され、現在は政治担当の外務審議官としてご活躍されています。特に、アジア大洋州局長の時には、外交交渉で難しい仕事をこなされていたご様子はTVニュース等を通じて皆さんもご存知だと思います。本日は、お忙しい中、わざわざ皆さんのためにお出でいただきました。ぜひ藪中さんのお話から、皆さんのこれからの生き方に参考になる何かをつかんでいただきたいと思います。

最後に、みなさんが21世紀の社会で、人類の平和と幸福に貢献されることを願って、私の式辞といたします。



藪中三十二外務審議官 記念講話

本日、大阪大学をご卒業される皆様、ご卒業心からお祝い申し上げます。

私は、ただいま宮原総長からご紹介に預かりました藪中でございます。ご紹介にもありましたように、実は私、3年間しか大阪大学におりませんで、そうした中でこういう晴れがましい卒業式の場でお話しをするのも本当にそういう資格があるのかと思っております。ただ私は、もう早いもので大阪大学を去ってから約40年間、正確には38年間外務省で働いて参りました。実は、外務省というのはほとんど私の前には大阪大学から行っている先輩というのはいなかったものですから、少し心許ない思いもございましたけれども、それでも大阪大学で勉強したことを誇りに思っ

でずっと外務省で仕事をしてきたわけです。

振り返ってみますとその中で、私は、非常に幸いなことに大変やりがいのある仕事に恵まれました。今日ではもうすでに過去のような話かも知りませんが、1980年代と言うと日米の経済摩擦、日本の経済力が非常に強くて、ちょうど今の中国のような状況だったかも知れません。アメリカの中でも、さあ日本がやってくるということで大変な脅威感を持って見られ、毎日のように日本の新聞も1面トップを飾っていた、そういう日米経済摩擦の時代がありました。私はワシントンそして東京では3年間、担当の課長として徹夜交渉をずいぶんたくさんした経験がございます。その時も私の思いは、この経済摩擦、経済問題を解決することが日本のためになるんだと、そんな気持ちで当時仕事をしていたことを今でも思い出します。その後はウルグアイラウンド交渉であるとか、様々な交渉がございましたけれども、今お話いただきましたようにアジア太平洋局長として、2年あまり、中国の問題、そして北朝鮮の問題に取り組んで参りました。

今、6者協議とよく言われて、今回もいったん休会になったようでございますけれども、あの仕組みを作り上げた責任者でございましたし、最初の3回の協議の日本代表を務めさせていただきました。その後、経済関係ということで、GHサミットのシェルバ、総理の個人代表などもやっておりましたけれども、そうした中で、私自身、経済問題あるいは様々な外交問題で、痛感したこと、感じたことを、これから社会に巣立って行かれる、大きく羽ばたいて行かれる中で少しでも皆様のお役に立てばと、そんな思いからいくつかのお話をさせていただきたいと思っております。

まず、最初にお願したいこと、私が強調したいことは、是非グローバルな視点を持って皆様には社会で働いてほしいということです。そしてできれば、グローバルなスタンダードを一つでもいい、二つでもいい、皆さんの手で作り上げていただきたいということです。グローバルってというのはもう、何も新しい話ではない、もう言い古された言葉かも知りませんが、私自身が外交交渉をするにあたって、日本のこともしっかりと踏まえなければいけない、その日本を考えますときに、グローバルな視点を持つのが、非常に難しい国に住んでるなという感じがいたします。ある意味、日本というのは幸せな国なんだろうと思っております。非常に平和で豊かな社会、四方を海で囲まれていて、そうした中で考えてみますと、例えば世界で起きているテロの問題、あるいは、麻薬の問題、エイズの問題、そしてほととけないほどのアフリカのあの貧しい貧困の問題、そしていろんな地域紛争、こうした問題が今世界の各地で起きていることです。しかし我々日本にいますと、それは頭ではわかっていても、肌身で感じる問題ではない。日本にひとたびいけば、いろいろ犯罪率が高くなった云々と言いますが、世界の全体の状況と比較してみると非常に平和な

社会、ある意味で、世界と隔離して生きていける非常に幸せな社会なんだろうと思っております。毎日皆さんが、日本の新聞を読む、そして日本のテレビを見ている、そうした中では、まさに世界とあるいは世界で起きているそうした出来事とは異なる社会で過ごしていけるということではないかと思っております。



欧米を見てみますと、やはりヨーロッパというのは、今EU27カ国ですが、毎日が色々な国とのつきあいがそこにある。アメリカを見てみます、これはもう世界スーパーパワーとして、もちろんアメリカのテレビを見ているとローカルなことばかりやっているかも知れない。しかし、アメリカが発信する力というのはおのずから非常に大きな影響力を持つ訳です。アジアでも同じことが起きている。アジアでも中国、インド、やはり今非常に大きな勢いを持って、グローバルな力を持ちつつあると思うんです。

私がシカゴにいました時に、アメリカのインディアナの大学に行きました。色々な話をしたわけですが、その時に、中国からは800人の学生が来ている、インドからは600人の学生が来ている、韓国からも200人来ていたんですね。ところが、そのアメリカの大学には日本からは50人の学生でした。これは一つの大学ですけれども、その後色々調べてみますとだいたいそういうレベルで、日本の10倍以上の中国人の学生が、アメリカで勉強している。それが10年以上続いている。その積み重ねというのは非常に大きなものがあって、そして多くの中国の学生は、自国へ戻ってそして重要な地位についている。したがって彼らからすると、その積み重ねが非常にグローバルな視点を中国に与えているというところは否めないのだろうと思っております。例えば、経済のことを見てもですね、日本の中で、いやいやまだ中国の経済っていうのは大したことはない、色々な問題があるんだと、これからきつとうまくいかなくなるぞと、そういう思いで見える人も多い訳ですが、私はもう少し実態をきちんと見る必要があるというふうに思っています。中国の中で、今アメリカ企業との一体化が進みつつあります。アメリカ企業を代表する例えば、ウォールマート、これはスーパーマーケットです。しかし、これは今アメリカの中でもっとも大きな力を持つ企業、それがも

キャンパスニュース

う今や中国を第2のあるいはメインターゲットにしている。マイクロソフト、あるいはボーイング、そしてまた金融の世界でウォールストリートの各々の銀行、そうしたところは今中国と一体化しつつあると、そういう現実が起きている。私の友人の話では、言葉を借りますと、米中経済同盟であると。そういう状況が今できつつあることを我々はきちんと認識した上で、これからの世界に望んでいかなければいけないんだと思います。そうした中で、私は皆さんに先ほどお願いしましたグローバルスタンダードということ、これをいろんな分野で、皆さんがこれから出て行かれるいろんな分野で少しでも心がけてそういうのをひとつ作ってやろうじゃないかと、そんなことでやっていただきたいと思うんです。

この意味はどういうことかということなんですけれども、今まで日本はもちろんすばらしい経済発展を遂げてきました。しかしそれはご承知の通り、もの作りの日本だった訳です。もちろん今でも非常に大変重要なもの作りです。車にしてもそうです。あるいはいろんなデジカメにしても、日本がグローバルに通用するものを作ってきたではないかと。それはその通りであって、それはまさに1980年代、日本が世界で最も輝いた、世界での経済であったわけですから。ところが、皆さんもう十分ご承知の通り、21世紀、これはハードからソフトへの移行というのが言われています。ソフトの持つ重要性というのが言われている訳で、そこでは、世界に通じるソフトウェア、世界に通じるシステム、私はそれをグローバルシステムと呼んでますけれども、これを作っていくかきかない。そういう時代に来ている訳です。例えば身近なところでは、皆さん持っておられる携帯電話、1990年代に、日本のハードウェアとしての携帯電話っていうのはたぶん一番優れていたんだと思います。電池が長持ちする等々、アメリカのものに比べても圧倒的に日本のものが優れていた。しかし何が起きたか、と言うと、今日本の携帯電話企業というのですか、その携帯電話を作る日本の企業を考えると、マーケットシェアということでは世界の10%にも満たません。ノキアに負け、あるいは韓国のサムソンに負け、どうしてそうなったんだろうと。それは答えは非常に簡単で、日本のシステムがグローバルなシステムじゃなかったからなんです。



同じようなことが外交の世界でもあります。これは私、もちろん反省を込めて言わなくてはいけませんけれども、今、ゴア元副大統領ですか、非常に有名になっていますけれども、気候変動の問題、地球温暖化の問題があります。いやいやこれは日本が世界の中で重要な役割を果たしたんじゃないかというふうに思うかも知りません。京都、というのがその言葉で、京都コンベンション、京都プロトコルというのがこの問題を語る時には、必ず世界の人々の口から出る言葉です。しかし実態を見てみますとですね、実はこれはヨーロッパのシステムで、ヨーロッパが提案したシステムというルールが基本になってしまっているんですね。つまり、地球温暖化問題にどういふふうに対処すべきかということで、排ガス、そしてまた温暖化ガスの排出量をどれだけカットするかということが問題になって、ヨーロッパが提案したのが1990年、1990年をベースとしてどれだけこれをカットしていくかと、日本は6%カットする、これは今大変な作業になっているわけです。来年から始まりますけれども、実際に今すでに1990年に比べ8%増えている。したがってこれから14%減らさなければならぬ。実はこれを見ますと、イギリスなどはもうとっくにその目標を達成している。それは何故かということ、石炭から別の物への、石油等々への転換というのが初めから予定されていた。したがって1990年をベースにするということはヨーロッパにとっては非常に楽な話になっていた訳です。日本はそれまでに大変な経済効率を高め、省エネの努力をしてきましたが、それが全然カウントされていないんですね。どうしてそうなったかということなんですけれども、どうやってそういうルールづくりをグローバルなスタンダードづくりをするかと、ここがポイントになっているんだと思います。そういう意味で我々もこれから外交をするにあたってですね、そういう意味でのグローバルスタンダードというのをどうやって作っていくかというのが非常に大きな仕事になっている訳で、いろんな分野で皆様がまさに仕事をされる際にも、そういう点は大いに心がけていただきたいと思います。

第2番目のお願いですけれども、それは是非皆さんに論理立ったものの考え方、話をしてほしい、そういうことを

心がけてほしいということなんです。外国と交渉する、外国の人と話をする。相手はやはり文化も違う、人種も違う、歴史的な背景も違う、宗教も違う、そうした中でどうやって話をするかと。日本にいますと、なあなあとかまあまあとかあまりこう言葉を使わずとも何とかやっていける。むしろ論理立って話をするというのは極めてネガティブなイメージというか、あいつは理屈っぽいやつだとかですね、非常にマイナスのイメージが強いんだろうと思います。外国と話をするときには、どうしてもこの論理、ロジックをきちっとした物事の発言、これが非常に大事なんだろうと思います。私が外国にいたときに、日本から来た人が、外国の人に言うんですね。「これは日本にとって非常に大事な問題だ」と。「日本にとって非常に特殊な問題なんだ」と。「だからまあ何とか理解して下さい」と。これでは勝負にならないんですね。これでは話にならないんです。そりゃお互いに重要なことはいくらでもあるわい、こういう話になる訳ですけども、そこをきちんと理屈立ってというか、理論立って話をすることが非常に大事なんだろうと思います。私が拉致問題を担当していました時も、最初実は6者協議、その場でこの拉致問題を取り上げる、取り上げないというときに、いくつかの国は、「この6者協議というのは核の問題を処理するところである」「核の問題の解決こそが大事なんだ」と。したがって、拉致の問題、それは重要なのはわかるけども、別のところでやってくれと、こういう話が実はありました。それに対してですね、「いやいや、拉致というのは、拉致の問題というのは、日本国民にとって大変重要な問題なんだ」とそれはその通りなんです。それはその通りなんです、それだけを言っているんでは、どうしても話にならないわけです。私はそこで言ったのは、北朝鮮に核を放棄させるためには何が大事かと、それは大きく言って二つだと。一つはアメリカが安全保障について何らかの保障をすることだと。ただ、それだけでは生活は良くならない。もうひとつは経済復興ということがあるんだと。日本は、日朝国交正常化をすれば相当大規模な経済協力をする、したがって、日朝国交が正常化になるということが、まさに北朝鮮にとって核を放棄させるための大きなツールというか、大きなたまである。ただ、そのためには、日朝の間でのこの拉致の問題を解決しなければならないんだと。したがって拉致の問題を解決する、そして国交正常化になる、経済協力をするということがまさに北朝鮮をして、核を放棄させる非常に大きな重要な出来事、手段なんだと。こういうまあ一応のロジック、論理をたててずいぶんと議論したものです。幸い今、6者協議の中でもこの拉致問題というのが一つの枠として、枠の中の大きな要素として取り上げられていることを、私は非常にそういう意味で大事であったらと思うわけでございます。

それで、そうした中で私が今申し上げました、グローバルな視点を持って是非これからの社会に出ていっていただ

きたい、そしてできればいろんな意味でのグローバルスタンダードを作っていただきたいとお願ひしましたけれども、そうやって世界に出ていくときも、最後になりますけれども、第3の点は、当然のことながら我々外国に出ていくときに日本に誇りを持って、そして世界と渡り合うと。これは我々にとって非常に大事なことだと思います。もちろん、日本の文化伝統というのは非常に素晴らしいものです。われわれ十分それを誇りに思っている、そういう文化と伝統を持っているわけです。ただそれだけではたぶん十分じゃないんだろうと思います。世界に出て行って日本が胸を張って世界にどういうメッセージを発するか、私自身はいつもそういう意味での思いから、3つのメッセージ、イメージを日本をといえれば世界の人が思ってくれる、そういうことになればいいんじゃないかと思っていました。その一つは「環境に優しい日本」、二つ目は「軍縮を推進する日本」、三つ目は「貧しい途上国の国造りを助ける日本」、そういうイメージ、メッセージというのを世界に発出することが私は大事ではないかと思っています。

幸いなことに日本に対する世界の目線というのは、比較的には良好なものがあります。例えば、アニメは子どもの間に世界中で人気がある、あるいは日本食、これは今や世界をリードする健康食であるというようなことはありますけれども、そうした中でそれに加えて、日本のメッセージを、日本の持つメッセージ、そして日本が目指す方向性ということを我々は常に考えていく必要があるんだろうと思っています。そういうことで私日々外交交渉にあたってはいますけれども、是非皆さんこれから社会に出られて大変ないろんな場で活躍される、そうした際に私の申し上げたグローバルな視点の重要性、そして一つでも自分のやっていることで、世界に通用するようなシステムを作ってやろうではないかと、そんな思いを持ってこれからご活躍していただければ私にとっては非常に幸いなことです。そんなことを申し上げまして、私の皆さんへの心からの祝辞とさせていただきますと思います。ありがとうございました。



やぶなか・みとじ

プロフィール

外務省外務審議官。1969年大阪大学法学部中退後、外務省入省。1973年、米コーネル大学卒業。在シカゴ総領事、アジア大洋州局長等を歴任、日本の首席代表として日朝協議にあたるなど外交の最前線で活躍。

平成19年度入学式告辞



まず、本日ここに集われた2,694名の学生諸君、入学おめでとうございます。また、ご臨席いただいたご家族のみなさまにも心よりお祝い申し上げます。

みなさんはこれまでずっと勉学に励み、難関を突破して、晴れて今日、この大阪大学に入学されました。そして今、大学ではこれをやりたい、あれもやりたいと、大きく胸を膨らませていらっしゃることでしょう。大学としても、みなさんのその夢が十分になうよう、しっかりサポートしていきたいと思っています。

さて、私は、大阪大学総長として、ことしは任期最後の年を迎えます。残念ながら、みなさんとは半年だけのおつきあいとなります。そこで、在任中最後となるこの告辞では、私がこの4年間に、とくに大学教育ということとくに感じてきたところ、腐心してきた事柄について、いくつか、みなさんにお話ししておきたいと思います。

私が情報科学の研究に取り組みはじめたのは、ちょうどインターネット通信がスタートした頃でした。1970年、米国防総省の高等計画局がインターネットをスタートさせ、この年は「インターネット元年」とも呼ばれました。その後、情報量は次第に増加していきましたが、世紀の変わり目あたりから、光ファイバーネットワークの出現もあって、電子情報の量は急激に増加しはじめました。2000年から2003年まで、わずか3年のあいだに、私たち人類は32ピリオングガバイト、320億ギガバイトの情報を扱うようになりました。これがいったいどれくらいの情報量なのかは、私にもなかなかイメージできません。地球にいるすべての人が、たとえば10ギガバイトのメモリー量のPCを使い、そのメモリーを全部使い切ったとしてもまだ余るくらいの量です。

このころから、私たちは、「情報の洪水」を超えて、「情報爆発」といわれる時代に入ってきました。携帯電話にかぎらず、いまや私たちの身の回りのもの、あるいは都市環境は、ことごとく電子情報に媒介されていて、電子情報はもはや私たちが使うツールであるというよりも、それ自体が私たちの環境となっています。

この「情報爆発」に私は大きな夢を託してきましたが、他方で、情報科学者として、それを危ぶむ気持ちももっています。「情報爆発」はたしかに情報量の途方もない拡大、つまりは外へ向けての爆発、explosionですが、他方でそれは、内へ向けての爆発、つまりは内部爆発。専門語では(内を破ると書いて)「内破」implosionと言いますが、そうした内部破壊を人びとのあいだで引き起こしつつあるのではないかと思うからです。

情報量の爆発的な拡大はたしかに生活をたいそう便利にしました。たがいの連絡、改札口の通過、さまざまな情報へのアクセスを、驚くばかりにスピードアップしました。しかし、同時にそれは、けっして健全とは言えないいびつな行動を人びとにもたらしつつあります。たとえば会社では、仕事時間のうちの30%が情報検索に使われていると言われます。仕事のかなりの部分が情報を探すことに費やされているのです。Search after search、つまりは「検索のための検索」に陥っているのです。これは異様なことです。またこんな統計データもあります。コンピュータを使う人のうちおよそ75%の人たちが、何か事が起こったときに、家族や友人に尋ねるより先に、ウェブを検索するということです。人びとの関係を密にするはずだったインターネットが、逆に人びとをたがいに疎遠にしつつあるのです。さらにもう一点付け加えますと、たとえばグーグルで検索すると、情報は閲覧された回数とかその情報に張られたリンクの数とかのランキングに従って表示されてきます。そこでは多数派の意見が実際の割合以上に多数を占めるという印象を与えます。こうして情報はますます一元化され、当初めざされていた意見の多様性は広がるどころか逆に縮小してゆくのです。



ここで私たちはあらためて考えなければなりません。情報革命はわれわれの知的活動をほんとうにサポートしているのか、情報爆発はわれわれの知的な創造性をほんとうに活性化するのか、こういう問いに今こそきちんと向きあわなくてはなりません。

情報は、一人一人の世界を広げ、人びととのネットワークを広げるはずのものです。世界を広げるというのは、自

分の知らない世界にふれるということです。自分にとって異質なものにふれるためには、自分に予想できる世界、自分に理解できる世界、つまりは自分がなじんできた世界の外へ出なければなりません。情報はそのためのエンジンとしてあります。

じつは、みなさんが入ってこられた大学というところも、そのためにあります。大学では、これまで知りたいと思ってきたことを知るだけでなく、これまでそんなものがあることさえ知らなかった「ものの見方、問い方、考え方」にふれることが何よりも大事だからです。大学にはみなさんがおそくはまだ知らないさまざまな知識が膨大に蓄積されています。宇宙についての、自然についての、社会や文化、そしてそれらの歴史についての知識です。その大学で、過去の思想ともう一度対話しなおしたり、自分とは異なる他者のものの見方、感じ方に学んだりしながら、自分の世界を広げてゆくこと、そしてこれまで当たり前のように見てきた世界をもっと別な視点から捉えなおすことで、世界を広げてゆることが大学での学習ではもっとも重要なことなのです。

科学の研究においても、個人の生き方においても、新たな発見をし、新たな生き方を身につけるためには、視野を広げることをまずはしなければなりません。そしてそこから見えてきた未知のものを怖れることなく、それに柔軟に（flexibleに）向きあい、自分の視野そのものを広げていかなければなりません。そのためには、今の自分にとってノイズとしか見えないものが、じつはチャンスとなるのです。思いがけないもの、ふとしたきっかけで出会ったもの、一件ノイズに見えるこれらのものが、知的なクリエイション、知的なジャンプを可能にするのです。なじんでいるものばかりに囲まれていると、世界はどんどん小さくなっていきます。先ほど申し上げた「情報爆発」には、皮肉にも、そういうふうに世界を狭める怖れがあるのです。

このような思いから、私は、総長就任とともに、大阪大学がめざすべき三つの教育目標を掲げました。

一つは「教養」を育むということです。「教養」とは、過去の思想・文化、異質な社会の思想・文化を知り、そのうえで広い視野に立った物の考え方ができるということです。

二番目は、「デザイン力」を磨くということです。現代は、社会運営においても、学問研究においても、異なる領域の異なる知恵や知識を編集し、新たな知的領域や新たな社会の仕組みを構想する、そういう「しなやかな知性」が求められています。わたしはこうした知性を身につけた人を「柔らかな専門家」と呼んできました。「柔らかな」というのは、自分の考え方に閉じこもらずに、自分とは異なる考え方に開かれているということです。そういう「柔軟性」(flexibility)のなかでしか、社会の、あるいは、学問の刷新は現われてきません。

三番目が「国際性」を身につけるということです。これ

は言うまでもなく、異質なものの考え方、感じ方に開かれているということです。それらときちんとコミュニケーションできるということです。これもまた人類社会全体に視野を広げるために、絶対に備えていなければならない能力です。

これら三つの能力を育むために、私は三つの教育センターを大阪大学に設置しました。一年目には「教養」を育むために大学教育実践センターを、二年目には「デザイン力」を鍛えるためにコミュニケーションデザイン・センターを、そして今年、「国際性」を身につけるためにグローバルコラボレーションセンターを開設しました。

「教養」「デザイン力」「国際性」の三つはたがいに深く結びついています。この三つを一言でいえば、「グッド・センス」を身につけるということです。

「グッド・センス」は、感覚的なものであるとともに社会的なものでもあります。つまりそれは、一方で、研ぎ澄まされた繊細な感受性を意味するとともに、他方では、「コモンセンス」という言葉にもうかがえるように、広い視野に立つ確かな社会的見識をも意味します。そういう二重の意味で「グッド・センス」を身につけた学生を育てること、それを大阪大学は、教育の重要な目標に掲げています。

ほんとうの意味で「賢く」なること、みっともないことはしないこと、このことを肝に銘じた教育をしたい、これが大学教育に懸けてきた私の強い思いです。



ここで少し歴史を振り返りますと、「賢く」あること、みっともないことはしないこと、そのことをかつての大坂町人はいまよりも強く心がけていました。

近世における大坂は「天下の台所」と呼ばれ、わが国の経済の中心地でした。元禄の世、すなわち西暦1700年頃の日本は、その経済発展のなかで太平と繁栄に浴していました。しかし、いまでいうこのバブル経済もやがて崩れゆき、幕府や各藩は深刻な経済危機に見舞われることになりました。大坂商人は当時すでに全国の経済を動かす力をもっていました。諸藩の経営悪化による貸し倒れの危険にさらされるようになりました。そうした不安定な状況のなかで大坂商人が抱くことになった強い信念は、「子孫に残せる真の財産は教育しかない」というものでした。そこで

キャンパスニュース

享保九年（1724年）五同志とよばれる五人の商人たちが資金を募り、学者を招いて、町人のための学問所を創りました。それが懐徳堂です。天保年間には、のちに福沢諭吉をはじめとして明治期の日本国家を担うことになる人材を数多く輩出した適塾も開かれました。

なぜ大坂に、全国でも例のない町人の学問所が生まれたのか。その理由として、歴史家は次のようなものを挙げています。まず、当時の大坂には文化を育み、花咲かせるだけの富が集積されていたことがあります。次に、戦国の争乱のち優れた人材が、領主の拘束のない市井に隠遁していたこと、また諸藩の蔵屋敷には豊かな教養をもつ役人が数多くいて、そこに出入りしていた大坂商人にはなにより文化的素養が求められたこと、最後に、幕府や藩の法による締めつけから一定の距離を置くことのできた大坂では、人びとは自由な雰囲気の中かで学問や芸術に取り組めたということです。

大坂町人はこうして自分たちで基金を集め、自分たちを高めていくための学問所を開設したのです。その二つの学問所、懐徳堂と適塾を、大阪大学がその精神的な源流と位置づけていることの意味はきわめて大きいものです。「賢く」あること、みっともないことはしないこと、その精神を、大阪大学は、みなさんとともにしっかり受け継いでいきたいと思っています。

大学において学問研究を極めるということと、一市民として他の苦しんでいる人びとを思いやるということとは、異なる二つのことではありません。自然や社会の出来事を、そうした出来事を引き起こしている見えない構造のほうか

ら突きとめようという科学の姿勢と、自分では体験しようのない他人の心の内を思いやろうとする対人関係の態度とは、視点をいったん自分のここという場所から外して、出来事の側に、あるいは他人の側に置くという意味では、じつは同じ性質のものなのです。ほんとうの科学は思いやりのあるものであるはずだ、というのが私の信念です。そしてみなさんにはこのような科学の精神をこそ、大阪大学で身につけてもらいたい、そうして「社会からの厚い信頼」を寄せられる社会人・研究者となってこの大学を巣立って行っていただきたい……。私は心からそう願っています。

大阪大学に入学されたみなさんは、たんに教わるだけでなく、次の時代の大学を、そして社会をともに作りあげていくパートナーでもあります。そういう思いで、最後にもう一度、みなさんに心から「ウェルカム」という言葉を贈ります。



味わうこと食べることの人間科学 口腔生理学から行動生理学へ

大学院人間科学研究科教授 山本 隆

私は、昭和43年に大阪大学歯学部を卒業後、同大学歯学研究科の博士課程に進学し、口腔生理学講座に所属しました。口腔生理学は、私の師である河村洋二郎先生が日本で最初に確立された学問領域であり、研究室ではいくつかの世界最先端の研究を行っていました。私はその中でも味覚の研究に興味を持ち、今日に至るまでさまざまな研究に取り組んできました。その例をあげますと、1) 味覚神経応答の記録、2) 大脳皮質ニューロン活動の記録・分析、3) 自由行動動物における脳細胞活動の記録・分析、4) 味覚と唾液分泌に関する神経生理学的研究、5) 早期発現遺伝子 c-fos を用いた脳細胞活動と行動の相関に関する研究、6) 味の学習と記憶、7) 味覚と食行動に関するヒトを対象とした非侵襲的脳機能計測、8) 食べ物のおいしさ・まずさ、好き・嫌いの脳機構に関する研究、などです。講義では、これらの多様な研究から得られた興味深い知見の数々を紹介しました。



このように私が種々の研究を推進することができたのは、良きライバルに恵まれたことが大きな理由であると考えています。自分と同世代の優秀な研究者たちに負けないよう努力したことが、これまでの研究成果につながっているように思います。また、研究生生活の途中で、歯学部から人間科学部へと異動しましたが、そのおかげでミクロな視点だけでなく、マクロな視点にたった研究にも取り組むことができました。これまでの研究成果が、若い研究者たちの手によって、さらに発展していくことを期待しております。

やまもと・たかし

プロフィール

略歴：昭和43年大阪大学歯学部を卒業。昭和47年歯学博士。昭和47年大阪大学歯学部助手。昭和52年同講師。昭和61年同助教授。平成3年大阪大学人間科学部教授。平成12年大阪大学大学院人間科学研究科教授。人間科学部では行動生理学講座、人間科学研究科では行動生態学講座行動生理学研究分野を担当。日本味と匂学会会長、日本官能評価学会理事、日本生理学会評議員、日本神経科学会専門委員などを歴任。河北師範大学生命科学院名誉教授。三島海雲記念財団学術奨励賞、安藤百福賞基礎部門優秀賞および大賞、日本味と匂学会賞などを受賞。

日本の医療制度を考える

大学院経済学研究科教授 今井 豊

我が国の医療制度に対する国際的評価は高い。その理由は、国民の健康度が先進国中最も高いこと、国民皆保険制度のもと保険証1枚で何時でも何処でも一定の質の医療を受けられること、そして総医療費が低位にあること、である。一方、我が国の医療制度が量から質への大きな転換期に入っていることも確かである。本講義では国際的及び歴史的視点から我が国の制度を考察し、転換期において重視すべき目標につき解説した。大きな目標は二つある。その第一は、医療にかかわる金銭的負担の不等性の是正である。垂直的不等性については基礎的な研究が待たれる。保険料の水平的不等性は顕著である。政府の制度改革の明示的な目標にはなっていないが、保険組合の県レベルでの統合によりある程度の是正は期待出来る。第二の目標は、医療の質と患者満足度の増大である。この達成には、複数の専門分野で十分な臨床経験を積んだ一般医及びチーム医療が必要である。医療の高度化が進む中、インフォームド・コンセントを担保する為にも患者の補完的代理人としての一般医の役割は大きい。臨床研修の義務化により一般医育成への第一歩が踏み出されたが、研修期間の延長や一般医の資格の導入が待たれる。



いまい・ゆたか

プロフィール

略歴：1967年慶應義塾大学経済学部卒業後、フルブライト留学生として米国テキサス州ライス大学博士課程に学ぶ。1971年経済学博士号取得。UCLA経営大学院で教鞭をとった後帰国、株式会社ポストン・コンサルティング・グループで経営戦略コンサルティング活動を行う。1975年渡欧、OECD（経済協力開発機構）事務局エコノミストになる。主に国別経済審査を手がけ、国別審査部長として24カ国100以上の審査を担当。2003年以降現職。大阪大学では、医療経済学、国際金融論、日本の経済政策を講義。

糖鎖の蛍光標識法

大学院理学研究科教授 長谷純宏

新しい方法を使えば、新しいものが見えるはずだという信念のもと、糖鎖の蛍光標識法を世界で初めて開発した。この方法を用いると、糖鎖を高感度で検出できると同時に、標識糖鎖の逆相クロマトグラフィーによる分離が非常に良かったので、従来大変な労力が必要であった微量な糖鎖の構造解析が簡便に行えるようになった。1978年の発表当時、ほとんど顧みられることがなかったが、それから約十年を経て、世界中でこの方法が使われるようになると共に、類似の方法が多数発表されるようになった。次に、この独自法を用いて数々の新規な糖鎖や糖関連酵素の発見に成功した。その一つに、植物のエンドマンノシダーゼがある。この酵素活性は、初めて見出されたものでありECナンバーが与えられた。さらに、この酵素を人為的に減らすと植物の生長が遅くなり、増加させると促進されることを見出した。また、キシロシルグルコース型と呼ばれる新規な糖鎖構造を血清糖蛋白質中に発見し、その生合成酵素の研究へと進展させた。今後、糖鎖の蛍光標識法を用いた世界中のグループから、多くの新規な知見が報告され、糖鎖の存在意義の解明につながることを期待している。



はせ・すみひろ

プロフィール

略歴：昭和41年大阪大学理学部化学科を卒業。昭和43年同大学院理学研究科有機化学専攻修士課程を修了。昭和46年同大学院同専攻博士課程を中途退学。同年同大学理学部化学科助手。昭和59年同講師、昭和63年同助教授を経て、平成元年同教授に昇任。日本糖質学会会長。
専門分野：有機生物化学、とくに糖鎖と関連酵素の生化学研究。

老年医学の展望 Successful Agingをめざして

大学院医学系研究科教授 荻原俊男

健康に寿命を全うしたいという人類の夢に近づくべく、老年病と高血圧を中心に一貫した研究を行ってきた。主な研究の成果を列挙すると、直接RIAによるアルドステロン測定法の開発、アンジオテンシンアナログの臨床応用と診断法の確立、加齢・食塩バランスと内分泌因子の動態に関する研究、本態性高血圧の遺伝子解析とゲノムスキャン、ハッチンソン・ギルフォード・プロジェリア症候群など遺伝的早老症の原因遺伝子変異同定、NODマウスやNSYマウスを用いた糖尿病遺伝子解析、Apop-1やUCHL1などの新規因子同定と機能解析、循環器疾患におけるアディポネクチン、Klothoの作用機序解明などがあげられる。治療面では、NF- κ BやE2Fのアンチセンスやデコイといった核酸医薬の開発、肝細胞増殖因子(HGF)を用いた閉塞性動脈硬化症の遺伝子治療、高齢者高血圧治療のガイドライン策定、CASE-Jをはじめとする降圧薬の大規模臨床試験の実施などを行ってきた。最終講義では、これら教室の研究成果を中心に、時代背景、共同研究者の紹介を交えながら、今後の高齢社会への本教室の取り組みについても触れた。また最後に、病院長として過ごした3年間への感想、サポートいただいた多くの方々への謝辞で締めくくらせていただいた。



おぎはら・としお

プロフィール

略歴：昭和43年3月大阪大学医学部を卒業。大阪府立成人病センター、米国アリゾナ大学内科研究員を経て51年大阪大学医学部助手。56年同講師、59年同助教授を経て、63年同教授に昇任。平成14年医学部附属病院副院長、16年医学部附属病院長、17年大阪大学総長補佐。
高血圧の成因・治療に関する研究を一貫して行い、特にレニン・アンジオテンシン系を中心に、アルドステロン測定法の開発、レニン・アンジオテンシン系阻害薬の臨床応用にはじまり、最近では分子生物学的手法を導入、高血圧・糖尿病・老年病などの遺伝子解析、循環器疾患の遺伝子治療を教室のテーマとして精力的に行う他、老年者高血圧のガイドライン作成など老年病の分野でも活躍中。2001年世界初のHGF遺伝子治療の臨床応用(末梢閉塞性動脈疾患)を開始した。2006年10月第21回国際高血圧学会(福岡)会長。

潰瘍学研究：35年の流れ

大学院医学系研究科教授 川野 淳

消化性潰瘍の発生・治癒は、胃酸などの攻撃因子と胃粘膜血流などの防御因子のバランスのくずれによる。潰瘍学研究は、入局時の主な研究手法であった Medical electronics (ME) 手法を用いたものに始まる。臓器反射スペクトル解析装置は、白色光を臓器表面に照射し、その反射光を分光分析することにより胃粘膜血流を解析するものである。その原理は電子内視鏡に応用され、瞬時に胃粘膜血流画像を得ることが出来る機器が開発されている。本装置を用いて解析した結果、急性胃粘膜病変は血流の低下がその発生に先立って見られ、主因であることが明らかになった。一方、慢性潰瘍では潰瘍周辺の血流増加が治癒に重要である。一部の酸分泌抑制薬は、粘膜血流の低下を抑制する作用も有していることから、本剤を投与することにより急性胃粘膜病変の発生は1/3以下に抑制される。現在では、多くのストレス下の患者では本剤が予防的に投与されることが多い。1980年代には、ME的手法に加えて分子生物学的手法を加えた研究が医局の方針となり、潰瘍発生治癒にかかわる遺伝子解析を行った。特に、プロスタグランジン(PG)生成酵素である Cyclooxygenase2 (COX-2) の役割を研究した。胃粘膜には特に PGE2 が多く存在し、潰瘍治癒時には潰瘍周辺の粘膜には COX-2 が誘導され治癒を促進する。1999年に保健学科に異動してからは、主に再生医学による潰瘍治癒を検討した。骨髄及び骨髄系間質幹細胞が上皮または平滑筋、血管内皮細胞に分化し潰瘍を治癒せしめることを報告した。潰瘍の成因には、100年以上前の血管攣縮説と炎症説があるが、まだ決着がつかず判らない部分が多く、生体の不思議さを痛感した。



かわの・すなお

プロフィール

略歴：昭和46年大阪大学医学部卒業、大阪大学医学部附属病院第一内科入局。昭和52～54年米国テキサス大学生化学教室研究員、昭和54年大阪大学医学部助手、平成7年同講師、平成9年同助教授、平成11年医学部保健学科病態生体情報学講座教授。
 専門分野：消化器病学、消化器内視鏡学、特に潰瘍の病態生理。
 所属学会：日本消化器病学会、日本消化器内視鏡学会、日本内科学会ほか。

画像解析と医学応用40年

大学院医学系研究科教授 田村 進一

大学院入学以来、ずっとパターン・画像の解析とその医学応用の研究を行ってきた。この間、「パターンのfuzzy分類法」(21年後に複製出版)、「超音波画像の3次元表示システム」(70年代の商品化)、画像で実時間位置決めを行う「正規化相関器」(1984年世界初)、「手話通訳システム」(85年科学博)、「脳波・脳磁図の伝播解析」(隠れた脳機能の検査)など、多くの研究を行ってきた。また、「時空方向空間」では、ヒトの目でもかろうじて認知できる眼底毛細血管中の血小板1個1個の軌跡などの分離検出を行うことができた。これにより、画像解析技術への自信を強くした。X線画像撮影に関しては、統計的解析手法を用いれば、未利用X線を利用して低線量化(数分の1)が可能であることを示すことができた。当教室ではまた、多くの大学と協力して、一度の3次元CTスキャンで多臓器・多疾病を同時に検査するシステムの開発(特定研)を行ってきている。手術支援に関しては、関節(硬組織)や、肝臓、膀胱、腎臓など軟組織のナビゲーションも行ってきた。これらは教室員、共同研究者らの多くの支援で行うことができたことは、関係者への感謝と誇りに思うところである。



これらの研究のように、医学における工学・情報学の役割は益々大きなものとなってきているが、臨床医学者と工学・情報学者の思い・評価の間にはしばしばギャップがあり、日常的な交流が容易となるような制度的・地理的な施策などが必要であると思っている。

たむら・しんいち

プロフィール

略歴：昭41年阪大基礎工電気卒、46年同博・了。同助手・助教授を経て、63年に医・機能画像診断学教授(現・画像解析学)に昇任。Pattern Recognition Society 論文賞など、国内外11賞受賞、Pattern Recognition 誌の Associate Editor、NEDO 評価委員会分科会長など歴任。

美しい分子の世界を旅して

大学院工学研究科教授 甲斐 泰

X線結晶構造解析は、物質を構成する基本となる分子の立体構造を明らかにするのに適した手法であり、自然界で進行する化学反応を立体的な場に基づいて理解するために欠かすことができない。分子は化学反応の各段階において様々な姿かたちを変える。機能を示し、目的を果たすために連携しあう分子の世界は、その詳細を解き明かしていけばいくほど美しい姿を示してくれる。修士論文のテーマで出会った有機アルミニウム触媒による立体特異的重合反応の系に美しい分子の世界を垣間見てから、40年にわたる旅を経て出会ったものは、C4植物の炭酸固定酵素ホスホエノールピルビン酸カルボキシラーゼであった。酵素が活性阻害分子、活性化分子、反応基質などどのように作用しあいその構造を変え、酵素活性を示しているのか、その分子機構を詳細な構造化学的情報に基づいて解き明かすことができた。



X線結晶構造解析の研究は、単に化学反応の詳細な理解というだけではなく、広くは物質の持つ機能を、それを構成する原子、分子、イオンなどの立体構造に基づいて理解し活用する立場から、この40年間に飛躍的に進歩した。その過程に参加し、その発展に少しでも貢献できたことを幸せに思っている。

かい・やすし

プロフィール

略歴：昭和42年大阪大学工学部応用化学科を卒業、昭和44年同大学院工学研究科応用化学専攻修士課程修了、昭和45年同博士課程退学、同年大阪大学工学部助手に採用。昭和48年工学博士（大阪大学）の学位を取得。昭和60年同助教授を経て、平成5年同教授に昇任し、物理化学講座を担当。平成7年の大学院重点化に伴い、応用物理化学講座を担当。平成10年4月同大学大学院工学研究科教授に配置換えとなり、平成17年から物質機能化学講座を担当した。

専門はX線結晶構造解析を手法とする構造化学および構造生物学。学内では環境安全研究管理センター長、大学教育実践センター実践部長、工学研究科評価室長などを務め、学外では日本学術会議特任連携会員・IUCr分科会委員、日本結晶学会評議員・庶務幹事、第21回国際結晶学連合会議組織委員会事務局長などを歴任した。

ナノ材料科学に生きて

大学院工学研究科教授 山本 雅彦

1960年代後半に、個々の原子を観察できるフィールドイオン顕微鏡（Field Ion Microscopy, FIM）を用いて、合金構造を観察することを始めたのが、私のナノ材料科学の始まりです。苦勞もあり時間もかかりましたが、1972年にFIM像の第1報を、1974年に「世界一美しい合金の像」と言われる像を発表することが出来ました。個々の原子を同定できるアトムプローブ（Atom Probe, AP）と組み合わせ、合金構造の諸問題を原子スケールの結像・分析により解明することが出来ました。また、FIM像の解析手法、APの最適実験条件の確立にも貢献しました。



続いて、薄膜、積層膜、人工格子などの高機能性・新機能性を有する材料の基礎物性からデバイスに向けた研究に歩を進め、(a) 高度な結晶成長技術の確立、(b) 自然界にない結晶構造をもつ非平衡結晶薄膜の創製、(c) 垂直磁気異方性金属超格子や高反射率X線分光素子の開発、(d) 超高密度磁性メモリの開発、(e) 超薄膜を利用したナノ磁性体の創製、構造と磁性との相関の解明、(f) ナノ磁性体の局所磁化状態観測手法の開発、などの優れた成果を挙げました。さらに、(g) ナノ磁性体のスピンのみによる磁性理論演算素子の開発に成功して、新しい時代を切り拓くスピコンピューターの概念設計を明示しました。「人生にロマンを、日々継続を、達成に執念を」という私の言葉を、改めて皆様にお贈りするとともに、自分自身へのメッセージともしたいと思います。どうぞ、志高く、スケール大きく生きて下さい。

やまもと・まさひこ

プロフィール

略歴：昭和41年3月大阪大学工学部冶金学科を卒業、昭和43年3月同大学院工学研究科冶金学専攻修士課程を修了、同年4月同工学部助手、昭和53年2月大阪大学より工学博士を授与、昭和62年11月同助教授を経て、平成元年9月同教授に昇任し、大学重点化に伴い平成10年4月同大学大学院工学研究科教授に配置換え、現在に至る。この間、各種の学内委員、工学部・工学研究科内委員歴任、学外では、米国コーネル大学客員助教授、国際フィールドエミッション学会副会長、内閣府・学術会議連携会員（第1次）、文部省・文部科学省学術審議会分科細目検討委員会委員、同学術審議会専門委員、日本学術振興会科学研究費委員会専門委員、などを務めた。平成15年3月日本金属学会増量賞、など。専門は、材料物性学、表面物性学、薄膜工学。

多国籍化したカトリック教会の「共生」をめぐって

21世紀COE研究プロジェクトから

大学院言語文化研究科教授 津田 葵

1990年の「出入国管理および難民認定法」の改正によって、日本はさまざまな国籍を保持する人々が居住する社会となりつつある。その改正案によると、日系人は日本国籍を持つ1世だけでなく、2世、3世やその配偶者まで在留資格が得られるようになり、そういった人々が入国することによって日本社会は多国籍化の道を歩んでいる。彼らの多くはブラジル、フィリピン、ペルー、中国、韓国・朝鮮といった国籍で、上位3カ国はカトリック国ということもあり、教会とのかかわりが深い。

こういった多国籍化現象にあるカトリック教会がこの現実をどのように受けとめ、どのような活動を通して「共生」を生きようとしているのか、その課題は何かといったことを論じた。まず、通時的側面から第二バチカン公会議を出発点とし、教皇ベネディクト16世の全世界の教会にあてた文書を概説し、日本カトリック難民移住移動者委員会からのメッセージ、日本の教会の基本方針と優先課題等を考察・分析した。次に、教会の司牧者、外国人・日本人信徒らの生の声をもとに、共時的次元から「共生」に至る諸概念を抽出し、それに向けての実践活動、将来への展望を述べて結語とした。



つだ・あおい

プロフィール

略歴：昭和41年3月ノートルダム清心女子大学文学部英文学科卒業、昭和48年3月上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻（修士課程）修了、同年4月ノートルダム清心女子大学文学部英文学科助手、昭和50年4月同講師、昭和51年アメリカ合衆国ワシントンDCトリニティ大学言語学科日本語学講師、昭和55年12月ジョージタウン大学大学院言語学科博士課程修了、昭和56年4月ノートルダム清心女子大学文学部英語英文学科助教授、昭和61年4月同教授、平成3年4月大阪大学言語文化学部教授、平成7年4月大阪大学大学院言語文化研究科教授に配置換となる。日米のビジネス・コミュニケーション、宗教における言語、小笠原諸島における言語変容、帰国子女の言語行動などを研究。大阪大学COEプログラム「インターフェイスの人文学：言語の接触と混交」言語文化研究科班のメンバー。入学試験委員会など委員会委員を歴任。

「学生達の声を教育改革に」

- 学生と副学長・学生生活委員会との懇談会 -

学生生活委員会

平成19年1月から2月にかけて豊中キャンパスと吹田キャンパスにおいて、教育・情報室の新たな試みとして、各部局から推薦された学生代表と教育担当の鷲田清一副学長、大和谷 厚学生生活委員会委員長等との懇談会を開催しました。

懇談の内容は、授業内容からキャンパスの利用、学生生活の支援まで多岐にわたる議論をし、事後のアンケートでは、ほとんどの学生が次回の懇談会にもぜひ参加したいという意見も多く、大変意義のあるものでした。

豊中キャンパス

実施日 平成19年1月24日(水)
場所 中庭会議室
参加者 12名

吹田キャンパス

実施日 平成19年2月5日(月)
場所 福利施設2階大会議室
参加者 13名



【参加者の学部別内訳】

文	人	法	医	歯	工	基
4名	4名	4名	4名	2名	4名	3名

学生の皆さんの主な意見

懇談に参加してみて、どうでしたか。

- ・懇談会の場の持ち方を変えられないか？このような持ち方では結局陳列型の話し合いしかできないように思う。
- ・改めて考える機会を与えられたように思う。
- ・大学側がどういう風に動いているのかを知ることができた。普段の生活では大学側の動きが見えにくい。
- ・学校側の意見や行っていること、目指している形が少しわかりました。
- ・皆さん自己紹介の際にも自分の意見をしっかりおっしゃっていて、先生方との「対談」になっていてとても為になりました。阪大に対して皆さんいろいろ考えているんだと感動しました。
- ・先生方が学生に歩み寄りようとしている態度がはっきりと伝わってきてとても嬉しかったし、今後の阪大に希望が持てた。今までより少し阪大が好きになった。

懇談で何が聞きたかったですか。(話したかったですか。)

- ・現状でも一般教養では学生が多すぎることがあるのに、外大の学生も含めてはどうか。
- ・具体的に、私たちが実感できる変化としては何が起こるのですか。
- ・大学側の方針、大学が何を目標しているのか(教育面で)。
- ・授業以外の活動、留学生との交流や、専門科目以外のセミナーや活動充実について。大学の活性化について。

聞いてみて（話してみても）何かわかりましたか。（得られましたか。）

- ・大学の考え方や学生側の考え方が大きく異なるが、その間を埋めようとするしない。
- ・学生側に依存の体質が濃い。
- ・独立行政法人になって何が変わったか気づいていなかったもので、お話していただけて現状を把握できた。
- ・大学側が「生徒の声を聞きたい」と積極的に考えてくれていることがひしひしと伝わってきて嬉しかったです。
- ・生徒も先生とは授業でしか接する機会がなく、先生と生徒達の情報が交流しないので、もっといろんな先生と交流できたらと思いました。

懇談中、聞きたかったけど（話したかったけど）聞けなかったこと。（話せなかったこと。）

- ・学内に駐車が目立ち、その陰から出てくる自転車とぶつかりそうになること。屋根つきの駐輪場が欲しいこと。
- ・大学の学問的業績などを学生以外にも広く社会に知らせて欲しい。大学への誇りなどにもつながると思う。例えば、有名な先生方の特別講義などをネット上で配信するなど（東大・京大はやっている）。
- ・私学にあるような行動力がほしいです。金銭面の問題ではなく、何か特別なことに挑戦する気にさせるような。
- ・外大との統合についてもっと聞いてみたかったです。

これからの大学（特に学生支援）に期待するものは何ですか。

- ・授業料奨学金制度の充実。
- ・大学生活が心から楽しめる大学づくり。
- ・学部の垣根を越えた話し合いの場。
- ・理系ばかりでなく文系にもお金を注いでください。
- ・この前初めて吹田キャンパスに行って、建物・食堂の美しさに驚きをかくせませんでした。
- ・せっかくたくさん優秀な先輩方がいらっしゃるのでも、実際の生の声を聞きたいです。
- ・学生のニーズに対する柔軟な対応と大学としての確固たるスタンス。
- ・オープンで自由な活動を触発する雰囲気。ベンチャーをおこすなど。



懇談以外に何か開催してほしい行事はありますか。

- ・今度一度「银杏だより」を読んでみようと思います。楽しみにしています。
- ・行事というより学生が気軽に意見を伝えられる意見箱などあればと思います。
- ・こういった懇談会を各学部単位でも開催していただけたら嬉しいです。
- ・吹田での大きな学祭。
- ・今回のような他学部の方の話しを聞ける機会を増やして欲しいです。



大学が様々な教育改革を試みている一方で、学生にはそれら新たな教育事業が思うほど知られていないということには強い反省を強いられました。また、学生（とくに医歯薬系・工学系の学生）が、自己の知見を拡げるために、他学部の授業の履修や他学部学生とのより活発な交流を強く希望していることを知ることができました。これらを今後の教育改革や学生生活の改善方策に活かしていきたいと考えています。

また、今回の懇談会の様子は、後日ホームページにも掲載する予定ですのでご覧ください。

学生生活委員会委員長 大和谷 厚

平成 18 年度大阪大学教育・研究功績賞

国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞は、国立大学法人大阪大学に勤務する教員のうち、教育・研究上の功績が特に顕著であると認められた者に対して、授与し、これを顕彰することにより、本学における教育・研究の一層の発展を期することを目的として行われています。平成 18 年度は、以下の方が受賞されました。

(総務部人事課)

所属名	職名	氏名	該当受賞項目	所属名	職名	氏名	該当受賞項目
文学研究科	教授	金水 敏	1	基礎工学研究科	教授	佐藤 宏介	1・10
文学研究科	教授	福永 伸哉	1	基礎工学研究科	教授	杉本 信正	1
人間科学研究科	教授	山本 隆	1	基礎工学研究科	教授	辻本 良信	1
経済学研究科	助教授	鳩澤 歩	1	基礎工学研究科	助教授	坂本 亘	1
理学研究科	教授	原田 明	1	基礎工学研究科	助手	木田 勝之	1
理学研究科	教授	松田 准一	10	言語文化研究科	助教授	山本 佳樹	1
医学系研究科	教授	澤 芳樹	1	生命機能研究科	教授	平野 俊夫	1
医学系研究科	教授	永井 利三郎	7	情報科学研究科	教授	尾上 孝雄	1
歯学研究科	教授	阪井 丘芳	2	情報科学研究科	教授	薦田 憲久	1
歯学部附属病院	講師	池邊 一典	4	微生物病研究所	教授	審良 静男	1
歯学部附属病院	講師	竹重 文雄	10	産業科学研究所	教授	笹井 宏明	1・3・10
薬学研究科	助教授	藤尾 慈	3・5	産業科学研究所	教授	溝口 理一郎	1
工学研究科	教授	明石 満	3	蛋白質研究所	助教授	鈴木 守	8
工学研究科	教授	碓井 建夫	1	社会経済研究所	教授	大竹 文雄	1
工学研究科	教授	高谷 裕浩	1	接合科学研究所	教授	近藤 勝義	1・5
工学研究科	教授	林 高史	1	超高压電子顕微鏡センター	助手	荒河 一渡	4
工学研究科	教授	馬場口 登	1・4	留学生センター	助教授	難波 康治	10
工学研究科	助教授	井上 豪	7	極限量子科学研究センター	助手	木村 尚次郎	3
工学研究科	助教授	大畑 充	1	太陽エネルギー化学研究センター	助教授	池田 茂	3・4・5
工学研究科	助教授	下田 吉之	1	総合学術博物館	助教授	上田 貴洋	3・10
工学研究科	助教授	平本 昌宏	1	先端科学イノベーションセンター	教授	高橋 康夫	8
工学研究科	助教授	森 勇介	1	コミュニケーションデザインセンター	教授	平田 オリザ	1
工学研究科	助教授	安田 誠	1・8	核物理研究センター	助教授	保坂 淳	3
工学研究科	助手	井藤 幹夫	3	サイバーメディアセンター	教授	小田中 紳二	1
工学研究科	助手	川口 寿裕	1・4	レーザーエネルギー学研究センター	教授	西村 博明	3

<受賞項目>

1. 教育・研究上の業績が認められ、特に権威のある学術上の表彰を受けた場合。
2. 教育・研究及びその成果が、社会に対し特に多大な貢献をしたとの評価を得た場合。
3. 専門誌等における掲載論文の評価が特に高いとされた場合。
4. 学術に関する会議等での発表が特に高い評価を受けた場合。
5. 職務発明が特に高い評価を受けた場合。
6. 評価の特に高い発見をした場合。
7. 教育・研究プロジェクト等においてその貢献が特に顕著であると評価された場合。
8. 教育・研究に関する事項を審議する委員会等においてその貢献が特に顕著であると評価された場合。
9. 危険な環境の下で困難な教育・研究業務を遂行した場合。
10. その他、教育・研究活動の貢献が特に顕著であると評価された場合

所属名、職名は平成 19 年 1 月現在

菅 滋正教授「第26回島津賞」受賞

大学院基礎工学研究科の菅 滋正教授が、島津科学技術振興財団から「第26回島津賞」を受賞されました。この賞は科学計測の分野で近年著しい成果を上げた研究者1名に授与される賞です。

今回対象となったのは「高精度高分解能放射光分光法の開発と応用」に関する研究で、SPring-8放射光を用いた未踏の分解能でのバルク敏感光電子分光や同じく角度分解光電子分光や3次元フェルミオロジーなどの世界的な先駆的研究が評価されました。さらに硬X線でのバルク光電子分光でも科学フロンティアを切り拓いておられます。ビームラインから各種の実験計測システムまでを独自のノウハウで設計、製作、調整し、それを用いての研究で世界の放射光分光研究分野をリードし続けられています。98%以上の高い円偏光度を持つこの光学系での内殻吸収磁気円偏光2色性を利用した光電子顕微鏡によるミクロ・ナノ磁性体の研究でも我が国の指導的役割を果たしてこられました。

授賞式は2月22日(木)京都ホテルオークラで行われ、引き続き受賞記念講演と懇親会が開かれました。

(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)



山口 兆教授「ICCMSE Award2006」及び「日本化学会賞」受賞

化学反応の途中の電子状態や特異な化学・物理的な性質をもつ分子の電子状態では、電子の相関と電子スピンの相関が重要な役割を果たしています。山口教授は、スピン相関・電子相関が強く、またその両者が相互作用している多電子系の量子化学理論(一般にBroken-Symmetry法といわれる方法を基にしたGeneral Spin Orbital-Hartree-Fock(GSO HF)及びスピン射影HF法等)を長年研究されてきました。そして、この理論に基づく化学結合次数などの解析法を提案すると共に化学反応の分類・解析に展開し、このような研究分野に適した第一原理計算手法も同時に開発されてきました。そしてその成果を基盤として、1990年代から次々と合成あるいは発見された種々の分子、分子集合体および分子固体の特異な電氣的・磁氣的・光学的物性(有機磁性体、分子磁性金属、分子超伝導体など)の解析・解明及び物性予測に適用し、多くの実験化学者との共同研究を展開してこられました。そして量子化学的な視点から、「物性量子化学」という新しい学問領域を提唱され、その創成に寄与されました。以上の功績は、国内はもとより国外からも高く評価されており、2006年10月にギリシアのクレタ島で開催された科学と工学における計算手法に関する国際会議(International Conference of Computational Methods in Sciences and Engineering:ICCMSEと略)において、ICCMSE Award 2006を受賞され、さらに2007年3月には日本化学会賞も受賞されました。



日本化学会賞授賞式にて(中央が山口教授)

(大学院理学研究科・理学部)

審良静男教授「上原賞」受賞および ミュンヘン工科大学から名誉医学博士の称号授与

微生物病研究所の審良静男教授が、3月9日(金)に「上原賞」を受賞し、大正製薬本社2号館「上原記念ホール」で授賞式および記念講演会が開催されました。

上原賞は、上原記念生命科学財団が「生命科学に関する分野の研究で顕著な功績をあげ、活躍中の研究者」を顕彰するもので、平成18年度の受賞者に審良教授が選ばれました。

受賞対象となった研究業績は、「自然免疫による病原体認識機構の解明」です。

また、3月18日(土)には、ドイツのミュンヘン工科大学から名誉医学博士の称号を授与されました。

授与対象は、Toll-like receptor のシグナル伝達における顕著な業績に対してで、同日、ミュンヘン郊外 Kloster Seeon において授与式が行われました。



名誉医学博士の授与式にて(左から3人目)

(微生物病研究所)

馬場明道理事・副学長「日本薬学会賞」受賞

本学理事・副学長、馬場明道教授(薬学研究科)が「分子薬理的アプローチによる新規創薬標的分子の機能解析」の研究業績により、平成19年度日本薬学会賞を受賞しました。3月27日(火)富山国際会議場で開催された日本薬学会年会において、授賞式と受賞講演が行われました。昭和23年に創設された日本薬学会賞は社団法人日本薬学会の最も権威のある学術賞で、薬学において特に優れた学術上の研究成果を上げた者に対して贈呈されます。

馬場教授の受賞は、教授就任以来の研究室のメインテーマである、新規創薬標的分子の機能評価のうち、特に世界で初めてのNa-Ca-交換系の特異的阻害剤の開発と応用、遺伝子改変手法を用いた脳領域での神経ペプチドPACAPの多様な機能の解明の代表的成果が高く評価されたものです。



(大学院薬学研究科・薬学部)

新部局長紹介

鷲田 清一 (わした きよかず)

附属図書館長



【略歴】

- 昭47. 3 京都大学文学部倫理学科卒業
- 49. 3 京都大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程修了
- 52. 3 京都大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程修了
- 53. 4 関西大学文学部哲学科専任講師
- 56. 4 関西大学文学部哲学科助教授
- 63. 4 関西大学文学部哲学科教授
- 平 4. 4 大阪大学助教授文学部
- 8. 4 大阪大学教授文学部
- 11. 4 大阪大学教授大学院文学研究科
- 15. 8 大阪大学大学院文学研究科長・文学部長(平16.3まで)
- 16. 4 大阪大学理事・副学長
- 19. 4 大阪大学附属図書館長(平19.8まで)

米田 俊之 (よねだ としゆき)

大学院歯学研究科長・歯学部長



【略歴】

- 昭47. 3 大阪大学歯学部卒業
- 51. 3 大阪大学大学院歯学研究科博士課程修了
- 51. 4 西宮市立中央病院医師
- 54. 9 アメリカ合衆国国立保健研究所・歯科研究所客員助教授
- 55.10 大阪大学助手歯学部
- 63. 2 大阪大学講師歯学部附属病院
- 平 2.10 テキサス州立大学医学部内分泌代謝部門準教授
- 4. 3 東京医科歯科大学教授難治疾患研究所
- 5.12 テキサス州立大学医学部内分泌代謝部門助教授
- 7. 4 テキサス州立大学医学部内分泌代謝部門教授
- 9. 4 大阪大学教授歯学部
- 12. 4 大阪大学教授大学院歯学研究科
- 15. 4 大阪大学評議員(平17.3まで)
- 19. 4 大阪大学大学院歯学研究科長(平21.3まで)

床谷 文雄 (とこたに ふみお)

大学院国際公共政策研究科長



【略歴】

- 昭52. 3 大阪大学法学部法学科卒業
- 54. 3 大阪大学大学院法学研究科修士課程修了
- 57. 3 大阪大学大学院法学研究科博士課程単位修得退学
- 57. 4 神戸女学院大学文学部研究助手
- 58. 4 神戸女学院大学文学部専任講師
- 61. 4 神戸女学院大学文学部助教授
- 63. 4 大阪大学助教授教養部
- 平 6. 4 大阪大学助教授法学部
- 6. 6 大阪大学助教授大学院国際公共政策研究科
- 10. 7 大阪大学教授大学院国際公共政策研究科
- 16. 4 大阪大学教育研究評議員
- 19. 4 大阪大学大学院国際公共政策研究科長(平21.3まで)

新部長紹介

大竹 文雄 (おおたけ ふみお)

社会経済研究所長



【略歴】

- 昭58. 3 京都大学経済学部経済学科卒業
- 60. 3 大阪大学大学院経済学研究科博士前期課程修了
- 60. 6 大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程退学
- 60. 7 大阪大学助手経済学部
- 63. 4 大阪府立大学経済学部講師
- 平 2. 4 大阪大学助教授社会経済研究所
- 13. 5 大阪大学教授社会経済研究所
- 16. 4 大阪大学教授社会経済研究所附属行動経済学研究センター
- 17. 4 大阪大学社会経済研究所副所長(平19.3まで)
- 19. 4 大阪大学社会経済研究所長(平21.3まで)

林 紀夫 (はやし のりお)

医学部附属病院長



【略歴】

- 昭47. 3 大阪大学医学部卒業
- 48. 8 労働福祉事業団関西労災病院医師(昭49.6まで)
- 50. 4 大阪大学医学部附属病院医員
- 54. 9 米国テキサス大学医学部生化学教室研究員(昭56.2まで)
- 56. 5 大阪大学助手医学部
- 56.12 医学博士(大阪大学)
- 60. 8 文部省学術国際局学術調査官
- 61. 4 大阪大学助手医学部
- 62. 8 大阪大学講師医学部
- 平 9. 4 大阪大学助教授医学部
- 10. 9 大阪大学教授医学部
- 11. 4 大阪大学教授大学院医学系研究科
- 19. 4 大阪大学医学部附属病院長(平22.3まで)

森田 清三 (もりた せいぞう)

低温センター長



【略歴】

- 昭45. 3 大阪大学理学部物理学科卒業
- 47. 3 大阪大学大学院理学研究科物理学専攻修士課程修了
- 50. 3 大阪大学大学院理学研究科物理学専攻博士課程修了
- 50. 3 理学博士(大阪大学)
- 50. 4 東北大学助手電気通信研究所
- 62.11 東北大学助教授電気通信研究所
- 63. 4 岩手大学教授工学部
- 平元.12 広島大学教授理学部
- 7. 3 広島大学教授理学部附属微晶研究施設
- 7. 4 広島大学理学部附属微晶研究施設長(平8.3まで)
- 8. 4 大阪大学教授工学部
- 10. 4 大阪大学教授大学院工学研究科
- 10. 4 大阪大学大学院工学研究科電子工学専攻長(平11.3まで)
- 10. 4 大阪大学工学部電子情報エネルギー工学科長(平11.3まで)
- 15. 4 大阪大学大学院工学研究科電子工学専攻長(平16.3まで)
- 15. 4 大阪大学工学部電子情報エネルギー工学科長(平18.3まで)
- 16. 4 大阪大学大学院工学研究科電気電子情報工学専攻長(平18.3まで)
- 18. 4 大阪大学工学部電子情報工学科長(平19.3まで)
- 19. 4 大阪大学低温センター長(平21.3まで)

新部長紹介

茶 谷 直 人 (ちゃたに なおと)

環境安全研究管理センター長



【略歴】

- 昭54. 3 大阪大学工学部石油化学科卒業
- 56. 3 大阪大学大学院工学研究科石油化学専攻博士前期課程修了
- 59. 3 大阪大学大学院工学研究科石油化学専攻博士後期課程修了
- 59. 3 工学博士(大阪大学)
- 59. 4 大阪大学助手産業科学研究所
- 平成. 9 大阪大学助手工学部
- 4. 8 大阪大学助教授工学部
- 10. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 15. 4 大阪大学教授大学院工学研究科
- 19. 4 大阪大学環境安全研究管理センター長(平21.3まで)

原 島 俊 (はらしま さとし)

生物工学国際交流センター長



【略歴】

- 昭47. 3 大阪大学工学部醗酵工学科卒業
- 49. 3 大阪大学大学院工学研究科醗酵工学専攻(修士課程)修了
- 52. 3 大阪大学大学院工学研究科醗酵工学専攻(後期課程)修了
- 52. 3 工学博士(大阪大学)
- 52. 4 日本学術振興会奨励研究員
- 53. 4 大阪大学工学部研究生
- 53. 6 大阪大学工学部助手
- 59.10 Visiting Associate, National Institutes of Health(NIH), USA(昭61.9まで)
- 63.11 大阪大学工学部助教授
- 平成. 9. 2 大阪大学工学部教授
- 10. 4 大阪大学大学院工学研究科教授
- 11. 4 大阪大学工学部応用生物工学科長(平12.3まで)
- 19. 4 大阪大学生物工学国際交流センター長(平21.3まで)

馬 場 章 夫 (ばば あきお)

先端科学イノベーションセンター長



【略歴】

- 昭46. 3 大阪大学工学部応用化学科卒業
- 48. 3 大阪大学大学院工学研究科修士課程修了
- 51. 3 大阪大学大学院工学研究科博士課程修了
- 51. 4 三菱化成工業㈱勤務
- 56. 8 大阪大学助手工学部
- 62. 6 大阪大学助教授工学部
- 平成. 7. 1 大阪大学教授大学院工学研究科
- 16. 4 大阪大学教育・研究評議員(～平18.3まで)
- 17. 4 大阪大学先端科学イノベーションセンター副センター長
- 17. 4 大阪大学知財本部副本部長
- 19. 4 大阪大学先端科学イノベーションセンター長(平21.3まで)

新部長紹介

金 水 敏 (きんすい さとし)

コミュニケーションデザイン・センター長



【略歴】

- 昭54. 3 東京大学文学部第3類(語学文学)卒業
- 56. 3 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
- 57. 3 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学
- 57. 4 東京大学助手文学部
- 58. 4 神戸大学講師教養部
- 62. 4 大阪女子大学助教授
- 平 2. 4 神戸大学助教授文学部
- 10. 4 大阪大学助教授文学部
- 11. 4 大阪大学助教授大学院文学研究科
- 13. 4 大阪大学教授大学院文学研究科
- 16. 4 大阪大学教育・情報室員(平20.3まで)
- 19. 4 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター長(平21.3まで)

笠 井 俊 夫 (かさい としお)

科学教育機器リノベーションセンター長



【略歴】

- 昭46. 3 大阪大学理学部化学科卒業
- 48. 3 大阪大学大学院理学研究科修士課程修了
- 53. 4 日本学術振興会奨励研究員
- 54. 9 大阪大学大学院理学研究科博士課程修了
- 54. 9 理学博士(大阪大学)
- 54. 9 米国ワシントン大学リサーチ・アソシエイト
- 55.10 米国ライス大学リサーチ・アソシエイト
- 57. 4 大阪大学助手理学部
- 63. 5 大阪大学講師理学部
- 平 7. 4 大阪大学教授理学部
- 8. 4 大阪大学教授大学院理学研究科
- 15. 4 大阪大学大学院理学研究科附属分子熱力学研究センター長(平16.3まで)
- 17. 4 大阪大学工作センター長(平19.3まで)
- 19. 4 大阪大学科学教育機器リノベーションセンター長(平21.3まで)

小 泉 潤 二 (こいずみ じゅんじ)

グローバルコラボレーションセンター長



【略歴】

- 昭48. 3 東京大学教養学部教養学科卒業
- 50. 3 東京大学大学院社会学研究科修士課程修了
- 55. 3 東京大学大学院社会学研究科博士課程中退
- 56. 6 スタンフォード大学大学院修了
- 56. 7 人類学博士(Ph.D., Anthropology, Stanford University)
- 56. 7 アルバート大学キラム記念博士研究員兼非常勤講師(昭57.5まで)
- 57. 6 愛知県立大学講師文学部
- 60.10 愛知県立大学助教授文学部
- 62. 4 新潟大学助教授人文学部
- 平 2. 4 大阪大学助教授人間科学部
- 8. 4 大阪大学教授人間科学部
- 8. 9 プリンストン高等研究所ハンズマン研究員(平9.8まで)
- 12. 4 大阪大学教授大学院人間科学研究科
- 16. 5 大阪大学大学院人間科学研究科長・人間科学部長(平18.4まで)
- 17. 4 大阪大学研究推進室員、国際交流推進本部員
- 18. 4 大阪大学総長補佐
- 19. 4 大阪大学グローバルコラボレーションセンター(GLOCOL)センター長(平21.3まで)

新部局長紹介

岸本 忠史 (きしもと ただふみ)

核物理研究センター長



【略歴】

- 昭50. 3 大阪大学理学部物理学科卒業
- 52. 3 大阪大学大学院理学研究科物理学専攻修士課程修了
- 55. 3 大阪大学大学院理学研究科物理学専攻博士課程単位取得退学
- 55. 4 東京工業大学助手理学部
- 55. 9 理学博士(大阪大学)
- 59. 2 ヒューストン大学物理教室博士研究員
- 62.10 大阪大学講師理学部
- 64.11 大阪大学助教授理学部
- 平 7. 6 大阪大学教授理学部
- 8. 4 大阪大学教授大学院理学研究科
- 12. 6 大阪大学理学部附属原子核実験施設長(平16.5まで)
- 16. 4 大阪大学ラジオアイソトープ総合センター長(平18.3まで)
- 19. 4 大阪大学核物理研究センター長(平21.3まで)

新施設長紹介

祖父江 憲治 (そぶえ けんじ)

医学系研究科附属共同研究実習センター長



【略歴】

- 昭48. 3 岩手医科大学医学部卒業
- 52. 3 大阪大学大学院医学研究科修了
- 52. 5 大阪大学助手医学部附属高次神経研究施設
- 56. 8 大阪大学助教授医学部附属高次神経研究施設
- 63. 2 大阪大学教授医学部附属高次神経研究施設
- 63. 4 大阪大学教授医学部附属バイオメディカル教育研究センター
- 平 5.10 大阪大学医学部附属バイオメディカル教育研究センター長(平7.10まで)
- 6. 4 大阪大学評議員(平7.10まで)
- 11. 4 大阪大学教授大学院医学系研究科附属バイオメディカル教育研究センター
- 13. 4 大阪大学教授大学院医学系研究科
- 19. 4 大阪大学大学院医学系研究科附属共同研究実習センター長(平21.3まで)

中嶋 英雄 (なかじま ひでお)

産業科学研究所附属新産業創造物質基盤技術研究センター長



【略歴】

- 昭46. 3 東北大学工学部金属材料工学科卒業
- 48. 3 東北大学大学院工学研究科金属材料工学専攻修士課程修了
- 52. 9 東北大学大学院工学研究科金属材料工学専攻博士課程修了
- 52.11 米国レンスレア工科大学理学部物理学科博士研究員
- 55. 7 東北大学助手金属材料研究所
- 平元. 3 東北大学助教授金属材料研究所
- 4. 4 岩手大学教授工学部
- 8.10 大阪大学教授産業科学研究所
- 19. 4 大阪大学産業科学研究所附属新産業創造物質基盤技術研究センター長(平21.3まで)

新施設長紹介

内藤 牧男 (ないとう まきお)

接合科学研究所附属スマートプロセス研究センター長



【略歴】

- 昭55. 3 名古屋大学工学部化学工学科卒業
- 57. 3 名古屋大学大学院工学研究科修士課程修了
- 57. 4 (株)細川粉体工学研究所研究員
- 59. 4 名古屋大学大学院工学研究科博士課程在職ドクター(昭62.3修了)
- 62. 4 ホンカミクロン(株)研究開発本部粉体工学研究所主任研究員
- 平 5. 3 ホンカミクロン(株)つくば粉体技術開発センター副所長
- 5. 8 (財)ファインセテックスセンター試験研究所主任研究員
- 6. 4 (財)ファインセテックスセンター試験研究所室長代理
- 9. 7 (財)ファインセテックスセンター試験研究所室長
- 12. 4 (財)ファインセテックスセンター試験研究所副所長
- 14. 4 (財)ファインセテックスセンター試験研究所主幹研究員
- 14. 6 大阪大学寄附研究部門教授接合科学研究所
- 17. 4 大阪大学教授接合科学研究所
- 19. 4 大阪大学接合科学研究所附属スマートプロセス研究センター長(平21.3まで)

新教授紹介

内田 次信 (うちだ つぐのぶ)

大学院文学研究科



【略歴】

- 昭49. 3 京都大学文学部卒業
- 51. 3 京都大学大学院文学研究科西洋古典語学・西洋古典文学専攻修士課程修了
- 54. 3 京都大学大学院文学研究科西洋古典語学・西洋古典文学専攻博士課程単位修得退学
- 54. 4 関西大学文学部非常勤講師(平3.3まで)
- 54. 4 京都女子大学文学部非常勤講師(昭57.3まで)
- 55. 4 光華女子短期大学家政学部非常勤講師(昭56.3まで)
- 56. 4 光華女子大学文学部専任講師
- 61. 4 光華女子大学文学部助教授
- 平 6. 4 光華女子大学文学部教授
- 14. 4 大阪学院大学国際学部教授
- 15.11 博士(文学)の学位授与(京都大学)
- 18. 4 大阪大学助教授大学院文学研究科
- 19. 4 大阪大学教授大学院文学研究科

所 属：大学院文学研究科文化表現論専攻芸術学講座
 専門分野：西洋古典文学

志村 剛 (しむら つよし)

大学院人間科学研究科



【略歴】

- 昭51. 3 大阪大学人間科学部卒業
- 53. 3 大阪大学大学院人間科学研究科修士課程修了
- 55.11 大阪大学大学院人間科学研究科博士・後期課程退学
- 55.11 大阪大学助手人間科学部
- 平 3. 2 学術博士(大阪大学)
- 7. 5 大阪大学講師人間科学部
- 12. 4 大阪大学助教授大学院人間科学研究科
- 19. 4 大阪大学教授大学院人間科学研究科

所 属：大学院人間科学研究科人間科学専攻行動生態学講座
 専門分野：行動神経科学

新教授紹介

三 道 弘 明 (さんどう ひろあき)

大学院経済学研究科



所 属：大学院経済学研究科経営学系専攻モデル解析講座
 専門分野：オペレーションズ・リサーチ、確率モデル論

【略歴】

- 昭53. 3 兵庫県立神戸商科大学商経学部管理科学科卒業
- 55. 3 神戸大学大学院工学研究科修士課程修了
- 58. 3 神戸大学大学院自然科学研究科博士後期課程修了
- 58. 4 金沢工業大学工学部助手
- 59. 4 金沢工業大学工学部専任講師
- 60. 4 神戸大学助手工学部
- 62.12 神戸大学助教授工学部
- 平成10 流通科学大学商学部助教授
- 4. 4 流通科学大学情報学部助教授
- 7. 4 流通科学大学情報学部教授
- 16. 4 神戸学院大学経営学部教授
- 19. 4 大阪大学教授大学院経済学研究科

友 部 謙 一 (ともべ けんいち)

大学院経済学研究科



所 属：大学院経済学研究科経済学専攻歴史分析講座
 専門分野：数量経済史(日本)、歴史人口学、農家経済論

【略歴】

- 昭59. 3 慶應義塾大学経済学部卒業
- 61. 3 慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程修了
- 平成3 慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程単位修得退学
- 元4 (株)早友学院専任講師
- 2. 4 徳山大学経済学部専任講師
- 5. 4 徳山大学経済学部助教授
- 9. 4 慶應義塾大学経済学部助教授
- 15. 4 慶應義塾大学経済学部教授
- 19. 4 大阪大学教授大学院経済学研究科

井 上 智 子 (いのうえ ともこ)

大学院医学系研究科



所 属：大学院医学系研究科保健学専攻統合保健看護科学分野総合ヘルスプロモーション科学講座
 専門分野：看護管理学

【略歴】

- 昭58. 3 聖路加看護大学看護学部看護学科卒業
- 58. 4 虎ノ門病院分院看護婦
- 61. 4 大阪大学助手医療技術短期大学部
- 平成6. 3 関西大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士前期課程修了
- 6. 4 大阪府立看護大学看護学部講師
- 10. 4 大阪府立看護大学看護学部助教授
- 11. 9 東北大学大学院医学系研究科社会医学専攻博士課程修了
- 13.11 大阪府立看護大学看護学部教授
- 17. 4 大阪府立大学看護学部教授
- 19. 4 大阪大学教授大学院医学系研究科

新教授紹介

梅 下 浩 司 (うめした こうじ)

大学院医学系研究科



所 属：大学院医学系研究科保健学専攻統合保健看護科学分野看護実践開発科学講座
専門分野：消化器外科学、臓器移植、手術医学

【略歴】

- 昭55. 3 大阪大学医学部医学科卒業
- 55. 7 大阪大学医学部附属病院医員
- 56. 7 箕面市立病院医師
- 59. 7 大阪大学医学部研究生
- 62. 7 英国ケンブリッジ大学アデンブルックス病院研究員
- 63. 1 那智勝浦町立温泉病院外科医長
- 平 2. 1 米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部研究員
- 3. 7 大阪大学医学部附属病院医員
- 4. 7 大阪拘置所医務部医療課医師
- 5. 1 大阪大学助手医学部
- 11. 4 大阪大学助手医学部附属病院
- 19. 4 大阪大学教授大学院医学系研究科

奥 村 明之進 (おくむら めいのしん)

大学院医学系研究科



所 属：大学院医学系研究科外科系臨床医学専攻外科学講座（呼吸器外科学）
専門分野：呼吸器外科学、肺癌・縦隔腫瘍の外科治療、肺移植

【略歴】

- 昭59. 3 大阪大学医学部医学科卒業
- 59. 7 大阪大学医学部附属病院医員
- 60. 7 東大阪市立中央病院医師
- 62. 7 大阪府立羽曳野病院技師
- 平 2. 8 大阪大学医学部研究生
- 4. 8 大阪大学医学部附属病院医員
- 5. 1 大阪大学助手医学部
- 11. 4 大阪大学助手大学院医学系研究科
- 14. 7 国立療養所近畿中央病院診療部第二呼吸器外科医長
- 16. 7 大阪大学講師大学院医学系研究科
- 17. 4 大阪大学助教授大学院医学系研究科
- 19. 4 大阪大学教授大学院医学系研究科

清 水 安 子 (しみず やすこ)

大学院医学系研究科



所 属：大学院医学系研究科保健学専攻統合保健看護科学分野看護実践開発科学講座
専門分野：慢性病看護、慢性疾患患者のセルフケア

【略歴】

- 平 2. 3 千葉大学看護学部卒業
- 2. 4 大阪府立成人病センター看護師
- 5. 4 大阪大学助手医療技術短期大学部
- 8. 3 千葉大学大学院看護学研究科博士前期課程修了
- 11. 3 千葉大学大学院看護学研究科博士後期課程修了
- 11. 4 千葉大学助手看護学部
- 15. 4 千葉大学講師看護学部
- 18. 9 カナダ国ニューブランズウィック大学看護学部
ポストドクトラルリサーチフェロー
- 19. 4 大阪大学教授大学院医学系研究科

新教授紹介

藤 堂 剛 (とうどう たけし)

大学院医学系研究科



【略歴】

- 昭57. 3 京都大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学
- 57. 4 日本学術振興奨励研究員（京都大学理学部）
- 58. 8 大阪大学助手医学部
- 平 7. 3 大阪大学講師医学部
- 7. 4 京都大学助教授放射線生物研究センター
- 12. 4 京都大学教授放射線生物研究センター
- 19. 4 大阪大学教授大学院医学系研究科

所 属：大学院医学系研究科予防環境医学専攻
遺伝医学講座（放射線基礎医学）
専門分野：放射線医学生物学、光生物学

生 越 専 介 (おごし せんすけ)

大学院工学研究科



【略歴】

- 昭63. 3 大阪大学工学部応用精密化学科卒業
- 平 2. 3 大阪大学大学院工学研究科応用精密化学専攻博士前期課程修了
- 5. 3 大阪大学大学院工学研究科応用精密化学専攻博士後期課程修了
- 5. 3 博士（工学）（大阪大学）
- 5. 4 大阪大学助手工学部
- 10. 4 大阪大学助手大学院工学研究科
- 11. 4 大阪大学講師大学院工学研究科
- 16. 3 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 19. 4 大阪大学教授大学院工学研究科

所 属：大学院工学研究科応用化学専攻分子創
成化学講座
専門分野：有機金属化学

民 谷 栄 一 (たみや えいいち)

大学院工学研究科



【略歴】

- 昭55. 3 大阪大学理学部化学科卒業
- 57. 3 東京工業大学大学院総合理工学研究科電子化学専攻博士課程修了
- 60. 3 東京工業大学大学院総合理工学研究科電子化学専攻博士課程修了
- 60. 3 工学博士（東京工業大学）
- 60. 4 東京工業大学助手資源化学研究所
- 62.12 東京工業大学講師資源化学研究所
- 63. 4 東京大学助教授先端科学技術研究センター
- 平 5. 4 北陸先端科学技術大学院大学教授材料科学研究科
- 18. 4 北陸先端科学技術大学院大学教授マテリアルサイエンス研究科
- 19. 4 大阪大学教授大学院工学研究科

所 属：大学院工学研究科精密科学・応用物理学専攻応用物理学講座
専門分野：バイオデバイス、ナノバイオテクノロジー

新教授紹介

平 田 勝 弘 (ひらた かつひろ)

大学院工学研究科



【略歴】

- 昭57. 3 大阪大学工学部機械工学科卒業
- 57. 4 松下電工株式会社研究員
- 平 5.12 松下電工株式会社主査技師解析技術研究所
- 7. 3 博士(工学)(同志社大学)
- 9. 4 大阪大学非常勤講師大学院工学研究科(平17.3まで)
- 11. 4 同志社大学客員教授大学院工学研究科(平17.3まで)
- 13.12 松下電工株式会社主幹研究員解析評価技術センター
- 17. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 19. 2 大阪大学教授大学院工学研究科

所 属：大学院工学研究科知能・機能創成工学
専攻先導の融合工学講座
専門分野：デバイス工学、応用電磁工学

福 崎 英一郎 (ふくさき えいいちろう)

大学院工学研究科



【略歴】

- 昭58. 3 大阪大学工学部醗酵工学科卒業
- 60. 3 大阪大学大学院工学研究科博士前期課程醗酵工学専攻修了
- 60. 4 日東電工株式会社生物化学研究所研究員
- 平 5. 2 博士(工学)(大阪大学)
- 5.10 日東電工株式会社基幹技術センター副主任研究員
- 7. 3 大阪大学助教授工学部
- 10. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 18. 6 独立行政法人科学技術振興機構研究開発戦略センター(JST/CRDS)特任フェロー
- 19. 4 大阪大学教授大学院工学研究科

所 属：大学院工学研究科生命先端工学専攻生
物工学講座
専門分野：代謝プロファイリング、代謝物総体解
析(メタボロミクス)

大 塚 敏 之 (おおつか としゆき)

大学院基礎工学研究科



【略歴】

- 平 2. 3 東京都立科学技術大学工学部航空宇宙システム工学科卒業
- 4. 3 東京都立科学技術大学大学院工学研究科力学系システム工学専攻修士課程修了
- 7. 3 東京都立科学技術大学大学院工学研究科工学システム専攻博士課程修了
- 7. 4 筑波大学講師構造工学系
- 11. 4 大阪大学講師大学院工学研究科
- 15. 3 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 19. 4 大阪大学教授大学院基礎工学研究科

所 属：大学院基礎工学研究科システム創成専
攻システム科学領域システム理論講座
専門分野：制御工学

新教授紹介

尾 方 成 信 (おがた しげのぶ)

大学院基礎工学研究科



【略歴】

- 平 3. 3 大阪大学工学部機械工学科卒業
- 5. 3 大阪大学大学院工学研究科機械工学専攻博士前期課程修了
- 7. 3 大阪大学大学院工学研究科機械工学専攻博士後期課程中退
- 7. 4 大阪大学助手工学部機械工学科
- 12.11 大阪大学講師大学院工学研究科機械システム工学専攻
- 15.10 大阪大学助教授大学院工学研究科機械システム工学専攻
- 17. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科附属原子分子イオン制御理工学センター
- 19. 4 大阪大学教授大学院基礎工学研究科

所 属：大学院基礎工学研究科機能創成専攻機能デザイン領域制御生産情報講座
 専門分野：固体力学、計算材料科学、計算力学

木 村 剛 (きむら つよし)

大学院基礎工学研究科



【略歴】

- 平 3. 3 東京大学工学部合成化学科卒業
- 5. 3 東京大学大学院工学系研究科超伝導工学専攻修士課程修了
- 8. 3 東京大学大学院工学系研究科超伝導工学専攻博士課程修了
- 8. 4 アトムテクノロジー研究体 博士研究員(平12.4まで)
- 12. 4 東京大学講師大学院工学系研究科物理工学専攻(平15.4まで)
- 15. 3 Los Alamos National Laboratory, Limited term staff member(平17.9月まで)
- 17. 9 Bell Laboratories, Lucent Technologies, Member of technical staff
- 19. 4 大阪大学教授大学院基礎工学研究科

所 属：大学院基礎工学研究科物質創成専攻物性物理工学領域ナノ量子物理講座
 専門分野：物質科学、固体物性実験

酒 井 朗 (さかい あきら)

大学院基礎工学研究科



【略歴】

- 昭59. 3 名古屋大学工学部金属学科卒業
- 61. 3 名古屋大学大学院工学研究科金属工学および鉄鋼工学専攻博士前期課程修了
- 61. 4 日本電気株式会社入社
- 平 3. 7 日本電気株式会社マイクロエレクトロニクス研究所主任
- 6. 7 日本電気株式会社基礎研究所主任
- 10. 7 日本電気株式会社基礎研究所主任研究員
- 11. 4 名古屋大学助教授大学院工学研究科
- 19. 4 大阪大学教授大学院基礎工学研究科

所 属：大学院基礎工学研究科システム創成専攻電子光科学領域固体電子工学講座
 専門分野：半導体デバイスおよびそれに関する薄膜成長と評価

新教授紹介

實 川 浩一郎 (じつかわ こういちろう) 大学院基礎工学研究科



所 属：大学院基礎工学研究科物質創成専攻化学工学領域反応化学工学講座
 専門分野：触媒化学・反応化学工学

【略歴】

- 昭51. 3 大阪大学基礎工学部化学工学科卒業
- 51. 4 大阪大学基礎工学部研究生(昭53.3まで)
- 55. 3 大阪大学大学院基礎工学研究科化学系専攻博士前期課程修了
- 58. 3 大阪大学大学院基礎工学研究科化学系専攻博士後期課程修了
- 58. 4 日本学術振興会奨励研究員(昭58.11まで)
- 58.11 大塚製薬(株)琵琶湖研究所研究員
- 平 3. 2 名古屋工業大学助手工学部
- 8.12 名古屋工業大学助教授工学部
- 15. 4 名古屋工業大学助教授大学院工学研究科
- 16. 4 名古屋工業大学教授大学院工学研究科
- 19. 4 大阪大学教授大学院基礎工学研究科

永 妻 忠 夫 (ながつま ただお) 大学院基礎工学研究科



所 属：大学院基礎工学研究科システム創成専攻電子光科学領域光エレクトロニクス講座
 専門分野：ミリ波・テラヘルツ波フォトニクス

【略歴】

- 昭56. 3 九州大学工学部電子工学科卒業
- 58. 3 九州大学大学院工学研究科電子工学専攻修士課程修了
- 61. 3 九州大学大学院工学研究科電子工学専攻博士課程修了
- 61. 4 日本電信電話株式会社厚木電気通信研究所入所
- 61.10 同上 集積回路研究部 研究主任
- 62. 7 LSI研究所集積デバイス研究部 研究主任
- 平 2. 2 同上 設計システム研究部 主任研究員
- 8. 7 システムエレクトロニクス研究所高機能LSI研究部主幹研究員
- 11. 2 通信エネルギー研究所低エネルギーエレクトロニクス研究部主幹研究員
- 11. 4 同上 特別研究員
- 14. 7 マイクロシステムインテグレーション研究所スマートデバイス研究部 特別研究員、新機能デバイス研究グループリーダー
- 15. 4 同上 主幹研究員 グループリーダー
- 17. 7 同上 光マイクロ波応用システム研究グループリーダー
- 19. 4 大阪大学教授大学院基礎工学研究科

由 本 陽 子 (ゆもと ようこ) 大学院言語文化研究科



所 属：言語文化研究科言語情報科学講座
 専門分野：理論言語学、語形成論、語彙意味論

【略歴】

- 昭55. 3 神戸女学院大学文学部英文学科卒業
- 55. 4 兵庫医科大学教室(医局)事務
- 58. 3 大阪大学大学院文学研究科前期課程修了修士号(文学)
- 61. 4 日本学術振興会特別研究員(昭62.5まで)
- 62. 3 大阪大学大学院文学研究科後期課程単位修得退学
- 62. 6 大阪大学助手言語文化部
- 63. 3 大阪大学講師言語文化部
- 平 3. 4 大阪大学助教授言語文化部
- 9. 8 文部省在外研究員(ロンドン大学)(平10.4まで)
- 16. 2 博士号(文学)大阪大学
- 17. 4 大阪大学助教授大学院言語文化研究科
- 19. 4 大阪大学教授大学院言語文化研究科

新教授紹介

前田 太郎 (まえだ たろう)

大学院情報科学研究科



【略歴】

- 昭62. 3 東京大学工学部計数工学科計測コース卒業
- 62. 4 通商産業省研究技官工業技術院機械技術研究所ロボット工学部バイオロボティクス課
- 平 4. 9 東京大学助手先端科学技術研究センター
- 6. 5 博士(工学)(東京大学)
- 6. 9 東京大学助手大学院工学系研究科
- 9. 7 東京大学講師大学院工学系研究科
- 12. 4 東京大学講師大学院情報学環
- 14.10 NTTコミュニケーション科学基礎研究所人間情報研究部主幹研究員
- 19. 2 大阪大学教授大学院情報科学研究科

所 属：大学院情報科学研究科バイオ情報工学
専攻人間情報工学講座
専門分野：感覚 - 運動インタフェース、バーチャルリアリティ、人間機能モデル

月田 早智子 (つきた さちこ)

大学院生命機能研究科



【略歴】

- 昭51. 3 東京大学薬学部製薬化学科卒業
- 53. 3 東京大学大学院薬学系研究科薬学専攻修士課程修了
- 58. 3 東京大学大学院医学系研究科第一基礎医学専攻博士課程修了
- 58. 3 博士(医学)(東京大学)
- 58. 4 日本学術振興会奨励研究員
- 61. 4 東京都臨床医学総合研究所研究員
- 平 2. 4 岡崎国立共同研究機構助手生理学研究所
- 6. 4 京都大学医療技術短期大学部教授
- 15.10 京都大学教授医学部
- 19. 4 大阪大学教授大学院生命機能研究科

所 属：大学院生命機能研究科個体機能学講座
専門分野：細胞生物学

安藤 陽一 (あんどう よういち)

産業科学研究所



【略歴】

- 昭62. 3 東京大学理学部物理学科卒業
- 平元. 3 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻修士課程修了
- 元. 4 (財)電力中央研究所入所
- 3. 4 (財)国際超電導産業技術研究センター超電導工学研究所研究員(平6.3まで)
- 6. 2 博士(理学)(東京大学)
- 6.10 AT&Tベル研究所客員研究員(平8.10まで)
- 9. 4 東京理科大学客員助教授大学院理学研究科(平17.3まで)
- 11. 6 (財)電力中央研究所上席研究員
- 16. 4 (財)電力中央研究所材料科学研究所領域リーダー(平17.3まで)
- 19. 4 大阪大学教授産業科学研究所

所 属：産業科学研究所 高次制御材料科学研究
部門フロンティア材料創製研究分野
専門分野：材料科学、物性物理学、応用化学

新教授紹介

三 木 裕 明 (みき ひろあき)

蛋白質研究所



【略歴】

- 平 5. 3 東京大学理学部生物化学科卒業
- 7. 3 東京大学大学院理学系研究科生物化学専攻修士課程修了
- 7. 4 日本学術振興会特別研究員(DC)(平10.3まで)
- 10. 3 東京大学大学院理学系研究科生物化学専攻博士課程修了
- 10. 3 博士(理学)(東京大学)
- 10. 4 東京大学助手医科学研究所
- 14. 2 東京大学助教授医科学研究所
- 19. 4 大阪大学教授蛋白質研究所

所 属：蛋白質研究所蛋白質高次機能学研究部
門細胞内シグナル伝達研究室
専門分野：細胞生物学

木川田 一 榮 (きかわだ かずえ)

大学教育実践センター



【略歴】

- 昭46. 3 早稲田大学第一法学部卒業
- 46. 4 富士ゼロックス株式会社入社
- 57. 9 米国モントレイ・インスティテュート国際経営学大学院(留学)
- 58. 6 米国ゼロックス社 オフィスシステム ディビジョン(パロアルト駐在)
- 平 3.10 富士ゼロックス株式会社 総合事業計画部
- 12.10 富士ゼロックス株式会社 KDI(ナレッジ・ダイナミクス・イニシアティブ)
- 18. 7 大阪大学大学教育実践センター客員教授
- 19. 4 大阪大学教授大学教育実践センター

所 属：大学教育実践センターキャリア教育支援部門
専門分野：キャリアダイナミクスデザイン、知識経営学

山 本 仁 (やまもと ひとし)

安全衛生管理部



【略歴】

- 昭60. 3 大阪大学理学部高分子学科卒業
- 平 2. 3 大阪大学大学院理学研究科高分子学専攻博士課程修了
- 2. 3 理学博士(大阪大学)
- 2. 4 日本学術振興会特別研究員
- 3. 4 通商産業省工業技術院大阪工業技術研究所研究員
- 9. 4 カナダ・アルバータ大学化学科博士研究員
- 9.10 通商産業省工業技術院大阪工業技術研究所主任研究官
- 12. 5 大阪大学助教授大学院理学研究科
- 16. 4 安全衛生管理部兼任
- 19. 4 大阪大学教授安全衛生管理部

所 属：安全衛生管理部
専門分野：高分子錯体化学、構造生物無機化学、核磁気共鳴法

八鹿寛二名誉教授(医療技術短期大学部)逝去



本学名誉教授八鹿寛二先生は、平成19年2月15日(木)肺炎のため逝去されました。享年80歳でした。

先生は、昭和26年3月京都大学理学部動物学科を卒業、同年大阪市立大学工学部助手、昭和28年2月大阪大学医学部助手、同分校講師、同教養部助教授を経て、昭和42年大阪大学医療技術短期大学部教授に就任されました。平成2年3月に停年退官されるまで23年間にわたり一般教育生物学を担当し、溢れる情熱、豊かな見識、温厚な人柄、さらに高度の学問的背景をもって医療専門職者の学識

の向上に努め、一般教育主任として、後進の指導育成に多大な貢献をされました。卒業生からは、大阪大学の教員をはじめ、医療技術分野で数多くの優れた指導者が輩出しています。

また、専門分野の動物発生学、特に昆虫の変態機構に関する内分泌腺の実験形態学的及び細胞・組織学的研究においては、当時としては未だ不明であった数々の変態機構の詳細を明らかにされました。停年退官後も、先生の研究への熱意は益々盛んで、ヒト脊髄中心管のクモ膜下腔への開口を明らかにするとともに、人工血管の閉塞の機構や濃厚海水中でも生存できる日本産トウゴウヤブカ幼虫の尾葉上皮細胞の構造、及び尾葉細胞が幼虫の体液の浸透圧を調節する機構も明らかにされました。

以上のように先生は、生涯熱意を持って研究に取り組み、動物発生学の発展に寄与するとともに、多年にわたる教育活動を通じて、多くの医療専門職者並びにその教育研究者の指導育成に尽力されました。

多くの人から慕われた先生の穏やかで温かなお人柄を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院医学系研究科・医学部)

後藤誠一名誉教授(工学研究科)逝去



本学名誉教授後藤誠一先生は、平成19年2月18日(日)、病気療養中のところご逝去されました。享年66歳でした。

先生は昭和15年5月29日大阪府にお生まれになり、昭和38年3月大阪大学工学部精密工学科をご卒業、昭和40年3月同大学大学院工学研究科応用物理学専攻修士課程を修了、昭和42年7月に同博士課程を退学されると同時に同大学工学部附属超高温工学研究施設助手に採用、昭和46年11月大阪大学より工学博士の学位が授与され、昭和49年1月同助教授にご昇任されました。昭和61年5月には同教授に昇任され、平成15年4月同研究施設の改組により工学研究科附属原子分子イオン制御理工学センター教授に配置換となりました。この間、平成4年4月より11年間超高温工学研究施設長を、引き続き平成15年4月

からは原子分子イオン制御理工学センター長を併任され、平成16年3月31日定年退官、同年4月名誉教授の称号を授与されました。その後、平成16年4月より1年6ヶ月にわたり財団法人国際高等研究所フェローを、平成16年6月からは文部科学省産学連携コーディネーターを務めてこられました。

この間、先生は大阪大学内外および学協会で多数の委員を歴任され、また、広い視野と高邁な見識で学生の教育、研究の推進並びに後進の指導育成に努められ、多くの優れた研究者、技術者を社会に送り出されました。退官後は社会における科学技術の役割についての研究を進められる一方、地域コミュニティーの組織化、科学技術の産業化なども手がけられました。

先生のご研究は、主として高温プラズマの診断法の研究開発と生成制御並びにプラズマ応用に関するもので、磁場反転配位(FRC)プラズマに関して総合的な研究領域を形成され、これは近年国際原子力機関のコーディネート・リサーチプログラムの代表的活動として採用されました。プラズマ応用に関する研究としては、インバータプラズマ装置やエネルギー可変単色イオンビーム照射装置を開発されました。以上のように、先生は、本学における研究の推進、学生の教育、後進の育成並びに我が国の学術と技術の発展のために多大の貢献を果たしてこられました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院工学研究科・工学部)

今井 豊教授(経済学研究科)逝去



経済学研究科教授今井 豊先生は、病氣療養中のところ
2月21日(水)逝去されました。享年63歳でした。

先生は、昭和42年3月慶應義塾大学経済学部を卒業後、
米国カリフォルニア大学ロスアンゼルス校経営大学院に
進学、米国ライス大学大学院経済学博士課程に移籍された

後、昭和46年5月、同大学よりPh.D.を取得されました。
昭和47年4月、米国カリフォルニア大学ロスアンゼルス校経営大学院助教授、同6月、ボストン・コンサルティング・グループ主任研究員を経て、昭和50年10月より経済協力開発機構(OECD)にて要職を歴任され、平成15年5月、国別審査部長から大阪大学大学院経済学研究科教授として赴任されました。

先生の研究業績は、OECD諸国の経済政策にかかわる数多くの分析に加え、通貨政策、企業統治、企業家論と多岐にわたりますが、最近では、各国医療制度の比較研究を中心的に行われており、大阪大学においては、本学で初めての医療経済学の講義を担当され、大学院生の指導にあたられました。今後の発展が期待される分野だけに、先生を失ったことは大阪大学にとって、また経済学界にとっても大きな損失であります。ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院経済学研究科・経済学部)

平成19年度いちよう祭開催

いちよう祭は、本学の創立記念日である5月1日を祝い、全学をあげて新入生を歓迎するとともに、教職員・学生の親睦を図ることを目的に毎年開催されます。

今年も、昨年に引き続き、高校生をはじめ学外の方に本学の教育・研究の内容を知っていただくため、以下の日程により開催します。

教職員・学生の皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

日 程：

平成 19 年 4 月 30 日(月・振替休日)・5 月 1 日(火)

- ・大学主催の各種行事（学内施設開放、展示会、映画会、講演会など）
- ・学生団体による協賛行事（スポーツ大会、園遊会など）
- ・模擬店

問い合わせ：総務部総務課総務係 TEL：06 - 6879 - 7014



大阪大学室内楽アンサンブル第4回演奏会

大阪大学室内楽アンサンブル（OUCE）は、クラシック音楽の日常的な練習会および定期的な演奏会活動を通して、大阪大学の文化的基盤の醸成と大阪大学構成員間のコミュニケーション促進に微力を尽くすことを目的として、平成 17 年 4 月に設立されました。大阪大学の大学祭行事の一環として年に 2 回（春・秋）MO ホールにおいて演奏会を開催し、毎回 200 名を超える皆様のご来聴をいただきました。第 4 回演奏会はいちよう祭関連イベントとして開催いたしますので、皆様お誘い合わせの上ご来聴賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

詳しくは OUCE のホームページ（<http://www.mls.eng.osaka-u.ac.jp/ensemble/>）をご覧ください。

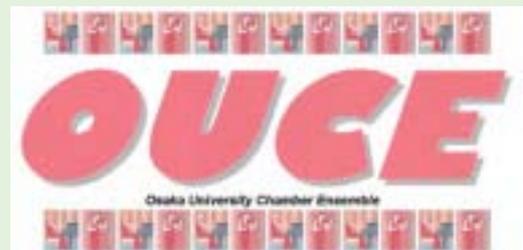
問い合わせ先 tsukuda@chem.eng.osaka-u.ac.jp, horii@biken.osaka-u.ac.jp

日 時：平成 19 年 4 月 30 日(月・振替休日) 会場 13：30、開演 14：00

場 所：大阪大学コンベンションセンター MO ホール

入場無料

演奏曲目：ベルトミュー	フルート三重奏曲「四つの小品」
グリンカ	悲愴三重奏曲 第 1、3、4 楽章
ファンク	チェロ四重奏曲より アダジオ、フーガ
ラフマニノフ	ピアノ三重奏曲 第 1 番
モーツァルト	弦楽四重奏曲 第 21 番 第 4 楽章
ブラームス	ピアノ三重奏曲 第 1 番 第 1 楽章
ブラームス	ピアノ四重奏曲 第 1 番 第 1 楽章
グリーク	ホルベルク組曲より 序曲
チャイコフスキー	弦楽セレナーデより ワルツ



休憩時間中、ホールロビーにてリコーダー演奏を行います。

モーツァルト 5つのディベルティメント
KV.439b より 第 3 番

(OUCE)

第2回ホームカミングデイ開催

本学卒業生及び教職員OB等の方々が直接キャンパスを訪れ、旧交を温めるとともに、「今」の大阪大学をご覧いただく「大阪大学ホームカミングデイ」を今年も下記のとおり開催します。

開催日：平成19年4月30日(月・振替休日)

場所：大阪大学豊中キャンパス

次第：

挨拶と講話 (14:00~14:30 共通教育本館(イ号館)2階講堂)

- ・ 大阪大学総長挨拶 宮原秀夫 総長
- ・ 大阪大学同窓会連合会会長挨拶 熊谷信昭 元総長
- ・ 講話「大阪大学と湯川秀樹博士」 金森順次郎 元総長

「素粒子を拓く 湯川秀樹・朝永振一郎展」内覧会

(14:30~15:30 共通教育本館(イ号館)1階)

レセプション(15:30~16:30 学生交流棟1階『宙(sora)』)

昨年(第1回)の様子は、同窓会連合会のホームページをご覧ください。

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/dousoukai/top.html>

(総務部総務課・企画推進課)

人権問題に関する映画会開催

人権問題に対する理解と学習を深めるため、下記のとおり映画会を開催しますので、教職員、学生の皆様の積極的な参加をお待ちしています。

なお、本年はいちよう祭行事の一環として開催します。

近隣地域の方々にも多数ご参加いただきますようご案内いたします。

日時：平成19年5月1日(火)

上映時間 第1回目 10時00分~11時30分

第2回目 13時00分~14時30分

会場：基礎工学部国際棟 シグマホール

上映映画：「メール」(54分)

「桂文福のふれあい人権斬」(25分)

(計79分)

問い合わせ：総務部総務課総務係 TEL:06-6879-7014

大阪大学
一人権問題に関する映画会

大阪大学では、これまで様々な人権問題の解決を目指して、講演会、研修会など地道な啓発活動を行ってまいりました。しかし、今日なおこの問題が解決したとは言えず、より一層の活動が必要な状況にあります。そこで、皆様がさらに人権問題に関する理解を深められんことを目的として、下記のとおり映画会を開催いたしますので、多数ご参加くださいますようお願いいたします。

平成19年4月1日 大阪大学総長 宮原秀夫 記

日 時	平成19年5月1日(火)
上映時間	第1回目 10時00分~11時30分 (①~②)
	第2回目 13時00分~14時30分 (①~②)
会 場	基礎工学部国際棟 シグマホール(豊中キャンパス内)
上映映画	①「メール」(54分) ②「桂文福のふれあい人権斬」(25分) (計79分)

<会場へのアクセス>

電 車：阪急電車宝塚線「石橋駅」
下車 東へ徒歩約15分
(特色・急行停車)

モノレール：大阪モノレール「新橋駅」
下車 徒歩約15分

※入場は無料です。
また車費等もありません。
※車でのご来場はご遠慮ください。



お問い合わせ：大阪大学総務部総務課総務係 TEL:06-6879-7014

(総務部総務課)

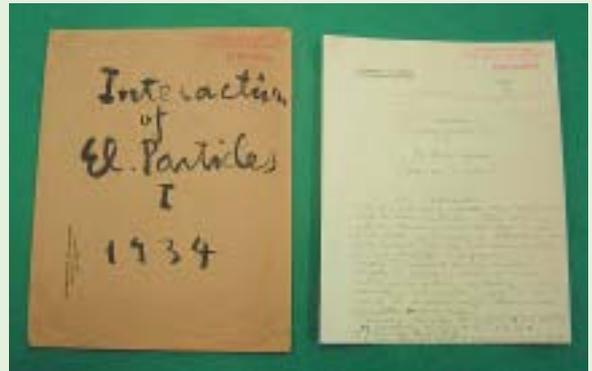
大阪大学総合学術博物館 企画展
 ユネスコ湯川年2007 大阪大学と湯川秀樹博士
 素粒子の世界を拓く 湯川秀樹・朝永振一郎展

湯川秀樹博士と朝永振一郎博士は、ともにノーベル物理学賞を受賞しました。この両博士のうち湯川博士の業績は、大阪大学で生まれました。湯川博士は、原子核物理学などの新しい学問を展開している理学部物理学教室の自由闊達な雰囲気の中で研究することを望み、1933年に大阪大学の講師として赴任しました。その翌年に、長年温めていた核力の起源の研究に画期的なアイデアを得、これを中間子論としてまとめあげ、論文として発表しました。

この展示会は、ユネスコ湯川年、また両博士の生誕百年を機に、両博士の物理学の研究と日本の科学発展に尽くされた業績をひろく皆さんに知っていただくために企画されました。両博士の足跡と両博士が切り拓かれた世界をご覧ください。

- [開催期間] 平成19年5月1日(火)～5月31日(木)
- [開催場所] 共通教育本館(イ号館)
- [休館日] 日曜日(5月3、4、5日は開館)
- [開館時間] 午前10時～午後4時30分
- [入場料] 無料
- [主催] 大阪大学
- [協力] 京都大学、筑波大学、国立科学博物館

問い合わせ：大阪大学総合学術博物館 TEL：06 - 6850 - 6715



中間子論第一論文関係資料17点をまとめて入れていた封筒と英文論文の原稿
 (大阪帝国大学の名前が入ったレポート用紙に書いています)
 (総合学術博物館)

第7回大阪大学フォーラム(グローニンゲン)

本学では、研究者の優れた研究活動を広く海外に発信するため、毎年大阪大学フォーラムを開催しています。

第7回を迎える今年度は、本学グローニンゲン教育研究センターの協力を得て、本学及びグローニンゲン大学等の研究者が、経済学の研究成果を報告します。

- 開催期間：平成19年6月28日(木)～30日(土)
- 開催場所：Hampshire Hotel (グローニンゲン、オランダ王国)
- テーマ：「Frontiers of Economics and Its Applications(新しい経済学の挑戦：理論と実証)」
- 開催内容：基調講演(1日目、2日目)および特別講演(3日目)
 詳細(講演者名、タイムテーブルなど)は大阪大学グローニンゲン教育研究センターホームページ(<http://www.osaka-u-groningen.org/forum>)をご覧ください。(英語)

主催：大阪大学、グローニンゲン大学

実行委員長：小川一夫 社会経済研究所教授

問い合わせ：研究推進・国際部国際交流課国際交流推進係(内線7038) TEL：06 - 6879 - 7038

(研究推進・国際部国際交流課)



大阪大学出版会
 新・教養書シリーズ **阪大リーブル** 2007年4月創刊
 本は人を自由にする



大阪大学出版会では、現代文明が要請する様々なテーマについて、斬新な切り口で多面的かつ理論的に取り組む本、世界と人間の見方を鍛え、読む喜び、知る喜びを味わうことのできる本として、新・教養書シリーズ「阪大リーブル」を創刊しました。ぜひ手にとってご覧ください。意欲的な新企画も募集しています。

シリーズ創刊にあたって

フランス語の「本」(livre)と「自由」(libre)を重ねたところ、そこに「阪大リーブル」の精神が込められています。そこからv/bを外すと「読む」(lire)ということになります。読書は、未知の他者との対話です。この対話は、寝ころんでも、ひなたぼっこをしながらでもできます。しかも、自分にほんとうに必要な速度で、読んでいるうち、わたしたちの思考と感受性は、ときに微かに、ときに劇的に変化します。生きるうえでのこれまでのこだわりがほぐされ、もっと広々とした場所に出て世界を見ることができるようになります。そう、「本は人を自由にする」のです。

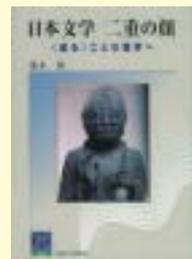


大阪大学出版会会長
 鷲田 清一



300頁・1700円+税

ピアノはいつピアノになったか? 付録CD「歴史的ピアノの音」 伊東信宏 編
 約300年前に誕生したピアノはハイドン、ベートーヴェン、ショパン、リストなどの作品や演奏法にも影響を及ぼしながら変化をとげてきた。現代の黒くて重厚なピアノに至るまでの歴史を知ることによって、ピアノが本来もっていたはずの多彩な可能性が聴きとれるようになる。付録CD「歴史的ピアノの音」では、「フォルテピアノ」のための最初のソナタ、ベートーヴェンの大胆な実験的音楽「月光」、シューベルトらしい歌謡性にあふれた「楽興の時」、ショパンのノクターンをそれぞれ当時のピアノ演奏により聴くことができる。ピアノの楽器史から音楽史を編みなおす、ピアノ愛好家、音楽史研究者、ピアニスト必読の書。



350頁・2000円+税

日本文学 二重の顔 成る ことの詩学へ 荒木 浩 著
 宝誌和尚像の顔の表皮がめくれてもうひとつの顔がのぞく…。ゆきずりの旅の男が観音の来臨と見られてしまう…。日本の古典文学や芸能のテキストを読解するとき、読むものと読まれるもの、見ること、見えること、見られることの間、不思議な変化や変身がもたらされ、古典の世界は新たな相貌を帯びてくる。著者は二重、三重に多層化・多面化するテキストの深みに分け入り、日本文学の面白さ、奥深さを読者に味わわせてくれる。私たちはいつのまにか、日本文学の魅力にとりつかれているのに気づく。図版を添え、成る をもとに構想した書き下ろし力作評論。



200頁・1600円+税

超高齢社会は高齢者が支える エイジズム プロダクティブ・エイジング 年齢差別を超えて創造的 老いへ 藤田綾子 著
 高齢化率20%の超高齢化社会を迎えた今日、高齢者の生き方は社会現象の隅々に影響を与え始めている。これまで我が国は、高齢者を弱者として位置づけてきた。しかしこの見方は、バイブートークや隔離、虐待など的高齢者差別(エイジング)をもたらしした。高齢者が弱者としてでなく、市民として誇りを持って生きる道は何か。著者は『厚生労働白書』の分析やインタビューを通し、高齢者の抱えた深刻な問題に光を当て、新たな関係性の構築やボランティア活動にその活路を見出す。

問い合わせ先：大阪大学出版会 TEL：06 - 6877 - 1614
 ホームページ <http://www.osaka-up.or.jp>

新入生のみなさんへ

大阪大学では、「カルト団体」による活動に対し、これまで学生に向け様々な場で注意を呼びかけています。4月、5月は一段と活動が活発になりますので、特に新入生のみなさんはターゲットにならないよう、十分注意してください。

ボランティアやスポーツサークルを 隠れ蓑にしたカルト団体に要注意!!

スポーツやボランティアのサークル活動を装って学生、特に新入生に近づき、機会を見て教会やビデオセンター等へ連れていき入会させてしまう、という「宗教」団体が複数存在し、残念ながら、阪大生もその被害に遭っています。

これらの団体は、「友情を深め」、「人生を考え」、「環境問題を考え」、「地域社会や国際社会に貢献する」など表面的には大変立派な活動を行っているように見えますが、その実態は特定の教祖への一方的な従属を基礎にした「反社会的な破壊的カルト」です。勧誘の手口は巧妙で、知らず知らずのうちにマインドコントロールされ、恐怖感と罪悪感を植え付けられ、いつのまにかこの組織の思うがままに操られてしまいます。そして、精神的にも、肉体的にも、経済的にも蝕まれ、皆さんの貴重な青春を失ってしまうこととなります。

これらの団体は、サークルへの勧誘以外にも、「アンケートに協力してください」とか、「人生を考えるセミナーに参加しませんか」と言って近づいてくる場合もあります。現に、

- 泊まりがけでのセミナーへの参加
- 献金や物品の訪問販売
- 他の学生の組織への勧誘

といったことを行って（行わされて）いる場合は、特に注意が必要です。

みなさんは、これらの手口に十分注意していただくとともに、常に身の回りには危険がある、ということを認識してください。

また、そのような団体であると感じた場合は、キッパリと勧誘を断るとともに、下記の学生部学生支援課に相談してください。

連絡先：学生部学生支援課
電話：06 - 6879 - 7085（ダイヤルイン）

東風西風

新しきことへの挑戦と伝統の継承

中川 八郎



中央公論社から発刊されていた「自然」に掲載された「適応酵素の話」に感銘を受け、著者である須田正巳教授の門を叩いたのは昭和31（1956）年の末であった。

須田正巳先生は大阪大学微生物病研究所の細菌化学教室の助教授であったが、当時の医学部の首脳は、第二次世界大戦後の日本の復興には日本人の体格の改善が最重要と考え、第一薬理学講座を栄養学講座に転用し、新進気鋭の須田先生をその講座の主任教授に起用して、彼らの希望を托した。

丁度この頃、医学部の古武弥四郎先生の伝統を受け継ぐアミノ酸研究と理学部の赤堀先生をリーダーとする蛋白質研究を融合した蛋白質研究所を大阪大学に設立しようとする機運がみなぎっていたが、紆余曲折を経て、昭和31（1956）年にこれが全国共同利用研究所となって実現される。

私は、昭和36年3月大学院を修了し、医学部の栄養学講座の助手となったが、昭和37年8月から3年間の米国留学から帰国後、蛋白質研究所の助手に配置転換された。

この数年の間に、欧米では心臓血管病の最も高い危険因子とされているホモシステイン血症の原因酵素の一つであるシスタチオン合成酵素（CBS）を発見する。

この酵素は肝臓に存在し、セリン脱水酵素（SDH）と同じ蛋白質であると信ぜられていた。しかし、CBSはホモシステインとセリンとを縮合してシスタチオンを合成する反応を触媒するが、SDH活性によってセリンを分解していたのでは、シスタチオンは合成されなくなる。この矛盾は二つの反応を触媒する異なる酵素蛋白質の存在を突き止めることによって解決した。その鍵は困難として避けられてきたCBSのルーチン活性測定法の開発にあった。これには泉美治先生が合成されたホモシステインが大いに役立ったほか、蛋白質研究所の研究環境が後押ししてくれた。

一方、SDH活性に日内変動があることを発表したのは1964年である。これを契機として、概日リズムの発信機構の解析と取り組むことになる。また、概日時計の存在する脳内の視床下部視交叉上核に脳へのエネルギー供給中枢があることを見出したことから、脳の栄養学という新しい研究分野を開くことにもなる。

SDHはセリンを分解してピルビン酸とする。これはブドウ糖合成（糖新生）の材料になることから、SDHは糖新生の律速酵素として働くことを利用して、栄養、温度環境、神経系、内分泌系の影響を分子レベルで解析することができるようになった。このような一連の研究から蛋白質代謝部門は「丸ごとの生化学」

の拠点と認められる。大阪で開催された第 67 回日本生化学会大会（1994 年）の会頭を務めることになったのはこうしたことが背景にあったのであろう。

適塾管理運営委員会副委員長時代には、適塾資料館を建設するために、大阪市、大阪府などと交渉を重ね、西尾正也市長からは廃校となった愛日小学校の利用を勧められた。金森順次郎総長時代になって、法善寺横丁で一緒に飲んでいた磯村隆文市長から「大阪市はそんなちっぽけなことは視野に入れてない。もっと大きなことを考えている（オリンピック誘致のことか?）」と交渉の継続を拒否されることになる。しかし、友人である龍角散副社長（当時）内藤 修君のご尽力により、資料館建設を条件にされていた緒方富雄東大名誉教授のご家族から貴重な資料のご寄贈をいただくことができた。

熊谷信昭総長からは大阪大学創立 60 周年記念資料収集委員会委員長を命ぜられる。それまで蛸足大学であった大阪大学が漸く、石橋と吹田の 2 キャンパスに統一された頃で、移転の間に貴重な資料が失われた可能性があった。これ以上の喪失を防ぐ意味で、一年間委員の間で論議を続け、資料保存の方法を確立する一方で、大阪大学に資料館を設立することを提言した。

1979 年には学生生活委員長に就任する。大阪大学の紛争は学寮問題に端を発したが、危ない橋を渡りながら、寮のすべてを新寮として建て替えることの承認を文部省から取り付け、紛争解決への道をつけた。この間、無駄な日々を送ったというわけではない。各学部を代表する委員と連日連夜紛争解決について激論を闘わしたが、その間に、専門領域に蘊蓄を傾けられる委員たちに啓発されることが多かったからである。この経験を生かして、紛争解決後に大阪大学インターファカルティ・クラブを創設して学問の交流を図った。このクラブは多くの共鳴者を得て 10 年ほど続いた。

大学では創意が求められる。しかし、古いものを破壊すると新しい発想が生まれると思い込むのは幻想である。個人の創造への意欲に加えて、異なる専門領域の人々と交流のできる総合大学の特徴を十分活かせば、必要な時に発想の転換ができるし、温めてきた新しい知恵の創成を助けてくれる。更に、大学の伝統、学風は発想醸成のよき場を提供してくれる。これは常に新しいものを追い求めてきたにもかかわらず、大阪大学の伝統であるアミノ酸の代謝の研究を死守し、いつのまにか大阪大学の歴史の守り人になっていた私の感想である。

「都市も、教育も、絵も、人が原点」(後編)

名誉教授

大久保 昌 一

前号につづき、大久保昌一名誉教授のインタビューを掲載します。

今号では、キャンパスづくりへの思い入れ、尊敬する緒方洪庵の教育観、ご自身の絵心などをお話いただきました。

「地域に生き世界に伸びる」という阪大のモットーはその当時にできたのですか？

医学部の和田 博教授が委員長を務めた委員会の発案^(注)です。当時、私は山村雄一総長に二つのことを進言しました。一つは実質的な意味での阪大の将来ビジョンを描くための将来計画懇談会のようなものをつくること。もう一つは大学の研究・教育というインテンションのペアとして、その成果を立地している地元に還元するエクステンションを積極的に進めることです。山村総長は、早速、ビジョンづくりの委員会を立ち上げられました。そうした委員会の成果の一つが、「阪大のモットー」として掲げられている「地域に生き世界に伸びる」という言葉です。

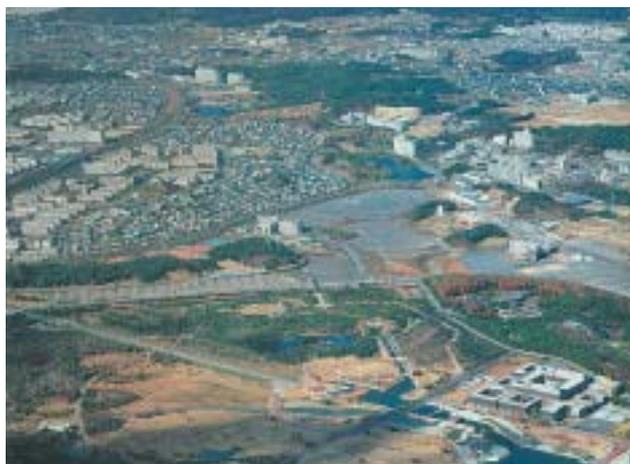
キャンパスにも先生が設計されたところがあるとか。

豊中キャンパスの待兼山庭園、プロムナード(ともに1988年).....などがあります。

待兼山庭園は、上方から見おろすとよくわかるのですが、白州の川と松林、遠方の住宅街が調和するように設計されています。プロムナードは、学生の憩いの場のつもりだったんですが、今は駐輪場になっているようです。



開園当時の待兼山庭園



昭和50年半ばの吹田キャンパス
(中央右手の茶色の建物が本部棟、右下は民博)

そんな中での法学部への転身は異色と写りますが。

みなさんそうに言われるのですが、僕の中では工学も法律も同じ線につながっているんです。工学部で学んだことは「結果がよければすべてよし」という考え。法学部は逆にプロセスを大事にします。結果は二の次。言い換えれば工学部は器をつくる場所、法学部は中身を考える場所。私の考える都市計画や住宅設計には、人間的な過程、人と自然との調和がその中心にあります。都市行政を進める上では工学的な要素に加えて人間的な配慮が欠かせません。この二つが合体して本当の都市、住居、環境の集合体ができ上がるわけです。

つまり人が原点ということですね。

人と人とのつながり、つまりコミュニケーションができるかという視点でモノを考えることが大切です。それとまちづくりというのは、市民が自分たちの手で自分たちのために進めていくのが本来の姿であって、それを行政に実現させるための力として法律は大きなツールになります。ただ僕の場合は、法学部の前に不定冠詞の“a”が付くと書いてありますが(笑)。

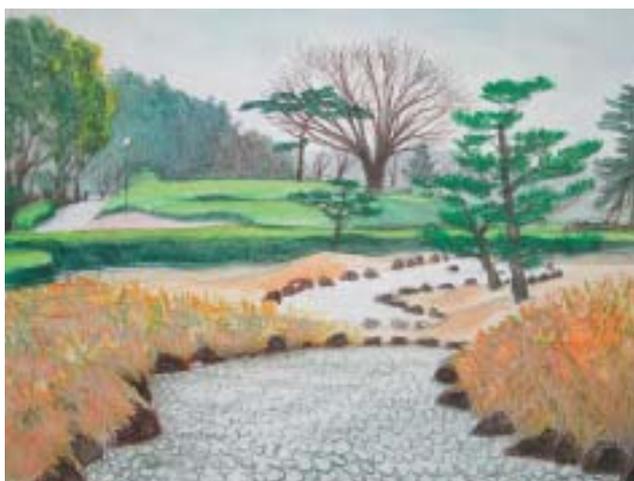
(注) 将来計画懇談会教育・研究体制専門委員会(和田 博委員長)が、昭和56年11月にまとめた中間答申「地域に生き世界に伸びる - 教育・研究体制の将来計画」が初出である。(評価・広報課調べ)

適塾についてお伺いします。

適塾が果たした一番大きな役割は緒方洪庵の「教育、人づくり」です。洪庵は学問の力量もさることながら教育者としての人格、医師としてのヒューマンイズムが卓抜した人でした。彼が実践した塾生への直接的指導、科学的思考法は教育の原点と言えるものです。そこに八重夫人のホスピタリティーが支えとなってすぐれた人材をたくさん生み出した。大坂という合理主義、自由主義を重んじる土地柄もよかったのですが、緒方洪庵と八重夫人の人間の魅力にひかれて日本中から多くの門下生が集まったということでしょう。



待兼山庭園にて（2007年2月）



待兼山庭園（2004年2月）



適塾記念会機関誌「適塾」No.38（左）同No.39

機関誌「適塾」の表紙絵を長年描かれていますが。

昔から適塾記念会の理事をしているということもあって、第18号（昭和60年）から描いています。医学部の伴忠康先生（故人）のあとを受けてずっと続けています。一番気に入っているのが第39号（平成18年）です。

絵はいつ頃から始められたのですか。

小学校の頃、手近にあった王様クレヨンで風景画をスケッチして、それがたまたまよかったのでしょうか、学校からメダルがもらえた。それからです。今でも描きたくならすぐ描けるよう道具を持ち歩いています。絵心をそそる風景に出会えばすぐ絵筆をとりまします。30分もあれば描き上げます。絵を描くことは僕にとってのリフレッシュメントなんですよ。

ところでお酒はやめられたとか。

医者にいったら身体がボロボロですよと言われた。それできっぱりやめました。酒の上での失敗や笑い話もたくさんありましたが……。普通「失敗は成功の母」と言いますが、僕の場合は「失敗は次の失敗の母」になってしまうことが多かった（笑）。今は懐かしい思い出です。

<コメント>

大久保先生 = 豪放磊落、型破りといった印象があるようです。それでいて人をなごませる不思議な親近感を持っておられます。しかし、本当の素顔は相手に対する気遣いと繊細さを持ち合わせた方のように思います。

世界は今

米国ベイエリアから

大阪大学名誉教授（前サンフランシスコ教育研究センター長） 室 岡 義 勝

ベイエリアってどこ？

カリフォルニアのシリコンバレーと言えば、世界の経済・科学技術を先導し、起業家魂がうごめいている活火山のような地域として、今や世界中の人々に知られています。でもそれがベンチャー企業で埋った都市なのかシリコン関連工場が立ち並ぶ谷間なのか、人それぞれ勝手に想像しています。ベイエリアという呼び名は、米国中部や東部の人にとってなじみが無く、日本においては全く知られていません。そのベイエリアから日本の大学に情報発信を始めたニュースから紹介しましょう。

大阪大学が、全学をあげて国立大学初の海外拠点を米国サンフランシスコに設立して、早3年になります。サンフランシスコは、行ってみたい世界の都市 No. 1 であったり、住んでみたい都市 No. 1 であったりと人々の憧れの都市です。日本の外務省が派遣する大使館や領事館の中でもサンフランシスコ総領事館は、人気 No.1 と言われています。ご存知ゴールデンゲートブリッジはサンフランシスコベイの狭い入り口に架かっています。車でこのベイをサンフランシスコから南下するとスタンフォード大学のある Palo Alto そしてこのベイの南端にある都市、San Jose（サンノゼ）に到達します。この100万人都市サンノゼがシリコンバレーの中心です。さらにイーストベイを北上すると、



ベイエリアと日本の大学海外拠点

Oakland そしてカリフォルニア大学（UC）パークレー校のある Berkeley、ワイナリーが点在するナパバレーの南を回ってウェストベイを南下するとサンフランシスコに帰ってきます。このベイを高速道路で一周するのに5時間かかります。これが一般にベイエリアと呼ばれる地帯です。カリフォルニア大学は、全部で10校（キャンパス）あり、UC San Francisco と UC Berkeley より少し離れたところに UC Davis, UC Santa Cruz, UC Merced 校があります。

「JUNBA」ってなに？

さて、こうした世界的にも高いレベルの大学がこの地域にあり、その学生や卒業生が創造性豊かな知識と技術を持って企業を起こしてきたのがシリコンバレーの始まりです。ここに、東大医科学研シリコンバレー事務所（2006年3月末閉鎖）、法政大アメリカ研究所、阪大サンフランシスコ教育研究センター、九大カリフォルニア事務所、鹿児島大ベンチャービジネスラボシリコンバレー事務所、東北大米国代表事務所、横浜市大シリコンバレー事務所と、この3年の間に日本の大学が続々進出してきました。その中には、卒業生の自宅や会社の一部を事務所に行っている大学拠点もありますが、東北大のように特任助教授を7名も任命している拠点もあります。しかし教授と事務員が駐在しているのは阪大だけです。いずれにしても大学の海外拠点が目指すところは同じようなものですから、互いに情報を交換し、イベントなど助け合うことを目的にして発足したのが、ベイエリア大学間連携ネットワーク、Japanese University Network in the Bay Area（JUNBA）と言うわけです。

このJUNBA 結成を記念して、各大学学長に呼びかけて、本年1月はじめに JUNBA アカデミアサミットをサンフランシスコ総領事館で開催しました。このサミットには、上記大学と日本学術振興会（JSPS）の他に慶応大学も参加し、早稲田大、東京工大および日本貿易振興機構（JETRO）もオブザーバー参加し、シンポジウムの開催や留学生の支援、学生の米国研修などの支援を謳ったサミット宣言を取りまとめました。次いで、第1回 JUNBA シンポジウムをスタンフォード大学において開催しました。今回は、ナノマテリアルサイエンスをテーマに選びました。この JUNBA サミットとシンポジウムは、『米国シリコンバレー』

「から産官学連携により日本の大学を変えようという組織が発足した」と、日本の新聞にも大きく報道されました。



JUNBA アカデミアサミット会議後の記者会見

JUNBAの大学各拠点が目指しているものは、私たちが開拓してきた阪大サンフランシスコセンターの活動とほぼ同じです。ではそうした阪大センターの活動を紹介します。

阪大の知名度アップをめざして

2006年4月には、サンフランシスコ大地震100周年を記念して、UC Berkeley および環太平洋大学間連合と共同で阪大がホストとして、地震シンポジウムを開催しました。12月には、阪大の生命医歯薬関連の4つのCOEを中心とした「Frontier of Biomedical Research and Beyond」という阪大フォーラムをサンジエゴで開催しました。また、産業科学研究所のナノテクノロジーおよびナノバイオサイエンスワークショップをサンフランシスコおよびUC Berkeleyにおいて開催しました。阪大の優れた研究成果や技術をこうしたシンポジウム、セミナーなどを通して米国に紹介することにより、阪大の知名度をあげ、共同研究や技術移転に発展することを期待しています。



阪大フォーラム



地震シンポジウムのポスター

英語でコミュニケーションできる阪大生

理工系語学研修は、工学研究科で企画して数年前から実施しています。現在は、ワシントン大学およびUC Santa Barbara 校において、夏休みの4週間行っています。理工系の大学院生を対象にした阪大生用特別カリキュラムですから、民間の語学研修とは違います。参加者は確実に語学力は上がりますが、そうした直接の成果より外国生活を体験して国際感覚が養われ、勉学へのモチベーションが高くなる事の方が成果として大きいでしょう。昨年からは希望者を対象にシリコンバレー研修も実施しています。



シリコンバレー研修

UC Berkeley 校のキャンパスや研究室を見学したり、Stanford 大学ではナノテクノロジーの講義を聴いて関連施設やバイオ関連研究室も留学している先輩の案内で見学しました。バイオベンチャー企業のインキュベーション施設見学やシリコンバレーについてのレクチャーを受けたり、インテルやNASAの博物館も見学しました。

理工系だけでなく、高等司法研究科の学生用短期研修も、ワシントン大学およびUC Berkeley校で毎年実施しています。米国の法律事務所や法廷も見学します。昨年は上記2つの短期研修中に、ベイエリアで活躍されている阪大同窓生との意見交換懇親会も持ちました。こちらで10年以上暮らしている先輩からのアドバイスに学生たちは大いに刺激を受けました。

北米で活躍する同窓生

同窓会と言えば、阪大北米地区同窓会を結成し、宮原総長、同窓会連合幹事長の鈴木副学長や橋本国際交流推進本部長などにご出席いただいて、サンフランシスコのホテルで設立総会を開催しました。センターに登録している北米地区同窓生は、現在470名です。寄付金などの租税免除を受けられる米国の合法的NPO法人として登録しました。今年、5月にニューヨークで総会を行う予定です。米国社会は実力主義で、出身大学など役に立たないと思われがちですが、実際は高校、大学の同窓生間の結びつきは強く、信頼できる間でのコネクションとして大変重視されています。阪大生も卒業生も困った時、事業を行う時などこの北米同窓会組織を利用してください。そして、事業に大成功した暁には、母校に巨額の寄付をしてあなたの名前を付けた建物やホールを建ててください。こちらではそれが最も名誉なことだと思われています。

米国からの授業をライブで

阪大の全学共通教育科目の中に米国からの遠隔授業が2科目あるをご存知でしょうか？1学期「世界は今 サンフランシスコから」と2学期「学問のすすめ－米国大学キャンパスから」のそれぞれ2単位の科目です。前者は日本語で、後者は英語による講義です。

「世界は今 サンフランシスコから」は、ベイエリアで活躍されている方々の留学や国際的な仕事の経験談を直接聞いて、世界の今を理解し、国際社会で暮らし、チャレンジ精神や起業家精神を学ぶことを目的にセンターのスタジオから毎週ライブの遠隔授業を配信しています。授業中に、テレビ会議システムを介して受講生と講師との質疑応答が行われます。この講義は、サンフランシスコ総領事、JETRO 所長、外資銀行重役、ベンチャー企業の社長、カリフォルニア州弁護士、JSPS 所長、投資会社の社長といった方々をお願いしています。

初年度は、新入生に宣伝した効果もあって、受講生が170名も押しかけて、講義室は立ち見が出ました。この受講数に気をよくして、遠隔授業は大成功！と学内外に触れ回った自信は、最終回のアンケート調査で打ち砕かれました。ある学生曰く、「世界は今という講義タイトルにもかかわらず、シリコンバレー中心で、世界視野の講義が少なかった」、「そちらは夕方こちらは朝なのでテンションの



遠隔講義風景（豊中キャンパス）

違いがしんどかった」、「質問時間が短く、質問もしがたかった」、「眠ってしまうことも多かったが、いい刺激をもらえた授業だった」などの正直な意見です。こちらの画面には、前の方の席ですらりと居眠る受講生の風景が大写しになるので、著名人ばかりの講師に申し訳ありません。こちらでは大学生が授業中に眠ることなど考えられません。ある女子学生から、「米国で活躍している女性はいないのか」という指摘を受けて、2年目は日系のマスコミを代表する女性社長および日本の漫画とアニメを全米に紹介してマンガブームを巻き起こした社長にも講義をお願いしました。こうした努力にもかかわらず、本年度の受講生は50名弱でした。この講義 (<http://www.cep.osaka-u.ac.jp/>) を一番楽しんでいるのは私自身かもしれません。でも、阪大生全員に聞かせたい。

本年度後期から、世界のトップランキングされる米国12の大学の先生方を招いて、米国大学の英語による講義を実体験するとともに、学問の魅力およびキャンパスライフの楽しみを学ぶことを授業目標にたてて、「学問のすすめ－米国の大学キャンパスから」(Academic World - Insights from American Universities) という特別科目を配信しました (<http://www.osaka-u-sf.org/elearning.shtml>)。さて、何人の学生が聴講してくれ、英語の授業にどれだけついていけるだろうかと心配と楽しみが交差しました。ふたを開けると、約50名の初回出席者からだんだん選抜されて最終回は20名弱にまで減少しました。その分居眠りする学生はいなく、英語での質疑応答も活発で、阪大生の面目を保ちました。でも、やっぱりもっと受けて欲しい。

OSAKA を知らない米国の学生

海外拠点の目的の1つは、大学間、学部間協定校との連携強化と留学生交流を盛んにすることです。特に、欧米からの留学生を増やし、阪大からできるだけ多くの交換留学生を送り出すことです。そこで、カリフォルニア大学の留学生フェアに阪大ブースを出して阪大を知ってもらうこ

とから始めました。UC Riverside, UC Los Angeles, UC Berkeley, UC Davis などこのキャンパスもこうした留学生フェアは盛んで、数百人の学部生が興味深い留学先を探して世界各地のブースを回ります。日本に留学したい学生も多いのですが、大阪を知らない学生も多くいます。学部の授業にはかなりのレベルの日本語が必要なので留学生数は限られます。米国の大学は単位互換が厳密なこと、奨学金問題、夏休みの短期留学希望が多いことなど、阪大側の受け入れ態勢が充実しないとリクルートもなかなか難しいところがあります。



UC Davis 校の留学生フェアに出展した阪大ブースで説明する Tim Wagner 君

コミュニティーの一員として

ベイエリアには日米関連の種々なネットワークがあり、日本の大学の海外拠点設置は大いに歓迎され、コミュニテ



「北カリフォルニア桜祭り」の大阪関連ブース。右端は大阪府事務所長、その隣は筆者。

ィーの会合に招かれて講演も行っています。日米経済ソサエティー、ジャパンソサエティー、起業家ネットワーク、パイオネットワーク、IT ネットワーク、サンフランシスコ大阪姉妹都市協会、などの他に総領事館、JETRO、JSPS の催しなども多く、参加するたびに人のネットワークが広がっています。知財本部 先端科学イノベーションセンターと連携した技術移転もこうしたコミュニティー活動を通して今後さらに発展することでしょう。

気軽にセンターにお立ち寄りを

このセンターは、大阪大学のあなた方のためのものです。アメリカへの留学、出張の際にはサンフランシスコセンターに是非お立ち寄り下さい。空港からパートで30分です。一度センターのホームページを開けて見て下さい (www.osaka-u-sf.org)。現地職員の Tim Wagner 君が作成してくれています。彼は、写真のセミプロで、ここに載せた写真のいくつかも彼が撮ったものです。国際学会の途中に立ち寄られる教員や他大学の教職員、企業からの訪問者も多く、3年間で600名近い方に来ていただいております。この意味でも、北米拠点をまずサンフランシスコに設置したのは英断であったでしょう。

むろおか・よしかつ

プロフィール

大阪大学大学院情報科学研究科教授、工学研究科教授（兼任）、生物工学国際交流センター長などを経て、2004年4月より2007年3月までサンフランシスコ教育研究センター長。JUNBA会長。大阪大学名誉教授。現、広島工業大学情報学部健康情報学科教授。

クラブ&サークル紹介

硬式庭球部

テニスの魅力はやはり試合に勝った瞬間にあると思います。それは他のスポーツでも同じだとは思いますが、テニスでは時に3時間を超える試合をたった一人で戦いぬくことがあり、その試合に勝ったとき、練習してきて、テニスをしてきてよかったと思うことができます。また、テニスはシングルス・ダブルスと試合形式があり、戦い方が変わってきます。シングルスでは自分ひとりで戦略を考えて戦い、ダブルスではパートナーと話し合って二人でポイントを取っていきます。このこともテニスの魅力の一つだと思います。

忘れてはならないことは、テニスは楽しいということです。見ているだけでも十分に楽しいのですが、やはり実際にラケットでテニスボールを打ってみることで、そして、実際にテニスをしてみると、もっと上手くなって、その力を試合で出したいと思うはず。硬式庭球部はいつでもテニスをする事ができ、必ず上手く、そして強くなることができます。硬式庭球部の目標は、男



女とも国立七大学総合体育大会（七大戦）優勝、リーグ戦二部昇格です。目標を達成するため、部員一丸となって練習に取り組んでいます。



部長 石堂 泰志(理・化学4回)

コメント

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。私達硬式テニス部は日々練習に取り組んでいます。興味のある方は、足を運んでください。



練習場所：豊中キャンパス内体育会専用コート
練習日時：月火金 15時半～18時 木 13時半～16時半
土 9時～16時半(授業優先)

部員数：22人

連絡先：太田督 090-5361-3409

tadashi.o2o7@docomo.ne.jp

URL：<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Club/9227/>

編集後記

平成19年度がスタートして、今年も大阪大学は多くの新入生を迎えました。4月2日に行われた入学式では、開花したICホールの桜の前で記念写真を撮られている姿も見受けられました。緊張した面持ちで入学された新入生をとりまく環境は、スタートしたばかりの大学生活のみならず、今回クローズアップで紹介しました「KOAN」をはじめ、10月に控えている大阪外大との統合など、大学としても新たなことが多くあります。阪大全体が新しい阪大に向かって着実に前進しています。



(瀬尾)

ICホール前の桜

大阪モノレール「彩都線」延長

大阪モノレール「彩都線」の「阪大病院前駅」から「彩都西駅」まで、4.2kmの延伸工事が終了し、3月19日(月)から営業が開始されました。

この延伸開業に伴い、阪大病院への利便が向上するとともに、大阪大学と大阪外国語大学や彩都の距離がぐっと近くなりました。



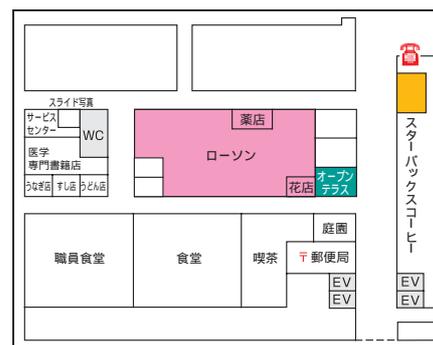
写真：大阪高速鉄道株式会社提供

スターバックス(阪大病院店)オープン!

医学部附属病院では、ホスピタルローソンの開業に続き、支援法人である(財)恵済団の協力のもと、2月20日(火)1階中央廊下に「スターバックス阪大病院店」がオープンしました。

また、3月16日(金)には、スターバックス向かいのライントコートを改装してオープンテラスを設置しました。

これらは、病院アメニティ計画の一環として患者サービスの向上のため設置されたものです。



交流協定大学紹介

バンドン工科大学(インドネシア)

Institut Teknologi Bandung



ナレッジセンター

バンドン工科大学「Institut Teknologi Bandung (ITB)」の創立は、1920年にまで遡ります。インドネシア初の技術系高等教育機関として創立されましたが、当初は、1学部1学科というごく小規模なものでした。その後、占領期、独立革命期を経て、1959年3月に現在の形になりました。

ITBは今日、インドネシアにおける最も優れた理工系大学と評価されています。1学年の定員は、2,000人弱ですが、毎年35万人ほどの受験者が殺到する超難関校です。学部は

数学・自然科学、産業工学、土木工学・計画、鉱産、芸術デザインの5学部があり、大学院や、付属機関としてナレッジセンター、産学共同研究機関、計画・情報システムセンター、コンピュータセンターなどの学術施設も充実しています。

ITBの卒業生の活躍は、インドネシアの工学界の大きな要となっています。設立以来、科学技術開発の振興に寄与してきましたが、今日では、国家開発プロジェクトに発展しているものも少なくありません。

本学とは、8年前から研究交流活動を行っており、特に近年、その交流が活発になり、本年3月には大学間学術交流協定の締結に至りました。技術革新に寄与する我々の学術交流は、両国にとどまらずアジア諸国の発展に貢献するものと期待されます。



中央庭園と産業工学研究棟

Office: Jl. Tamansari 64 Bandung 40116,
Campus: Jl. Ganesha 10, Bandung 40132

Indonesia

<http://www.itb.ac.id/>

阪大NOW No.96 2007 4月号

2007年4月20日発行

編集・発行 大阪大学総務部評価・広報課 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1
TEL: 06(6879)7017 FAX: 06(6879)7166
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail: souhyokoukohou@ns.jim.osaka-u.ac.jp